

Title	(浄瑠璃)古活字版系写本二種 : 関川本(浄瑠璃)の紹介を中心に
Author(s)	信多, 純一
Citation	大阪大学文学部紀要. 1980, 20, p. 1-86
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11022
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〔浄瑠璃〕古活字版系写本二種

— 関川本〔浄瑠璃〕の紹介を中心に —

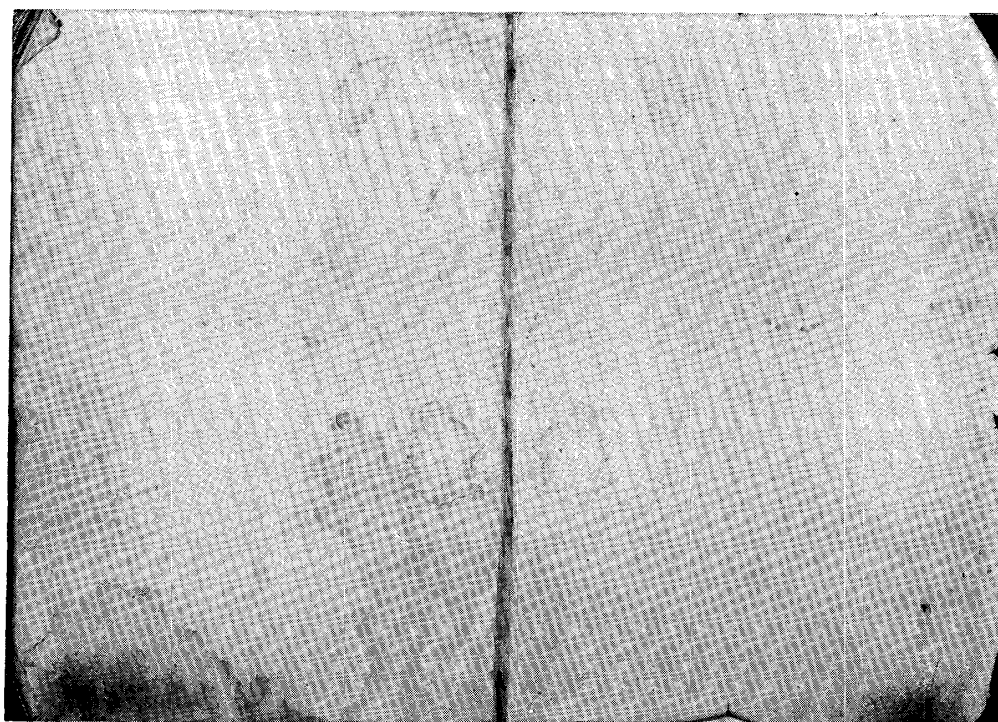
信
多
純
一



裏表紙

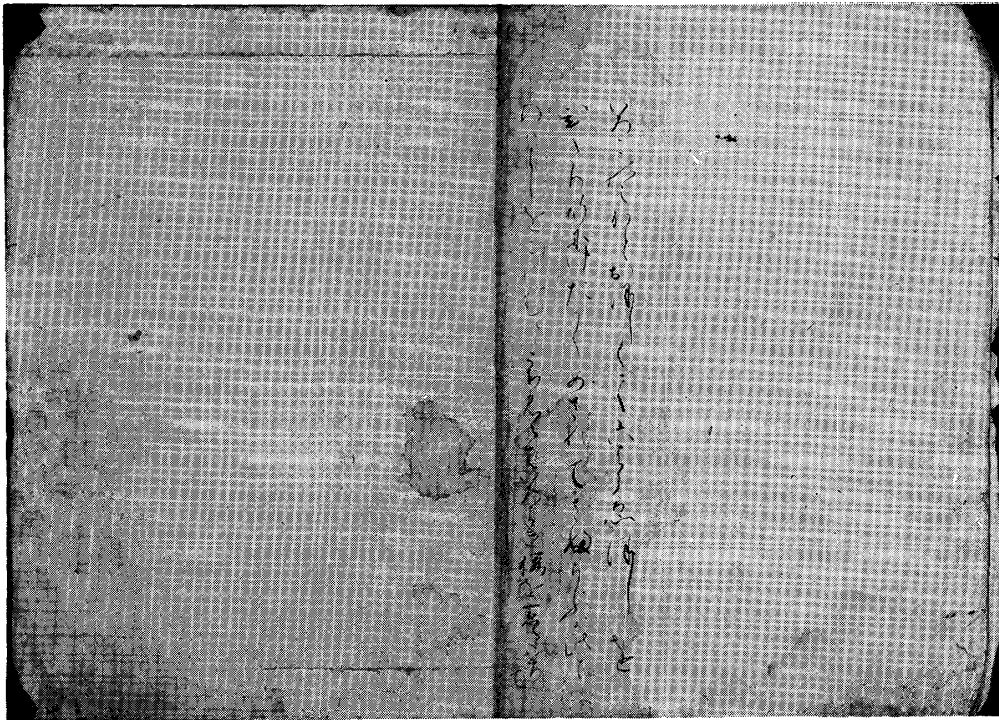


表紙



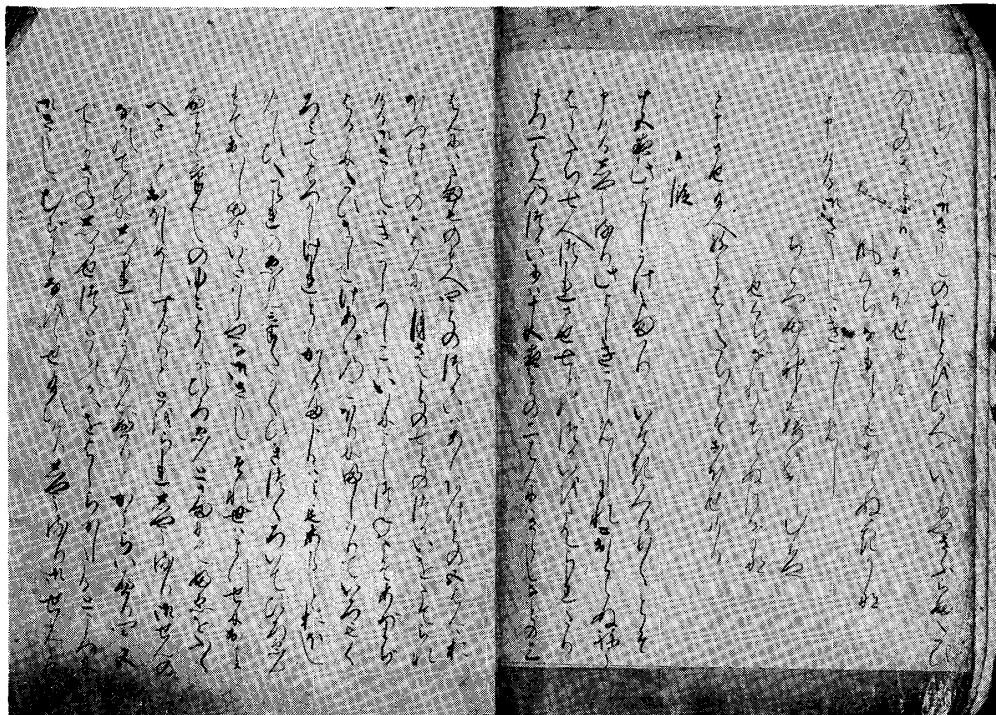
1才

見返



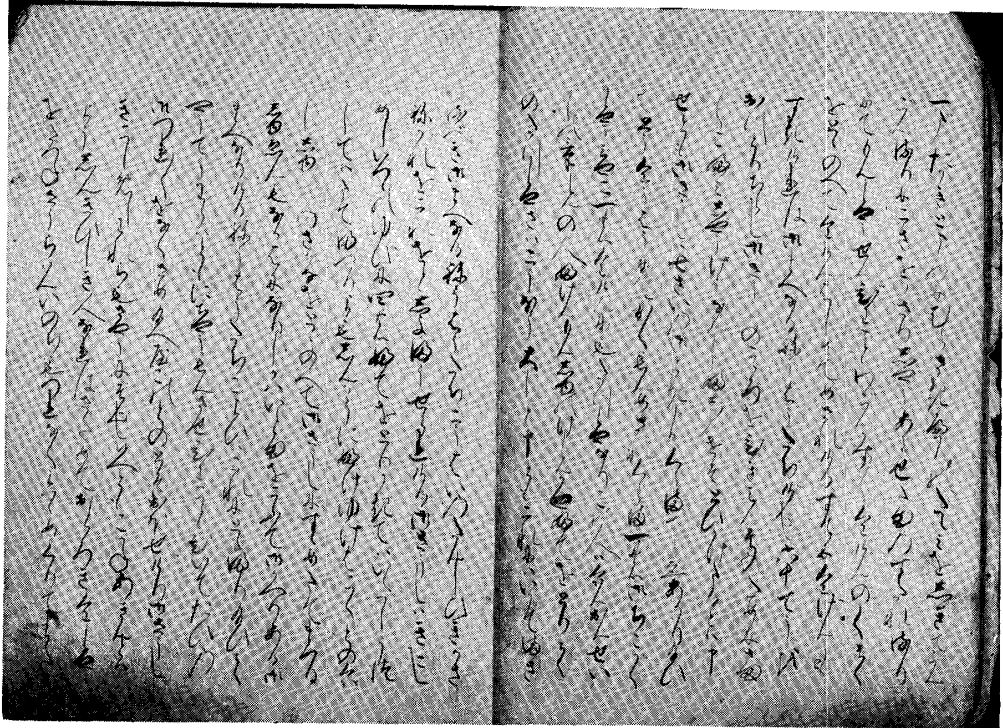
2オ

1ウ



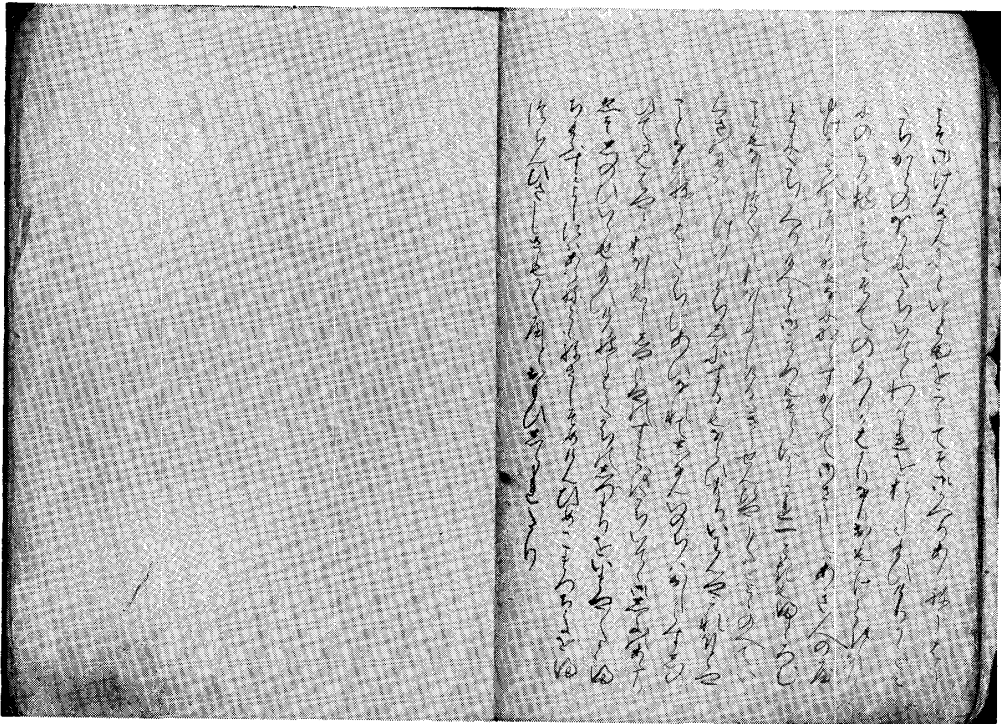
3オ

2ウ



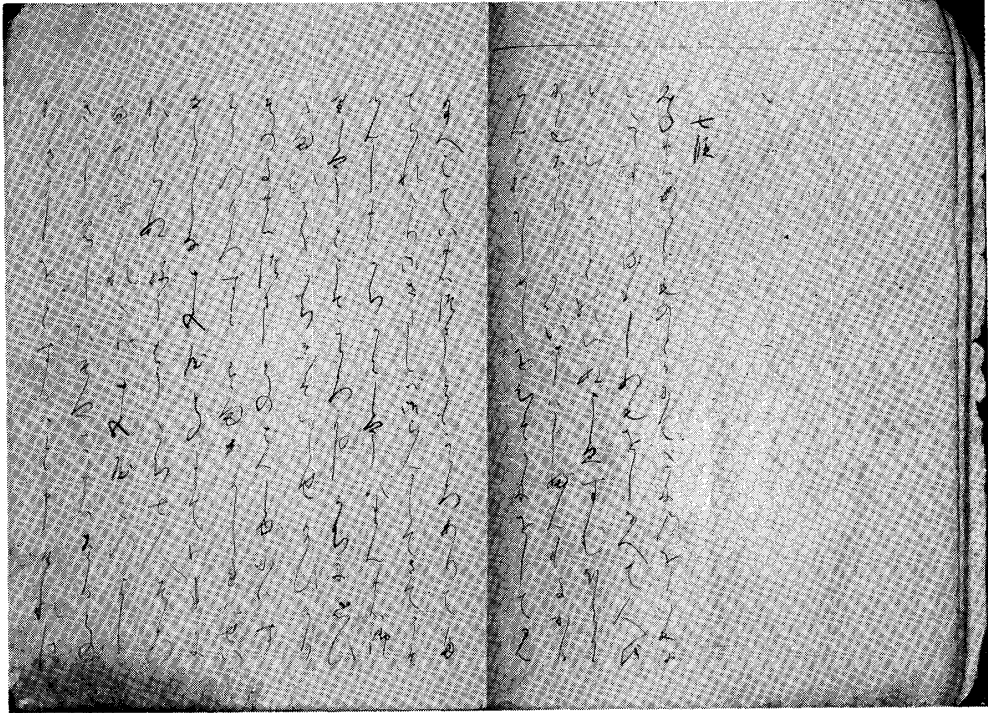
4 才

3 ウ



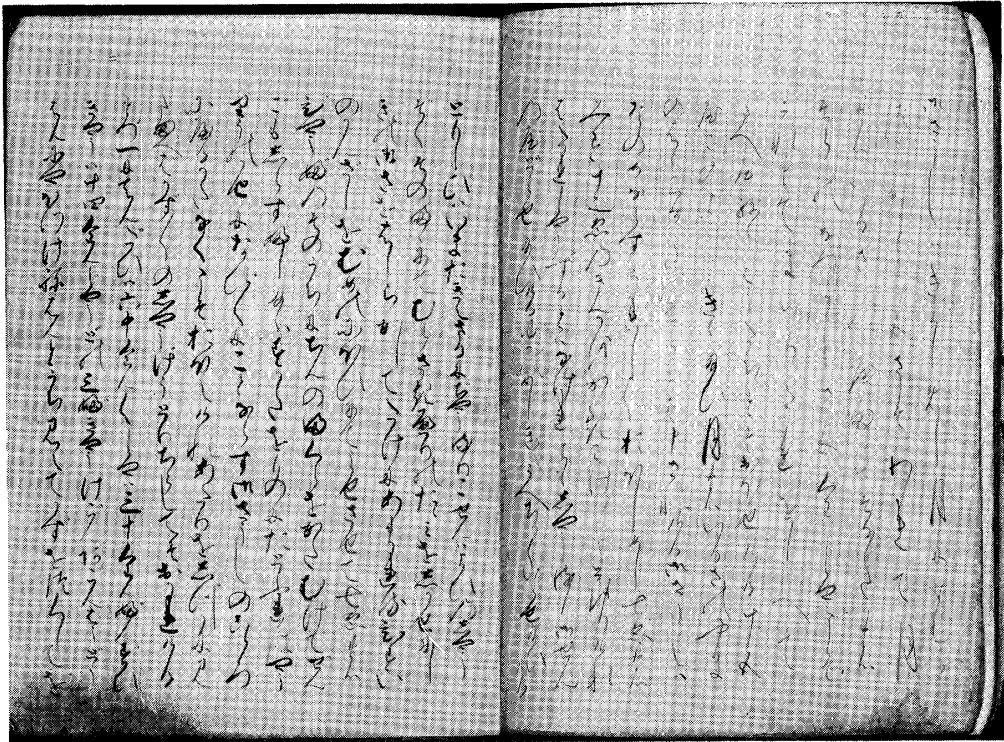
5 才

4 ウ



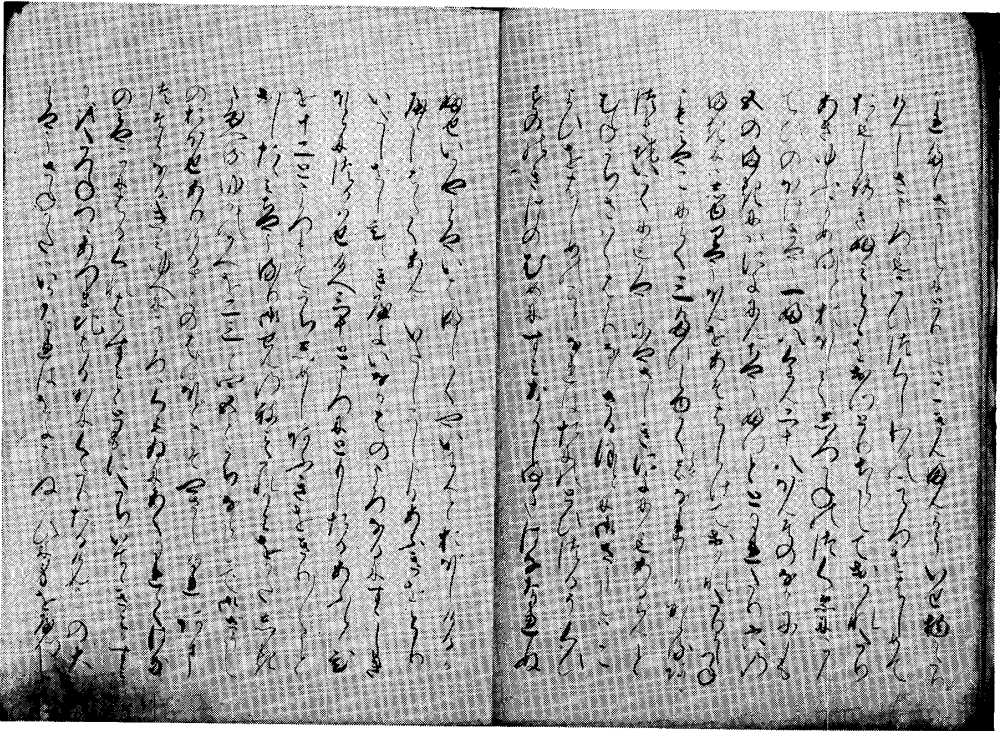
6オ

5ウ



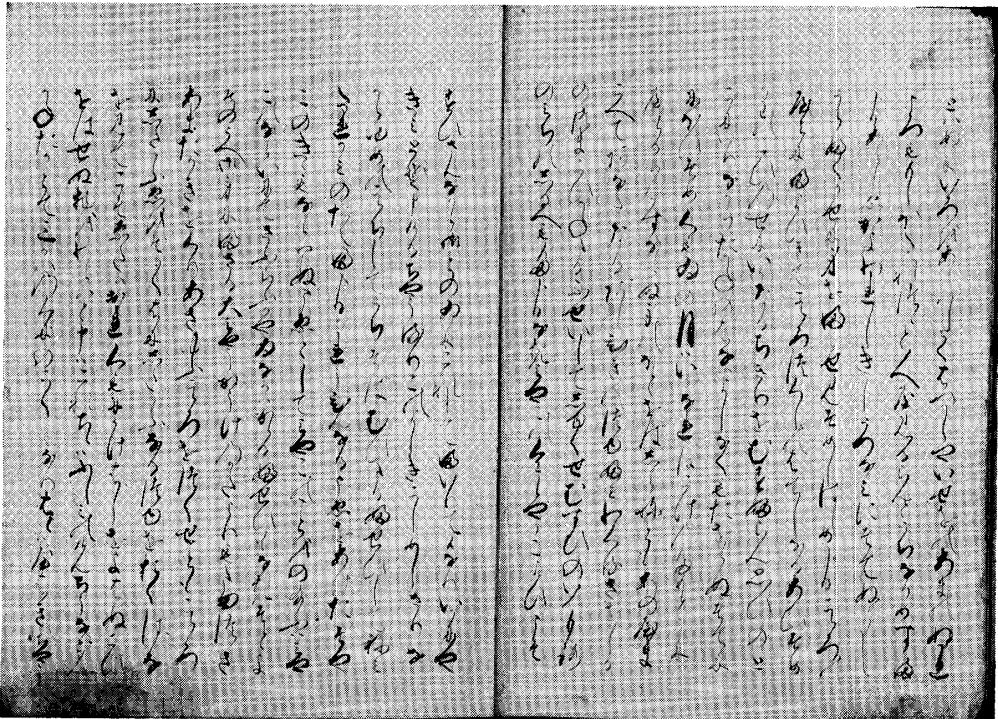
7オ

6ウ



8オ

7ウ

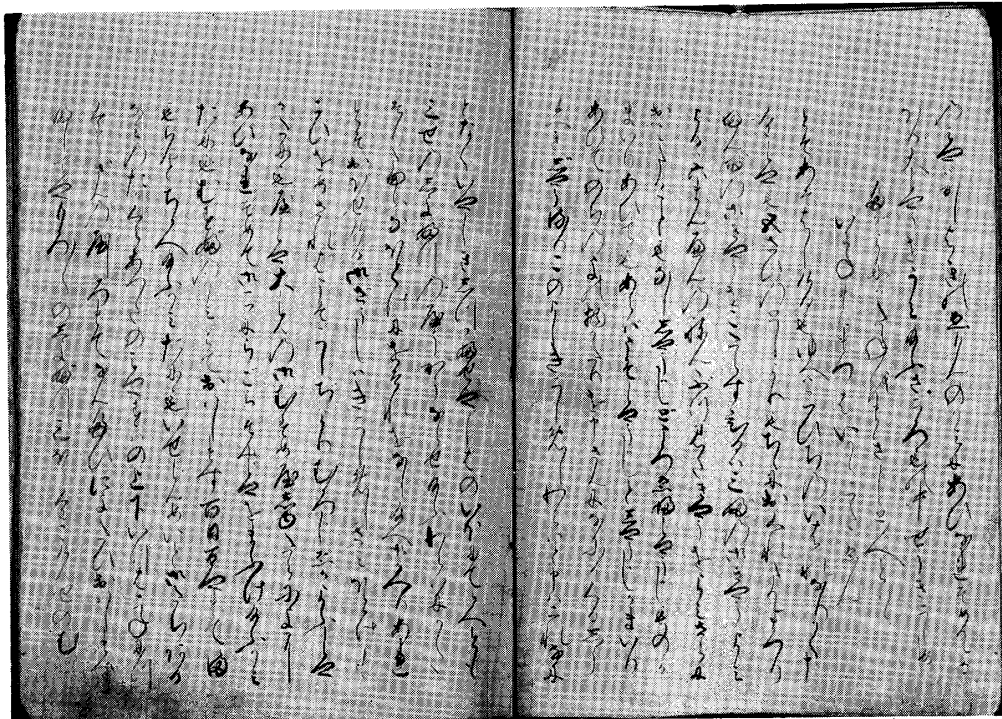
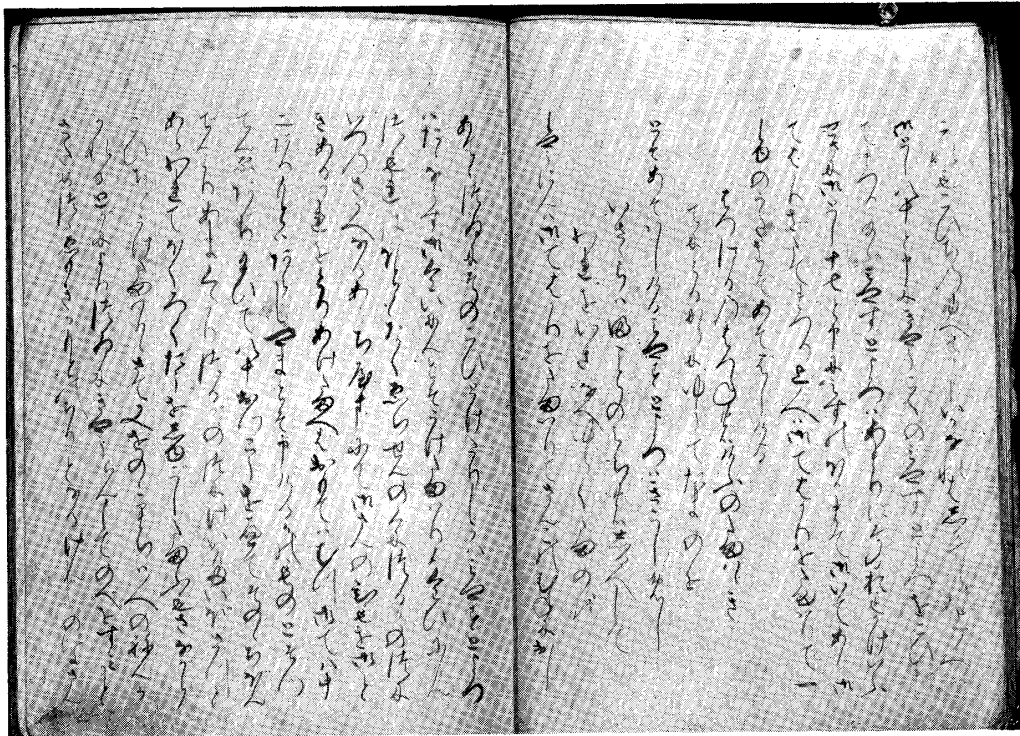


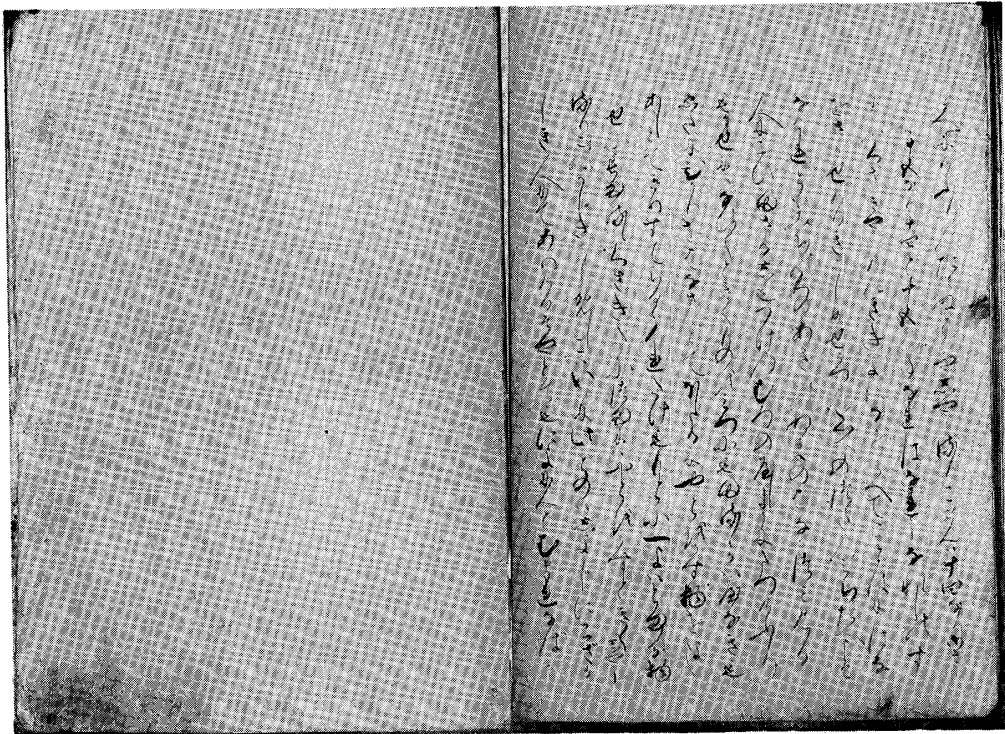
9オ

8ウ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

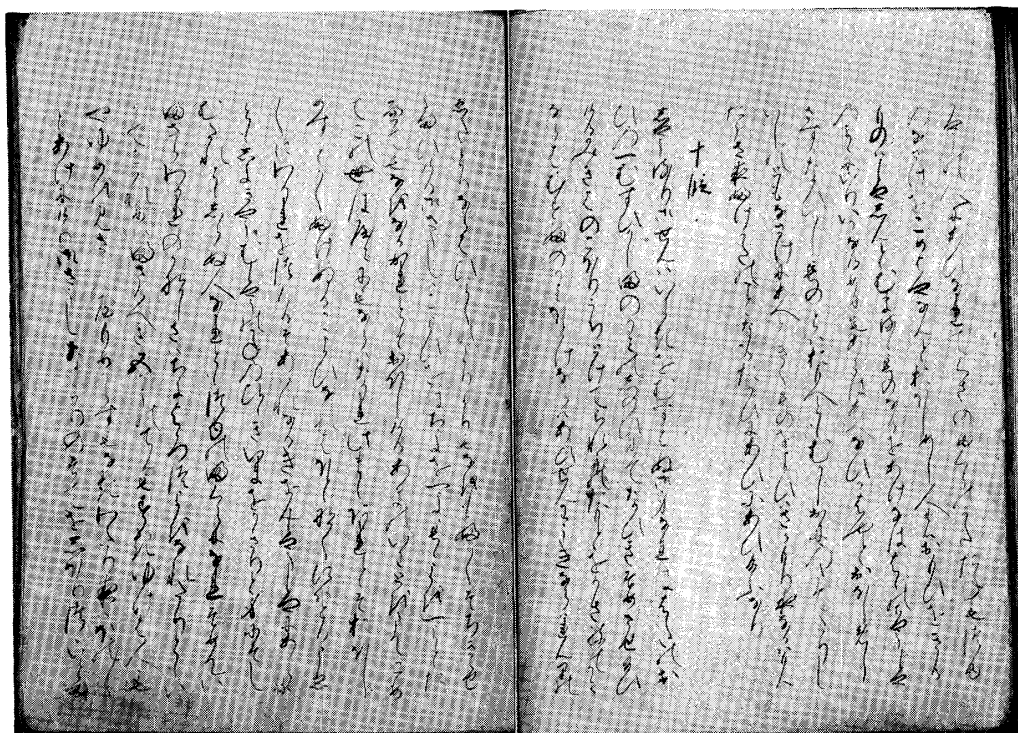
十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、





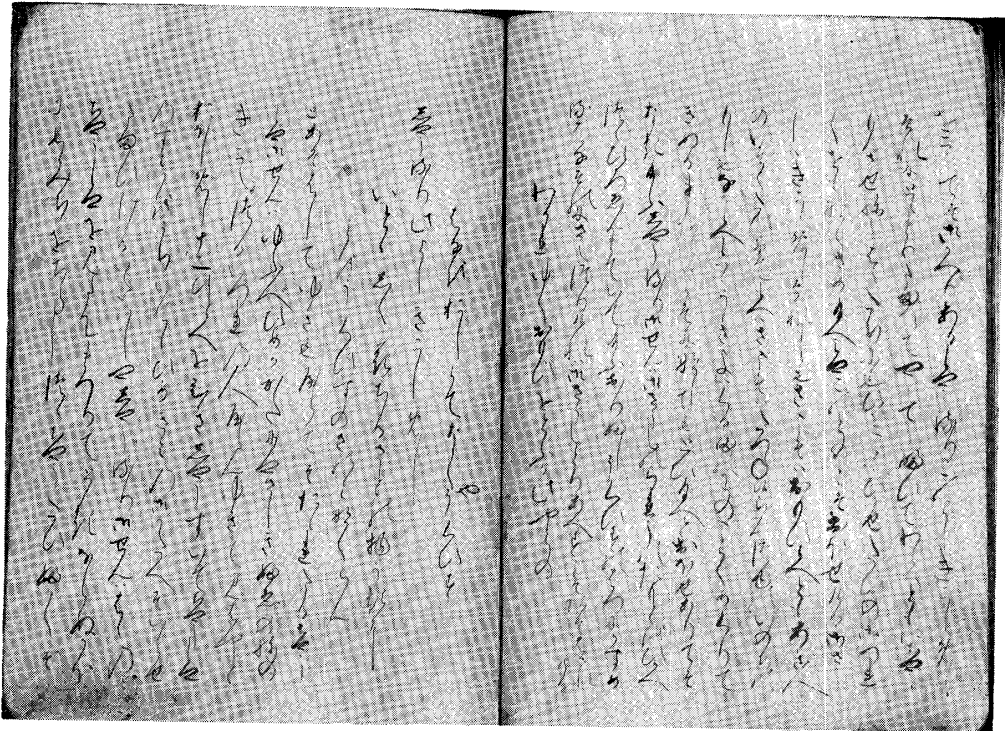
18オ

17ウ



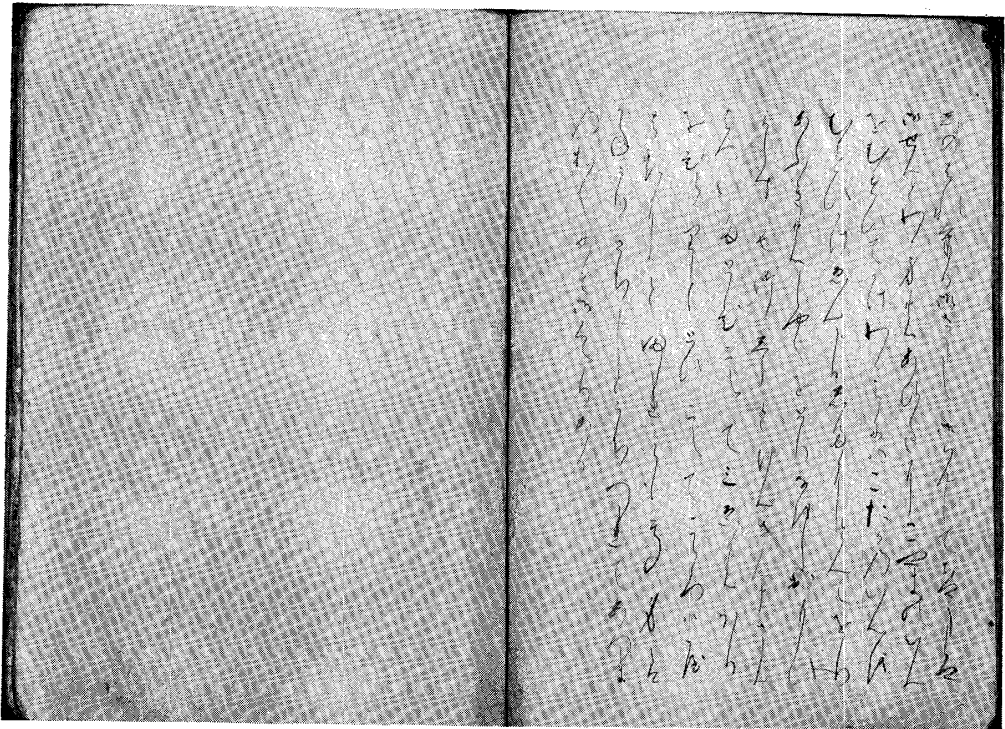
19オ

18ウ



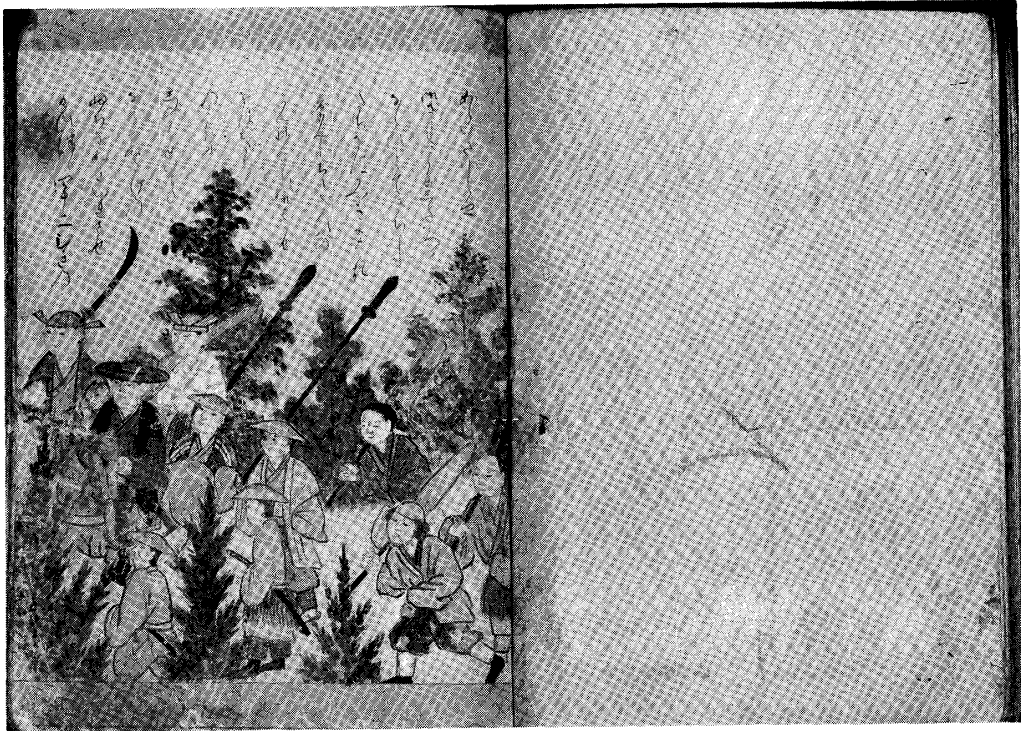
20オ

19ウ



21オ

20ウ



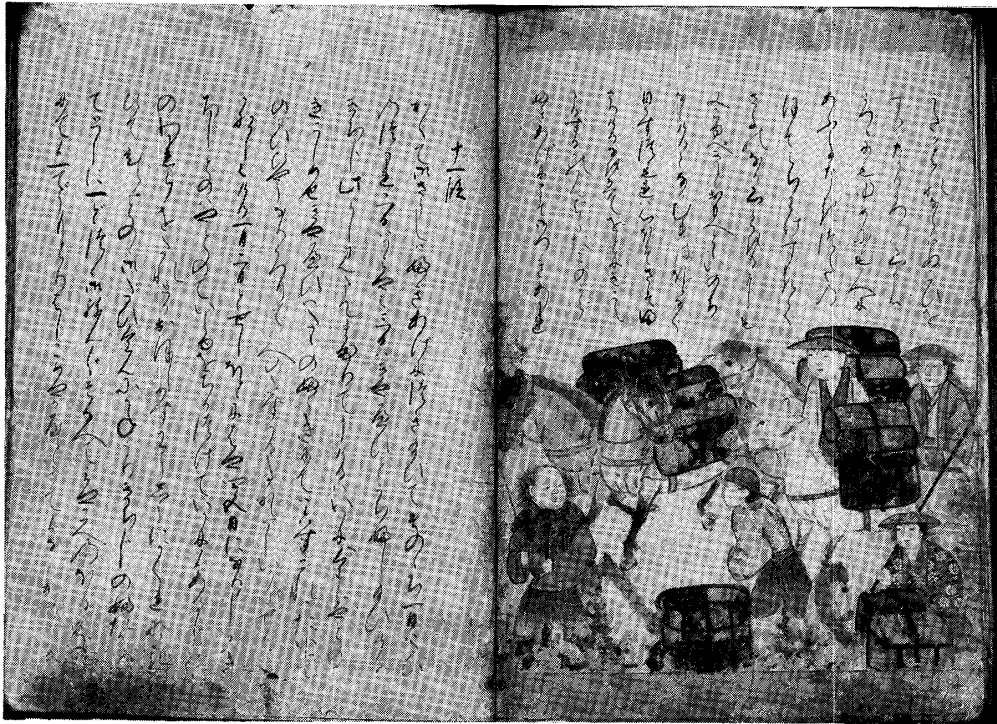
22オ

21ウ



23オ

22ウ



24オ

23ウ



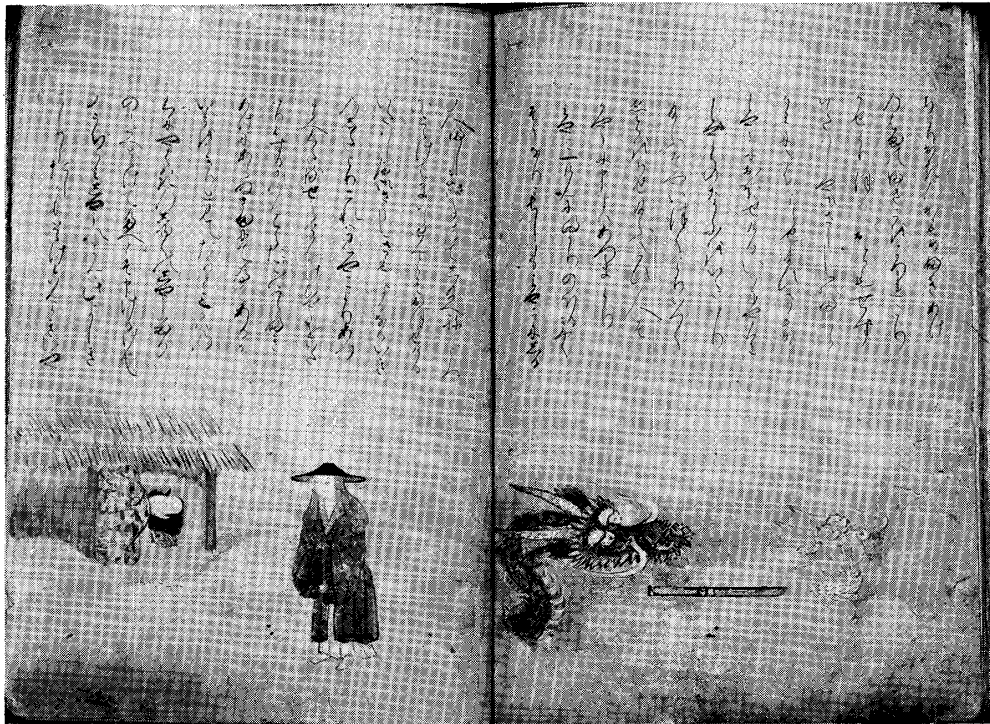
25オ

24ウ



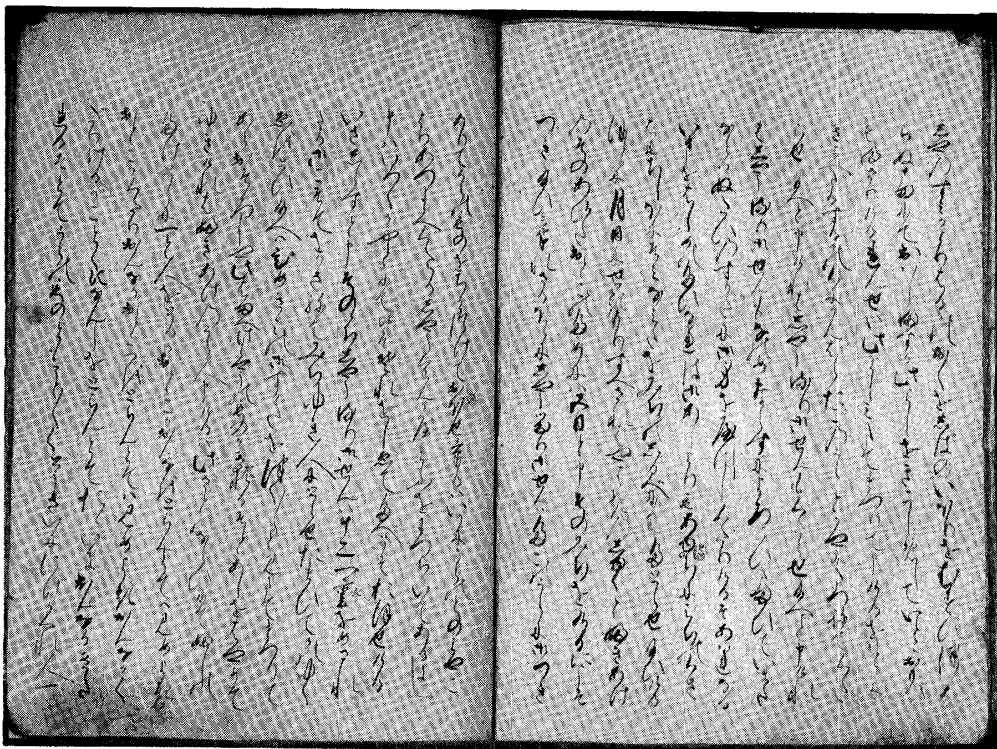
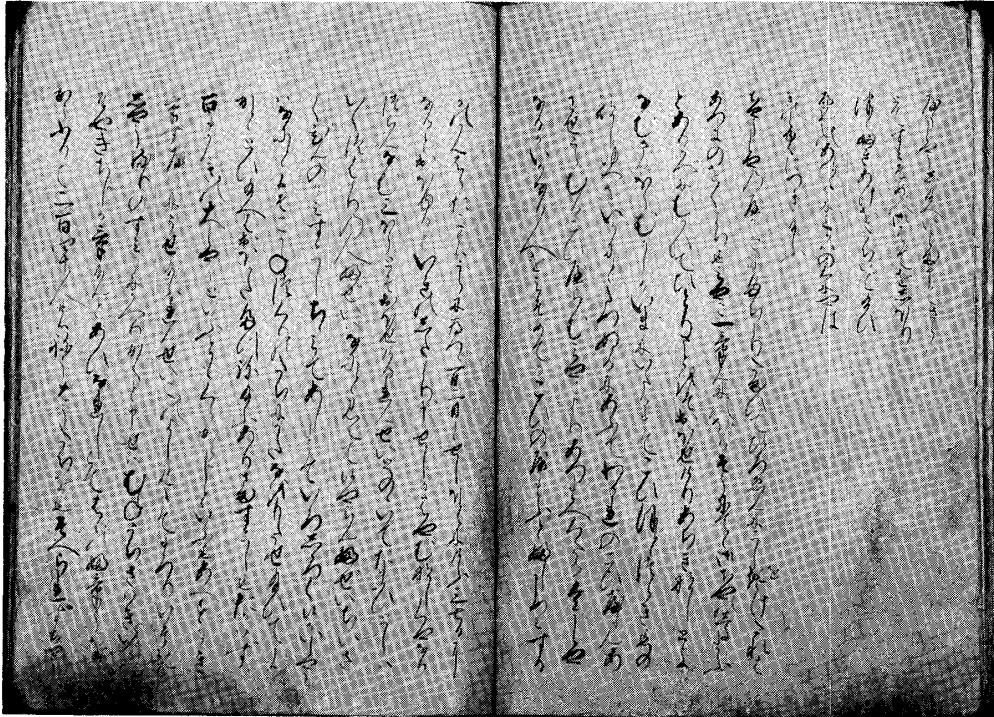
26オ

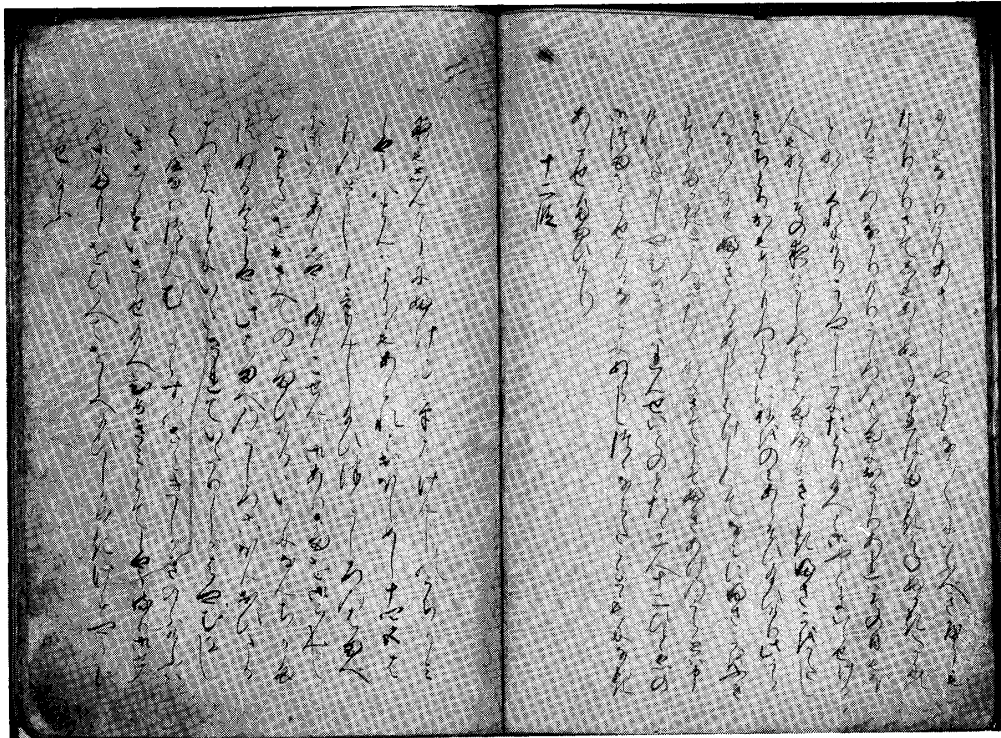
25ウ



27オ

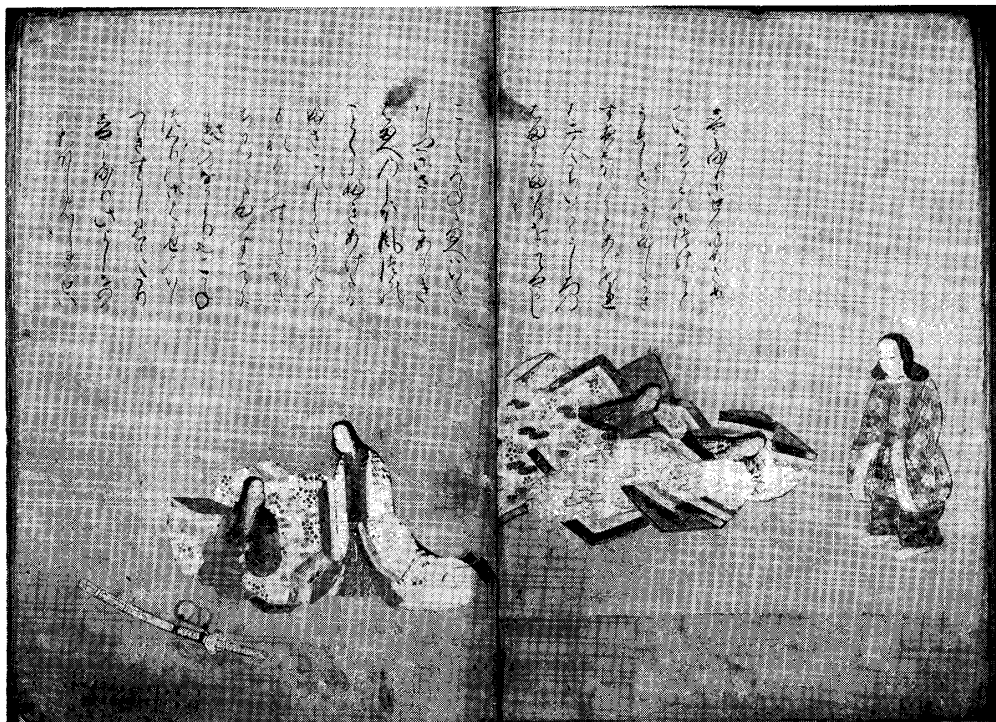
26ウ





30オ

29ウ



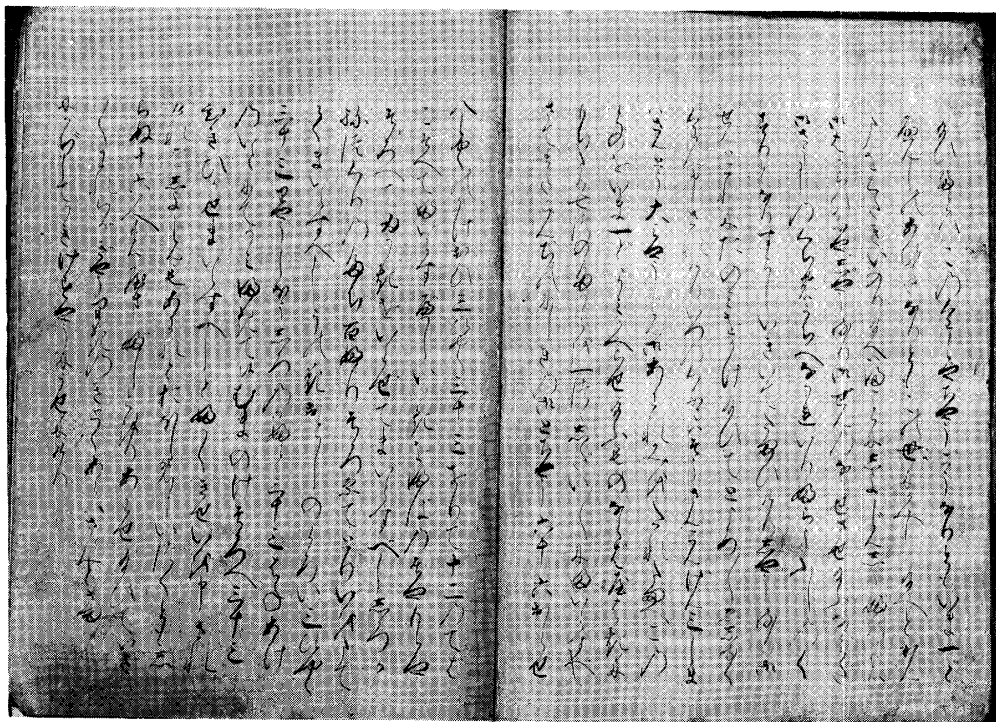
31オ

30ウ



32オ

31ウ



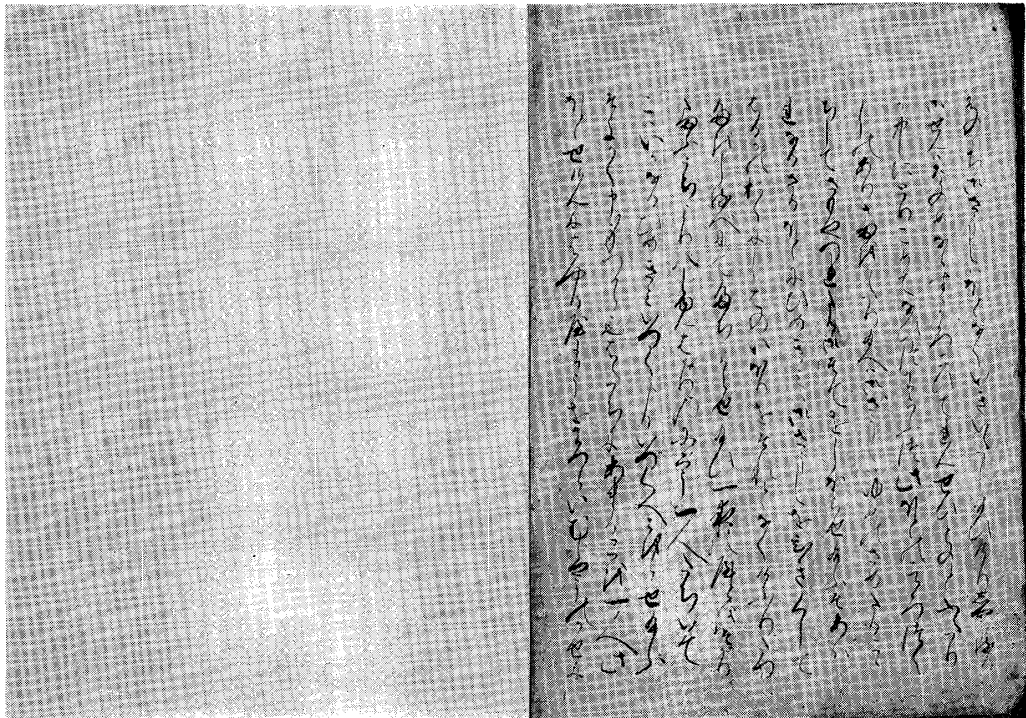
33オ

32ウ



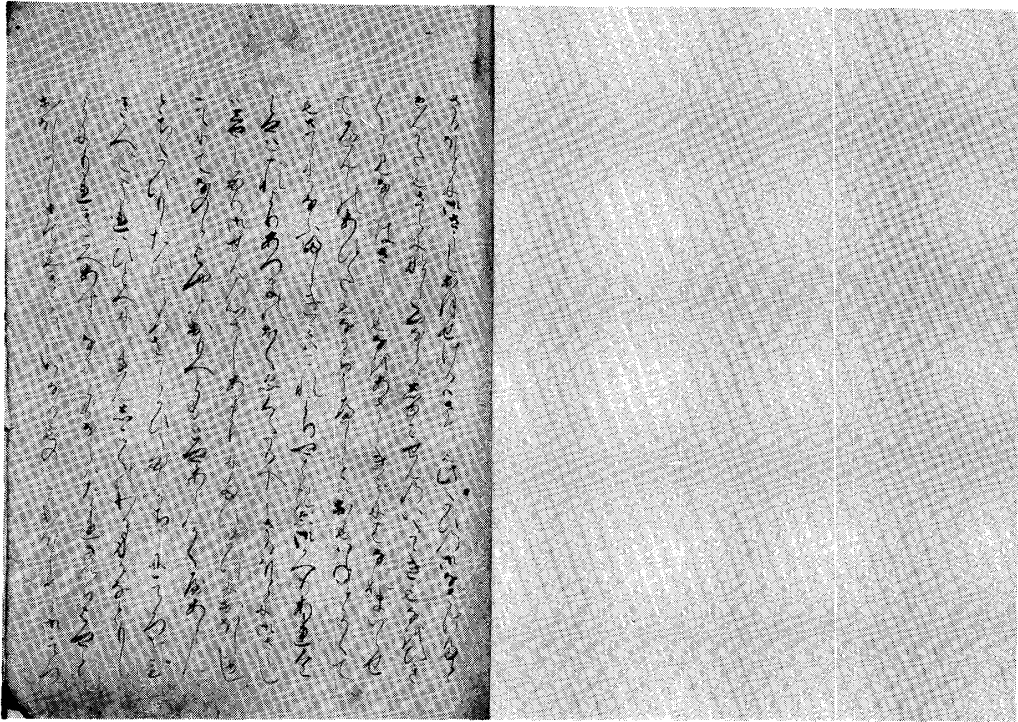
34オ

33ウ



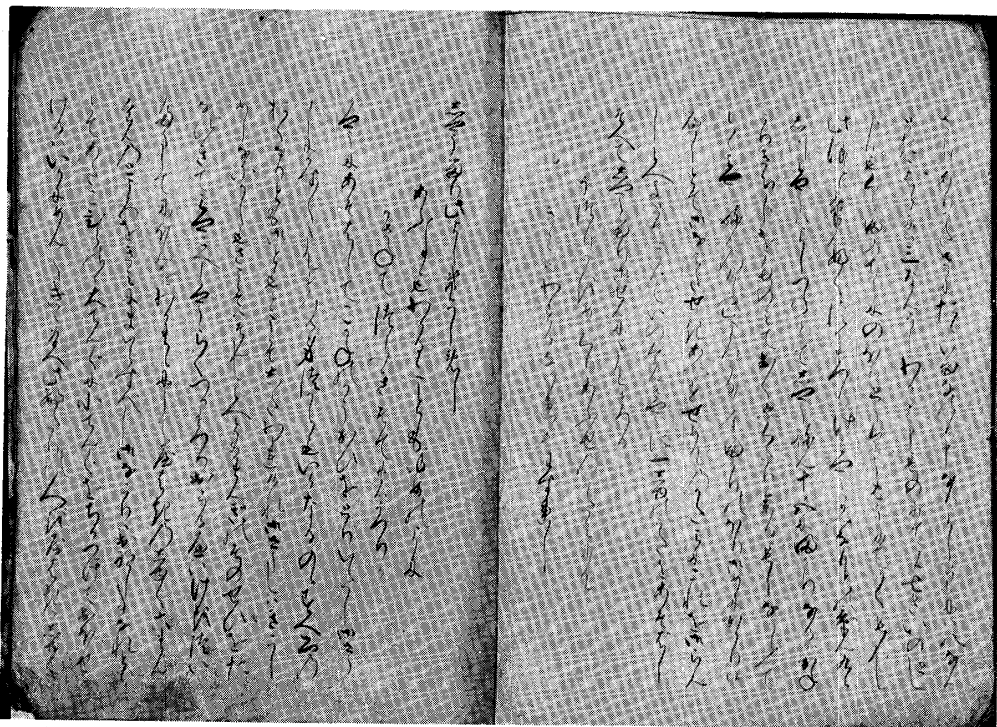
(補足部)

34ウ



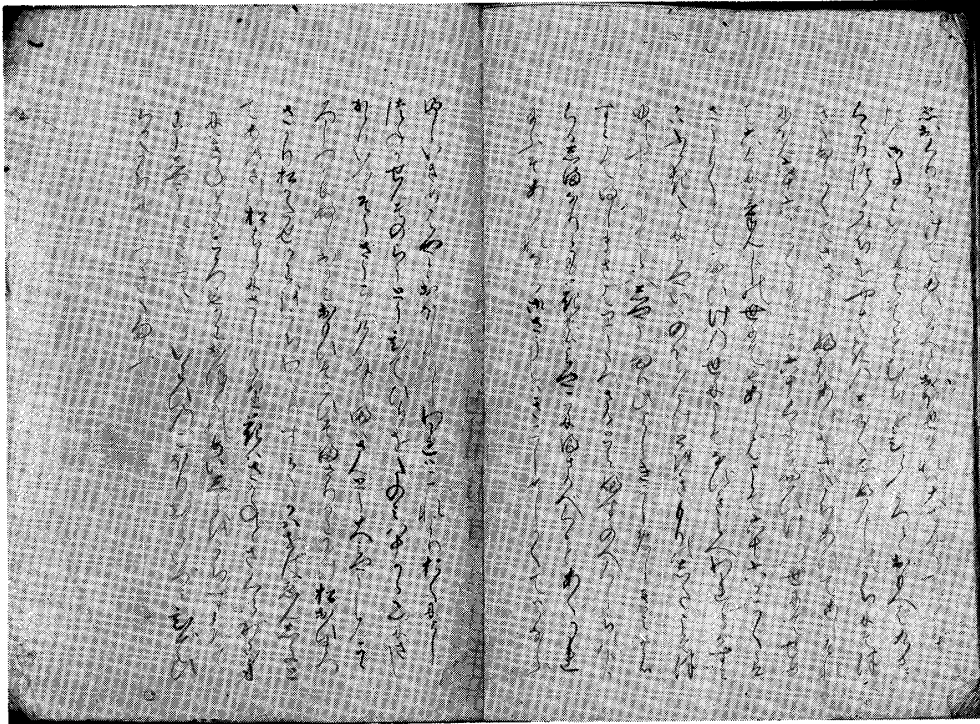
35才

(補足部)



36才

35ウ



37オ

36ウ



裏表紙見返

37ウ

北大本 ちやうるり

関川本 [しやうるり]

さるほとに、御さうしは、いかなる人のすみかやらんと、心をとめて見給へは、あるしはしやうるりこそんとて、けいのうなさけ、みめかたち、たうこく、たこくにならひなし。なきもたうりなり。ちくは、ふしみのけんちうしやう、かねたかとて、三川の国の、こくしなり。はくは、やはきのちやうしやとて、かいたう一の、ゆうくんなり。かのちやうしや、よろつにつけて、わくたから、七までこそ、もたれたり。なかにも、しろかねは、みつのあわと、もたれたり。されとも、かのちやうしや、いまた子を一人も、もち^{イオ}給はねは、ところくへ、しゆくくわん申されけり。されとも、しけん、しるしはさらになし。そのころ、三川のくにくはやらせ給ふ、ほうらいしのやくしへ参りつゝ、さまくのしゆくくわんをこそ、申されたり。なむやくし十二しん、ねかはくは、身つからに、なんしにても、をなこにても、こたねを一人さつけ給へ。そのくわん、しやうしゆするならは、やはきのしゆくに、七つ候たから物を、一つ、したいくに参らせ候へし。

まつ一はんに、こんちのにしきのまほりを、六^{イロ}十六しやくの、かけをひ、五しやくのかつら、八花かたの、からのかみ、六十六おもて、

十二のてはこにそへて、参らすへし。こかねつくりのかたな、三十六
こしそへて、らんかんわたして、参らすへし。是をふそくとおほしめ
さは、まはのそやを百やそろへて、いかきにそえて、参らすへし。し
ろかねつくりのたち、刀、百ふりそろへて、とりゐをたて、参らす
へし。こんちのにしきの御とちやう、月に三十三、八年かけて、参ら
すへし。あけのいと(2)にて、かみまきたて、くろのこまを、月に三
十三ひきつ、五ねんひかせて、参らすへし。かのみたうのまつに、
ほうらいさんをかさりたて、しろかねにて日をつくり、こかねにて
月をつくりて、参らすへし。すゝめのせうてう、かものまかりば、つ
るのもしろ、こうのしもふりをもつて、七けん四めんのたうをふき
たて、参らすへし。しろかねのきいた、こかねのはしらをもつて、
しやたんを、たてかへく、としに一つづ、五年かあひた(2)参らす
へし。
なんしにても、によしにても、ちやうしやをあはれと、おほしめさは、
こたねを一人きつけたまへ。これを御もちいさふらはすは、かのみた
うのないちんにて、はらを十もんじに、かききり、はらわたつかん
て、やくしになけかけ、あら人かみとなりて、参らん人に、しやうけ
をなさんとき、ちやうしやを、うらみ給ふなど、ふかくきせい申つ、
二七日こもれとも、しけんなし。三七日のふんこもれとも、しけん、
しるしもさらになし。百七日こもられ(2)たり。

かくて、百日七夜にまんする、あかつきかたに、ほとけは、八十はかりなる、らうそうにけんし給ひつゝ、みなすいしやうの、ねんしゆのしゆすを、つまくり、ちやうしやこせんの、まくらかみにたちそひて、いかにやなんぢ、うけたまはれ。さなきたに、さとりすくなく、まよひおほし。なんぢかなけくところ、あまりふひんきに、八しやくのかねのはうが、八すんになり、八すんのかねのあしだか、四すんになるまで、たつねまはれとも、さらに「⁽³²⁾なんちにさつくへき、こたねは一人もなし。こたねのなきいはれを、かたりてきかすへし。

たかのぬまと申ところに、いけあり。かのいけのふかき、八万ゆしゆんなり。なんぢかたけを申せは、はたいろなり。この大しや、おほくの人をとり、いき物、てうるいを、ほろほしたるにより、なんぢ、こたねは、なきそとよ。又、やはきのちやうしやにむまるゝ事は、かのいけのほとりにて、くわんをんたう有。此みたうにて、たつとき御そ⁽⁴⁾う一人ましま⁽⁴⁾す。かのいけぬし、しやうふつせよと、よるひる、ほけきやうめうてん、おこたらず、なんぢに、ゑかうし給ふ。かの御きやうを、ちやうもんしたりし、くりきにより、ほとなく、やはきのちやうしやにむまれたり。なんぢかつまの、けんちうしやうは、くもたかきみねにすむ、わしといふ、たかなり。おほくのどりのかすを、ほろほしたり。しかれとも、くらまをたちまはりく、あさ夕、れいふつ、れいしやのかねのこゑ、御きやうを、ちやうもんしたるにより、

くけ大みやう」と、むまれて有といへとも、いんくわによりて、こたねなし。さりながら、あまりになくも、ふひんさに、こたねを一人さつくるそとて、たまのてはこを、をしひらき、たまつさを、とりいたし、ちやうしや御せん、ひたりのたもとへ、うつさせ給ひけるそと、おほしめし、ゆめさめ、くわんきの心かまりなく、らいはい参らせ、あかう申、くるま五百りやうそろへつ、ちやうしやのもちたる七つのたからを、みねのやくしへ、一つつ、したいく(まね)に「参らせたり。

そのち、ちやうしや、ほとなく、くわいにんして、日かすつもれば、御さんのひほをぞ、とき給ふ。かれをとりあげ、見たまへは、まことに、たまをのへたることくなる、ひめきみをぞ、まうけ給ひたり。やくしの申子なれはとて、すなはち、やくしの御なをかたとりて、とうはうしやうりとは、なつけたり。ちくの御ためには四十三の御となり。はくのためには三十七の御子也。

二たん(さん)

かくてありつるところに、ころはやよいのことなるに、やうはいたるりのはるの花、木々のこすゑにさきみたれ、たいゆふれいのむめのはな、しけみかえたの花さかりも、かくやと、おもひしられる。

御さうしは、このもとことに、たちしのひ、ちりゆく花も、さうのたもとにうけ、うくひすのこゑに、ゆういんせられて、すいへんにおくり、やうさう、ほうひたり、かうさんのち、ゆふし、りようらんたる、へきちのてん、ともなか⁶めて、た⁶れたり。もえいつる、くさのけふりに、すゑみたれたり。おほろにかすむ、はるのよの月、となかめてた⁶れたり。

おりふし、ちやうしやのすみかより、みなみのつまとに、あたりつゝ、つまをやさしき、ことのねの、まつふくかせに、ひ⁶きそひ、りんく⁶とこそは、おとつれけれ。御さうしはきこしめし、いかなる人のひくやらん、心をとめて、あやしめおほしめし、ことのねに心をひかれけり。たつねよりて、見たまへは、こ⁶に一つ⁶のふしきあり。有しは、たれともしらねとも、七けん四めんの、かうの御しよ、八むねつくり、けつこうし、とうさい、りやうもん、かさらせて、つほのうちには、しゆもく、せんさい、かすしらす。のきは、こうはい、心もことはも、をよはれす。ひとへさくらに、八え桜、したれやなきに、いと柳、ふくはるかせも、いと⁶心もうちみたれ、花ももみちも、ひとひとさかり。

みなみのおもての、花そのに、まかき、すいかき、まはらにて、月見⁶のため⁶の、いたひさし、花みんとての、やへひかき、すはまに、い⁶けをほらせて、いけのなかには、たていし、ふせ石、なかれいし、ほ

とけをまなふ、らんかんいし、しやう、わう、しやく、ひやく、いひ
つへし、いしのかすを、たゝませけり。をしとり、かもめ、かいつふ
り、かも、すいてう、かすくのみつとりともは、きよまいきこに、
すみなれて、おほろ月よのかけまでも、身にしむはかり、おもしろく、
百しゆの花を、うへられたり。こうはい、はくはい、やゑ桜（やゑ）しら玉
つはぎ、いわつゝじ、ほたん、しやくやく、かまつはた、きみやう、
かるかや、をみなへし、しほん、りんたう、われもかう、しらまく、
こうまく、さま／＼に、いくとせつもる、まねんかう、なにをたより
に、うまくもの、月のかけをは、やつすらん。

ひんかしおもての、せんさいには、かしまつ、ふし松、五よふのまつ、
ひくてになひく、ねのひのまつ、六十六ほん、ひきうへたり。まつ
このまに、ひわ、こから、ししうから、はなになれたるうくひすの、
さ（さ）「ゑつるふせいを、こかねにて、さま／＼につくらせて、うこくは
かりに、すへさせたり。

きたのかたの、せんすひに、すみやくおきなな、としをへて、かし
らのゆきを、はらひかね、をのかころもは、うすけれど、ふゆをまち
たる、やさしさよ。ちやうせひてんにはあらねとも、四せつ四きをそ
まねはれたり。

百しゆの花の、事なれば、つほみてにほふころもあり、ちりゆく花の
こすゑも有。あらしに花のさそはれて、みきわのなみ（なみ）に、うかひし

を、物によくくたふれば、八くつくすいのいけのおもて、百千万しゆの、ほうれんけも、いかてか、是にはまさるへき。

しまよりこうちのかよひちには、そりはしをかけさせ、いけには、いろくくの、はちすはをはなしたまふ、れいちのなみも、ゆらくとしで、みきはのまつも、ふく風も、しんくと月すみ、くしゃく、ほうわう、きりたけに、まひあそひけり。

三たん⁽⁹⁾

御さうし、御らんして、こはいかに、よしつねこそ、みやこにて、おほくのせんすい、見しかとも、かほとのせんすい、いまだみす。かゝるあつまの、おんこくにも、かやうのところ有けるよと、いとゝ心をとゝめつゝ、御らんしけるおりふし、こゝに一のふしきあり。

あるしはしやうるりこそんにて、けいのうなさけ、みめかたち、たうこくたこくにならひなし。ならひなきこそ、たうりなれ。みな人は、三十二さうのかたちなり、上八十人、中八十⁽⁹⁾人、下十人として、二百四十人のねうはうたちを、つかはれけり。ちゝは、ふしみのけんちうしやう、かねたかのちやうしやとて、くにの、こくしなり。はゝは、やはきのちやうしやとて、かいたう一の、ゆうくんなり。ふたりのあひたより、しやうするそのこなれは、一しほをろかのことそなき。ひ

わのしやうす、ことのしやうす、まつなかにいたりても、をろかなる事そなき。あそはすきししは、なに／＼そ、こきん、まんよう、いせもの「^{おま}かたり、けんし、さころも、こいつくし、わかのを、はしめとして、なさけのみちをしることは、とうこく一とそ、きこえける。心有まの女はうたち、花そのに、たちめくり、きくの木すゑや、たけうら、かたふく月の、おもかけを、かたによみ、しにつくり、れんかにしてこそ、たゝれたり。

御さうしは、まはまのかけに、しのひたち、花その山をななめたまへは、しやうりせんの、そのよのしやうそく、いつにすくれてはな「^{おま}やかなり。うけなり物に、からおり物、さくら、山ふき、こきつゝし、むめちこうはい、やなき色、うすこうはいにこきこうはい、しやうふかさねに、まきかさね、十二ひとへをひきしやうすひて、こまくれなるの、ちしほのはかま、ふみくゝみ、たけにあまれる、ひすいのかんさし、こうはいのたんしを、やまかたやうに、たゝませ、うらふくかせに、そよとなひかせて、たゝれたりける、そのふせひ、心ことはも、をよはれす。ゆうにやさしきおほ「^{おま}たり。物によく／＼たとふれは、やうきひ、りふじん、そとおりひめ、女三のみやのたちすかた、おほろ月よのないしのかみ、こうきてんのほそとのも、これにはいかて、まさるへき。

よしつね、みやこに有しとき、きんちうにおはします女はうたち、や

ことなき上らうたちの、五せつのおそひの有しとき、たひくみたて
まつれとも、かほとのおしん、いまたみす。おなし、にんけんとむま
れなは、かやうの人に、あひなれ、ちかつ「きたてまつり、かひらう
とうけつのかたらひ、ひよくれんりのちきりを、こめてこそ、おもふ
心を、えんこうのはやしにあそふ、こてうの花になれたる、ふせいし
てこそ、たくれける。

しやうるりこそせんは、なをも、月のひかりや、花のなこりや、をしう
やおもはれける心あり。

四たん

いまの女はう十二人、めしくせられて、くわんけんはしめてあそはれ
ける。しやうるりこそせんは、ことのはしめ、月さへとは、ひ
はのやく、れいせんとは、¹²ひちりきのやく、十五夜とは、しやう
のやく、ありあけ殿は、わこんのやく、ほうけうあはする物もあり。
ときのでうしは、ひやうてうなり。あそはすがくは、なにくそ。大し
やうかんしゆ、さうふれん、しゆんれうりうに、やはんらく、したひ
に、ひきよくを、つくされける。月せいさんに、かたふけは、ひかり
もかけも、かすかにて、はなそこのまと、ちりしき「て、¹²色もにほひ
も、みちくして、ひわのね、ことのね、すみわたり、あくこう、ほん

なうわすれはて、こくらくしやうとも、かくやらん、てんにんも、あ
まくたり、ほぎつも、をしなへて、すいきのなみたを、なかしつゝ、
みなくそてを、しほりける。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、る中は、物うき所とかや、か
ほとくのわんげんに、やうてうくわんなきことよ。ふゑはあれとも、
人なくてふかざるや。さあらは、これにて、よしつね、ふゑをふかは
やと、おほしめし、もしも^{いふ}とかむる人あらは、たうしこのころもて
あそふ、くさかりふへとも、申へし。なをも、とかむるものあらは、
けんしちうたいの、こかねつくり、こらへぬほとそと、おほしつゝ、
そともつゝまれば、しのへともしのはれす、しんたいきはまる、わか
みかな、とおほしめし、あまりに心すみければ、こしより、やうてう
とりいたし、にしきのゆたん、をしはつし、かんこ、しやうさく、ち
うろく、けくとて、いのうたくちに、はなのつゆ、ふきし^{いふ}めし、が
くは、さまくおほけれども、女人かおつとを、こふるかく、なんし
をこふるは、さうふれんといふ、かくを、よそめもはくからす、やは
まの、のにも、ならはなれ。たとへ、やみにも、ならはなれと、あた
りもひくくと、ふかれたり。ひわ、こと、ひき給へは、かとにて、ふ
ゑをそ、あそはしける。うちには、ひにこそおしとくめ、かとのふえ
をそ、ちやうもんし給ひける。

五たん^{〔はま〕}

しやうるりせんは、このよしきこしめし、やはきは、さるへきめい
しよにて、のほりくたりの、大みやうたち、ちこせうしんなど、と
まりて、たひくくわんけんせらるれとも、かやうのやうてう、いま
たきかす。御せい、き、ひやうし、かゝるふせいの、おもしろきよ。
よそにてきくたに、ゆかしきに、ぬしをみたらんゆかしきよ。いかに
や女はうたち、とそおほせける。

御まへなりける、にうはうたち、もんくわいさまに、たちいて、い
「そきかへりて、申さるゝやうは、心にくうもきふらはす。ひるのこ
^{〔はつ〕}ろ、大かたさまにて、あそひつる、しねつ、らつふのしやうす、ふえ
のしやうすと、ほめられつる、かねうりきちしの、ふたひのむまおひ
くわしやにて、さふらふなり、とそ申ける。

しやうるり、このよしきこしめし、それは、さな物そとよ、たゞし、
ころ、みやこには、へいけあくきやう、よにすくれて、くわんはくて
んか、おしこめて、大しん、くきやうをも、うしなふ事とまき。^{〔はま〕}「そ
のかたさまにてましますかや、いやしきしづのまねをして、あつまの
かたへや、くたり給ふらん。この人これへ、しやうしいれ、やうてう
ふかせて、ちやうもんせん。ひわ、こと、ひきて、此との、たひの

つれくをも、なくさめはや、女はうたち、とそおほせける。もんしゆ殿は、すゝみいて、申されけるは、たうし、此ころ、みやこの人は、めはつかし。あなかの人は、くちはつかしや。かへにみく、いわの物いふよの中に、いかてか、こかねあき⁽¹⁵⁾人に、てうせき、しこうのけにんをは、御せんまかく、めしよせて、きみの御ふせい、わらはともか有さまをも、みえんことも、さすかなり。かなはぬよしをぞ、申されける。

しやうるり、このよしきこしめし、それは、さためなきそとよ。たうし、此ころ、やすきためしの、あるそとよ。大かい、ちりをゑらます、花は所を、さためぬもの、ていの中にも、はちすあり。くさの中にも、こかねあり。いやしき人にて、よもあらし。かゝる人の中にも、くわけんのたつしやは、ある物⁽¹⁶⁾を、ふせいはいかなるものぞ、見てまいれと、有しかは、たまものまへは、うけたまはり、いそぎたちいて給ひける。

此女はうと申は、としを申せは十六なり。心まざりのくちまゝなり。人にすぐれる、さいかななり。十二ひとへを、ひきしやうすいて、こゝろは、ひきかつき、たけにあまれる、ひすひのかんさしを、むめのほひて、よせさせて、もんくわいさまへ、たちいて、御さうしうのうしろすがたを、たゞ一めみたてまつり、いそぎかへりて⁽¹⁶⁾しやうるり御せんに此よし、かくとぞ申ける。

いかにやきみ、きこしめせ。よしある人のすかたをは、くもまの月の
はしはかり、みたてまつりしことのはを、あら〜かたり申さば、き
みはそれにて、心しつかに、きこしめせ。

この人は、たゞよのつねの人にてはなし。みなもとけんしの、上らう
かとおほしくて、ぬいものは、心もことはも、およはれず。

はたには、りんたうの、おりえたつけたるかたひら、もろわき、しゆ
んに、とかせつ、ひ^ひきちかへとそ、めされける。かうまきぞめに
すゝしのこう、かうあやおりて、二かさね、はなたちはなに、みなし
ろおりて、一かさね、せいかうの大きくちに、けんもんしやのひたゝれ
の、したのはかまの、わりなきは、おほるけほんふか、きへからす。
きくとちには、しらへのきくとち、むすはれたり。にほん一のめいし
んの、はなむすひの、むすひたるとおほしくて、さうのきくとちには、
ひとへさくらを、むすはせたり。

うしろのぬい物には、たうとのさると、にほん^{ほん}のさるとを、ぬはせ
たり。たうとのさるは、大こくとて、せいも大に、おもても、しろ
〜と見えてあり。にほんのさる、せうこくにて、せいもちいさく、
おもても、あかく、見えにけり。たうとのさるは、にほんへこえんと
す。にほん^{ほん}とたうとの、さかひなる、ちくらかおきにて、ゆきあひて、
こさう、こさしの、さかひをは、物のしやうすか、きよくをつくして、
ぬいてあり。

ゆんてのそてをくたりに、すきのむらたちを、干ほんはかり、ぬいあらはし、すきの「このまより、いつる月をは、ぬはせたり。そてのくたりには、松を干ほん、あざやかにぬい、まつのはこしに、あき日のいつる所を、ほのくとぬいたり。

ゆんてかたより、くたりには、正八まんの御しやたんとおほしく、大ほさつと、いかきとりるを、さもあざやかに、ぬはせたり。

さうの、ひほには、あまのたくほくもつて、あさまのたけの夕けふりと、ふしのたかねの夕けふりの、たちまふ所をは、きやしやにむすんで、さけられたり。

おくひ「さまを、見てあれは、けんしの、しらはた七なかれ、へいけの、あかはた七なかれ、さうに十四なかれの、はたさほ、あまたにうちおられ、はた、くるくとひきまきて、おつる有さまをは、ありくとぬはせたり。

又、はかまの、けつこうには、うしろうらには、はるのを、もえたつほとにぬはせたり。花のもとには、おくの大明やうあつまりて、しゆえんなかとはと、みえてあり。まへこしをくたりには、あきのをぬはせたり。玉つはき、きやう、かる「かや、おみなへし、きりうすき、いとすき、つゆうちなひくあきのたの、ほのうへてらす、いなつまを、ほのくと、ぬはせける。

ゆんての、けまはしには、にほん一の、ゑ上すか、ふちしろたうけに、

七日までいて、くら八七かうを、なかむれは、さらくふても、およはれすして、みやこかへりのところを、ありくとき、ぬはせたり。めてのけまはしに、うきもつらきも、とうたうみ、はまなのはしの、ゆふしほに、ひかれてのほるあまをふね¹⁹⁾こかれて物を、おもふらんと、さもありさうに、ぬはせたり。

ちたひ又、このめされたる、ひたくれは、にほんのきぬには、よもあらし。からきぬかと、うちみえて、心もことはも、およはれ、御このものの、けつこう、さうには、とうかね、いれさせて、おもてのめぬきには、しやう八まん、うらのめぬきは、きたのの天神、つかくちには、このつくのひこほし、たなはたを、こかねをもつて、いさせたり。あまのかすみを、むすんで、さけをに²⁰⁾さけられたり。つるかしら、こしりには、日くわう、くわつくわう、二のひかりを、あざやかに、あらはしたてまつり、たをやかにこそ、さされたり。

ゆんてのわきに、しのはせたる、御はかせの、けつこうには、おうせつは、こせつはと、三めんふくりんにかきね、はくまかね、ふち、むすひ、せめ、いしつき、しはひき、もとよせ、七つかさね、まことのめぬき、うらめぬき、おもてのめぬきに、ほらせたり。うらのめぬきの、けつこうには、九月十三²¹⁾夜の、月のひかりの、くまなきに、くらまの、ひしやもんでんわうを、ほらせたり。

ゆんてのわきに、かいこうて、しやうのこまふへ、やうてう、四くわ

んの、ふき物を、したんのやたてに、とりそへて、めてのわきに、しのはせたり。

いろこのみかとおほしくて、六はらゑほしを、ひたりおりに、めされてさふらふか、此殿は、ろしをこのむとうち見えて、いろよき、さくらを一えたおりて、ゑほしのきくちに、さくれてさふらふ、とぞ申ける。

しやうるり「此よしきこしめし、されはこそ、この人は、よしある人にてましますぞ。うたをかけよや女はうたち、とてとぞおほせける。

十五夜との、此よしうけたまはり、かとのほとけに、うちいて、御さうしのためとをひかへて、いかにさふらふ、たひのとの、きみからのおほせには、

かさくちなれとちらぬ花かな

と申せとてこそさふらへ、みやこのととぞ申ける。

御さうしは、きこしめし、

ちはやふるかみもさくらをおしむには

と申させ給へ「女はうたち、とぞおほせける。

十五夜、このよしうけたまはりて、いそまかへり、

六たん

(白紙)^(1オ)

いろこのみかとおほしくて、六はらゑほしを、ひたり折に、けたかくめされてさふらふか、此とは、よしをこのむとうち見えて、いろよき、桜を一えたをりて」^(1ウ)

(白紙)^(2オ)

たちいて、御さうしのためとをひかへて、いかにやさふらふ、たひのとの、きみよりのおほせには、

風くちなれともちらぬ花かな

と申ける。

御さうしは、きこしめし、

ちはやふる神も桜をおしむにや

かせくちなれとちらぬはなかな

と申させ給へ、ねうはうたち、とぞおほせける。

六段

かくと申ける。

しやうるり、此よしきこしめし、われにおとらぬ女はうたち、七人を、七つのつかひに、たてられたり。まつ一はんの、つかひに、十五夜殿、二つのつかひに、さらしなどの、三つのつかひに、たまものまへ、四つのつかひに、ありあけとの、五つのつかひに、おほろけとの、六つのつかひに、月さへとの、七つ²²のつかひに、こさくらとのを、はしめとして、御さうしを、よはれたり。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、よしつねこそ、あつまはるかに、たひをして、おいけのこうりにましはりて、いろもくろみて、はつかしけれとも、かゝるたよりは、よもあらし、とおほしめし、ひたたれのゑもん、たかくひきつくろいて、ひろゑんまでこそ、おわします。いたはしや、御さうしは、それ、よはまつせにおよへ共、あた²²ら、けんしのゆみとりも、ひろゑん²²さまにて、ふゑをふくへきか、とおほしめすなり。とをり給ひ、しやうるり御せん、中²²のていに、しかせたる、らんけんへりと、かうらいへりと、二てうかさね、しかせ給ひつゝ、とらのかわを、はしらたかきところに、御さうしは、むすと、なをりたまひける。

しやうるり御せんは、一たんだかき所に、むらさきへりの、たゞみをしるて、こんくゝるりに、御さをかさらせ、しやうしあはせ、たますたれはかりにて、もんしゆにせんは、ひわのやく、しやうるり²²こせ

十五夜、此しようけたまはりて、いそきかへり、かくとそ申ける。

しやうるり、此よしきこしめし、われにおとらぬねうはうたち、七人つれきせ、七どのつかいを、たてられたり。まつ一ばんの、つかいは、十五夜との、二ばんには、さらしなどの、三²²ばんには、たまものまへ、四つのつかいは、ありあけとの、五ばんは、おほろけとの、六ばんには、月さえとの、七つのつかいを、たてられける。

御さうしは、きこしめし、こはいかに、よしつねこそ、あづまぢはるかに、たひをして、けあげのこほりにましはりて、いろもくろみて、はつかしけれとも、かゝるたよりは、よもあらし、とおほしめし、ひたたれのゑもん、けたかくひきつくろいて、ひろゑんまで、おはします。いたはしやな、御さうしは、それ、世はまつせにおよへとも、げんじのゆみとりが、ひろゑんとさまにて、ふゑをふくへきか、とおほしめし、するりと、とをられ、しやうるり御せん、なかのていに、しかれたる、うんげんべりと、かうらいへり、四五でうかさね、しかせつゝ、とらのかはを、はしらかしたるところに、御さうしは、むすと、なをらせ給ひけり。

しやうるり御せんは³「だんだかきところに、むらさきへりの、たゞみをしきて、こんごんるりに、こきをかきり、しやうあわせ、たますたれるりにて、もんしやうせん、びわ、こと、わごん、かすくく

んは、ことのやく、さらしなどは、わこんのやく、かすくのくわんげんの、くそくをとくのへて、くわんげんはしめて、めされけり。

さてく、くわんげん、すぎければ、御まへなりける、女はうたち、けんし六十てうを、とりちらし、御さうしの心ひきみん、そのために、さまくの、こふみ、しやうけうよみ、なんし、ふしんをそ、とひかたり。さりと申せとも、御さうしは、七さいの御としより、くらまのてらに、あからせたまひて、とうくわうはうにて、かくもんめされ、くらま一の、ちこかくしやうとも、くらからす。ふくとも、ひきらくとも、たつしやなる。人くしやくして、たてまつる。あら有かたや、このとは、くわんおんせいしの、しげんかや、もんしゆの、さいらい、しやかやかの、しけんかや、おほつかな、ふてをとりて、たやすきは、こうほう大しと申とも、是にはいかて、まさるべき。御まへなりける女はうたち、こうはいのたんし、ひきかさね、かれを、これをと「しまふせられけり。御さうしは、きこしめし、五つのゆひに、四くわんの筆を、とりもちて、かいてはいたし、うつしてはたてまつる。よもしんかうにふけぬれば、ことのくわしに、しゆくのさかなを、とくのへて、御さうしに、すめたてまつり、しゆえんもなかはに、なりしかは、いとまこいてそ、御かへり有。

御まへなりける女はうたち、こんやはこれに、とまり給ひて、やうてうあそはし、わらはもともに、ちやうもんし、ひわ、こと、ひい

わげんの、くそくをとくのへて、くわげんはしめて、めされける。

すてに、くわげんも、すぎければ、御まへなる、ねうはうたち、げんじ六十てうを、おつとりちらし、御さうしのころをひきみん、そのために、さまく、こふみ、しやうけう、なんし、ふしんをそ、とひかけたる。とは申せとも、御さうしは、七さいの御ときより、くらまのてらに、あかり給ひて、とうくわうはうにて、かくもんめされ、くらま一の、御ちこかくしやう、みやこ一の、くわげんにも、たつしやなり。この人は、くはんおんせいしの、けしんの人、ふげん、もんしゆの、これにはいかて、まさるべき。御まへなるねうはうたち、こうはいのたんし、ひきかさね、かれを、これをと、しまうせられける。

御さうしは、きこしめし、いつくのゆびに、四のふてを、とり、かきてはいたし、うつしてはたてまつり、よもしんかうにふけゆけは、ことのくはし、しゆくのさかなを、とくのへて、御さうしに、すめたてまつる。しゆえんもなかはに、なりしかは、いとまをこふて、御かへりある。

御まへなりけるねうはうたち、こよひはこれに、とまり給ひて、やうてう、わらはもともに、ちやうもんさせ、ひわ、こと、ひいて、たひ

て、たひのつれ／＼をも、なくさめ給ひ候へ、みやこの殿とぞ、おほせける。御さうし、きこしめし、われも、さそんじ候へとも、こかねあき人は、ようしんきひしき人なれば、さためておとろき、くわしやを、たつねきふらふらん。いのちつれなく、もしさふらはは、めぐり／＼て、又こそ、けんさんにいらんとて、いとまをこうてそ、御かへり有。女はうたち、かとのほとけにたちいて、わかれを、かなしみたまひけり。かたみにのこる物とは、そてのうつりか、はかりなり。おもかけ、とをくなりゆくは、うつりかも、なにならず。

さても、かの御さうしは、あき人のやとに、たちかへり給へとも、御心は、そらにうかれ、ましろみ給ふほともなし。つく／＼と、おほしめしけるは、きうせん、ひやうく、と／＼のへたる、いくきのにわに、かけ入、うちしにするも、ならひなり。いはんや、これほと、やことなき女はうたちに、あひなれて、しなんいのちは、をしからす。しのびてみはやと、おほしめし、ちやうしやのすみかを、たちいて、御しよのあたりへ、しのひいらせ給ひける。女はうたち、しつまるを、いまや／＼とまち給ふか、心すみよしにあらねとも、ねさしそめけん、ひめまつ、ちよをまつらん、ひさしきも、かくやと思ひしられたり。

の御つれ／＼を、なくさめ給へや、このとの、とそおほせけり。御さうし、きこしめし、われらも、さやうにそんじ候へとも、こかねあきんとは、ようしんきひしき人なれば、さためておとろき、くわしやを、たつねきうらはん。いのちもつれなく候は、めぐりて、またこそ、御げんさんと、いとまをこうてそ、御かへりあり。ねうはうたち、かとのほかにたちいて、わかれを、おしみ給ひけり。かたみにのこる物とは、そてのうつりか、はかりなり。おもかけ、とをくなりゆけは、そのうつりかも、なにならず。

かくて、御さうしは、あき人のやとに、たちかへり給へとも、御ころも、そらにうかれ、一ときも、ましろむこともなし。つく／＼、おほしめしけるは、きうせん、ひやうくを、と／＼のへて、いくきのには、かけいり、うちしにするも、ならひなり。いわんや、これほと、やことなきねうはうたちに、あひなれて、しなんいのちは、おしからす。しのびてみはやと、おほしめし、しやうしやのすみかを、たちいて、御しよのあたりへ、しのひいらせ給ひける。ねうはうたちの、しづまりを、いまや／＼とまち給ふ、すみよしにはあらねとも、ねさしそめけん、ひめまつ、ちよをまつらん、ひさしきも、かくやとおもひしられたり。

(白紙)

七たん

みねのあらしも、のとかにて、たにのをかはも、なみたゝす。しるも
 しらぬも、おしなへ²⁶¹て、人をとゝむる、さとの、とおほしめし、と
 ひらを、ひそかにきりく²⁶²と、なして見給へは、いまだ、もんをは、
 さゝさりけるに、にわに入て、見たまへは、でいのつまとのこゝちし
 てこそ、たてられけり。かたとはたちて、かたとはほそめにあけられ
 たり。御さうしは、御らんして、されは、いまにはしめぬ事なれとも、
 けんしのうちかみ、正八まんの、御りしやうにこそと、うちよろこひ
 たまひて、うちへそ、いれは、そのよのつまと²⁶³の、はんしゆには、
 すわうのむろかみ、すま、あかし、れいせん、さらしな、十五夜との
 とて、われにおとらぬ女はうたち、七人そろへて、おかれたり。十五
 夜此よしきこしめし、たそやく、なるとおきに、おとするは、と
 申されければ、御さうしきこしめし、月にすむ、かつらおとことに、
 さそはれて、月の入さの山のはの、そなたのそらのなつかしきは、く
 わしやか、これまで参りたり。をしへ²⁶⁴たへや、女はうたちや、とそ
 おほせける。十五やとの、此よしきこしめし、月のいるさの山のはは、
 こなたのそら、とそ申されける。

みねのあらしも、のとかにて、たにのをかはも、なみたゝす。しるも
 しぬも、をしなへて、人をとかむる、さとのいぬ、こゑすむほどにに
 も、なりしかは、いまはじぶんもよかるらん、とおほしめし、をひそ
 かに、をして見²⁶⁵給へば、でいのつまともこゝろありて、たてられた
 り。御さうしは、御らんして、さてこそ、げんじのうちかみ、しやう
 八まんの、御りしやうとこそ、こゝろにうち思ひたまひて、うちゑ
 そ、いらせ給ひけり。そのよのつまとの、ばんしゆには、すわうのも
 ろずみ、すま、あかし、れんせい、さらしな、十五やとのまで、われ
 におとらぬねうはうたち、七人そろへて、をかれたり。十五やこのよ
 しきこしめし、たそや、このなるとおきに、をとするは、と申けれ
 ば²⁶⁶御さうしはきこしめし、月にすむ、かつらおとことに、さそわれて、
 月のいるさのやまの、そなたのそらのなつかしきに、くわしやこそ、
 これまでまいりたれ。をしへてたべや、ねうはうたち、とそおほせけ
 る。十五や、このよしき²⁶⁷給ひ、月のいるさのやまのは、こなたの
 そら、とそ申されける。

御さうしは、なのめならず、うれしくおほしめし、七ゑのみす、十二
 ゑのきんかを、かきわけく²⁶⁸とをりければ、たれ、しやうずるとは、

やうするとは、なけれども、しやうるりせんのやとらせ給ふ、ゆめのにしきのうへちかく、いらせ給ひける。ともしひ、いまたきえざるに、しやうるりせんは「よゐのしやうぞくまゝにて、むらさきへりの、たゞみをしかせ、にしきの御きを、はしらせて、たけにあまれる、ひすいのかんざしを、むめのにほひに、よせさせて、七糸のひやうふの、そのうちに、ちんのまくらを、かたふけて、とうさいせんこもわきまへす、まところみ給ふ御すかた、御らんして、御さうしの心のうち、やるかたなくこそ、おほえたり。あたりを、しづかに見給へは、かすくのしやうきよう、とりちらしてそ、おかれける。」(28オ)

まつ、いにしへは、てんたい六十くわん、くしやは三十くわん、ぶんすいきやうは十四くわん、しやうとの三ふきやう、けこん、あこん、はうとう、はんにや、ほつけ、ねはん、とうちと見へて、かすをつくして、おかれたり。さうしにとりては、こきん、まんよう、いせ物かたり、けんし、きころも、恋つくし、わか的心をはしめとして、おかれたり。あさ夕よめると、おほしくて、しろかねのつくゑに、こんていのほけきやうは、一ふ八くわん、廿八ほん(28ニ)なかにも、五のまきは、女人しやうふつと、とかれたり。ことに、たひはほんとして、ようもん、六のまきには、しゆりやうほん、七のまきには、やくわうほん、八のまきには、たらにほん、あそはしかけて、をかれたる。御さうし、つ

なけれども、しやうるり御せんのやどらせ給ひける、ゆかのにしきのうへちかく、いらせ給ひける。「ともしひは、いまたきえざるに、ちやうるりせんは、よひのしやうぞくそのまゝにて、むらさきべりの、たゞみをしかせ、にしきの御きを、はしらかして、たけにあまれる、ひすいのかんざしを、むめのにほひにて、よせさせて、七糸のびやうぶの、そのうちに、ちんのまくらを、かたむけて、せんごもしらす、ふし給ふすかたを、ものにとふれば、やうりうのかせになびくに、ことならず。御さうしのころに、やるかたなくこそ、おほえけれど、あたりを、しづかに見たまへば、かすくのしやうげう、とりちらしてそ、おかれける。」

まつ、一に、てんだひは六十くわん、くしやは三十くわん、ぶんすいきやうは十四くわん、じやうどの三ぶきやう、けこん、あこん、はうとう、はんにや、ほつけ、ねはんとうち見えて、かすをつくして、を「おかれたり。さうしにとりては、こきん、まんよう、いせ物かたり、けんし、きころも、こひつくし、わかのころをはしめて、おもしろきふみともを、おつとりちらして、おかれたり。あきゆふよめると、おほして、しろかねのつくゑに、こんでひのほけきやう、一ふ八くわん、二十八ほん、そのなかにも、五のまきには、によにんぢやうぶつと、とかれたり。六のまきには、じゆりやうほんを、あそはしかけて、おかれたり。よしつねこそ、みやこにて、三たひしゆかく者しゃなれしが、

く御らんして、よしつねこそ、都にて、三たひしゆかくしやうるり成しか、かゝるあつまの、ゑんこくにも、かやうに、やさしき女人もあるらんに、むねうちさはく、はかりなり。

さるほどに、御さうしは、こよひはしめの事なれば、たにのといつる、うくひすの、のきは「の梅に、すみなから、またはななれぬふせい²⁹かや、とやいはまし、かくやいはまし、とおほしめしける。やゝしはらく、あんじいたしつゝ、こしより、あふきとりいたし、三たんはかり、をしひらき、やよひなかはのころなるに、涼しきほどに、つかはせたまひ、三十とこゝろに、とほさせたる、あふらひを、十二とこゝろまで、うちしめし、せうめい、ほのかにかきたてゝ、あふきを、きりりとをしたゝみ、しやうるり御せんのねみたれかみの、かたしきたまひける、ゆかのうへを、二三と、四五と、うちならして「御さうし、ほふせありけるは、ことはの程こそ、やさしけれ。

あまのそらなるきみゆへに、こゝろは、くもるにあくかれて、花の都に、はるくれは、かすみとともに、たちいてゝ、きみかすみかを、たつねつゝ、あつまはるかに、くたりたる、源氏の大しやうは、いかなれば、をよはぬ恋に身をやつし、とはぬ、いろをあらはして、はつかしや、いせ物あまの、ぬれ衣、しほたれぬると、人やみるらん、うちなかめ、すまよりあかしへ、うらつたひ、きしうつ波に、袖ぬらし、うらふく風に、みをまかせ、君を見せめしはし「めより、こゝろのや

かゝるあつま地、いこくにも、かやうに、やさしきによにんもあるらんと、むねうちさはく、はかりなり。

さるほどに、御さうしは、こよひをはしめのことなれば、たにのといつる、うくひすの、のきはのむめに、すみなかし、またはななれぬ「ふせいかや、とやいはまし、かくやいわんと、おほしけるか、やゝしはらく、あんじいたし、こしより、あふきをとりいだし、をしひらき、やよひなかはのころなるに、すゝしきほどに、つかはせ給へ、三十とこゝろに、ともしたる、あふらひを、十二とこゝろまで、うちしめし、あふきを、きりゝとおしたゝみ、ちやうるり御せんのねみたれかみを、かたしきたまへる、ゆかのうへを、二三と、四五と、うちならして、御さうしの、おほせありける。ことのはの。ほどこそ、やさしけれ。

あまつそらなるきみゆへに、こゝろは、くもるにあくかれて、はなのみやこに、はるくれは、かすみとともに、たちいてゝ、きみかすみかを、たつねつゝ、あつま地はるかに、くたりたる、けんじの大しやうさねかたは、いかなれば、をよはぬこひに身をやつし「とはぬに、いろをあらはして、はつかしや、いせをのあまの、ぬれころも、もしほたれつゝと、人や見るらん、とうちなかめ、すまよりあかしゑ、かわれし。きしうつなみに、そてぬらし、うらふくかせに、身をまかせ、

みにまよひにき。心つくしのはてしなる、あひそめ川のこいのせに、
いかなるちきりを、むすふらん。おもひのところにいりなから、たかね
の花は、よしなくも、たをらぬ袖に、にほひそめ、雲の月は、いか
なれは、こけの袂に、やとるらん。かすならぬ身のほとをしらねとも、
あの山こえてあなたなる、あしひきの露ふみわくる、さをしかの、つ
まこいかねたる、ふせいして、しゆせんすいの、いつもちの、しゆへ
も、たよりもなき、都のくわしやか、こよひしも、すいさんなから（おとせ）
御とのへに、是まてまいりて候なり。いかにや君、とそおほせける。

しやうるり、此よしきこしめし、さなから、ゆめのこゝちして、うち
そはみたる、ふせいして、ねみたれかみの、きゝもならはぬ、声とし
て、都の事をのたまふは、都のならひにて、みにまさる、大みやうか
うけのかたよりも、たまつさあまた、かきをくる。あさ夕心をつくせ
とも、いまたなひかす。かへりよせず。ところにしたかふ、ゑをそか
く。はにしたかふて、つゆそをく。花をみてこそ、ゑにはしれ。くも
「（おとせ）」かけはし、をよはぬこいをは、せぬものを。

わらはと申は、是、ちゝは、ふしみのけんちうしやう、かねたかとて、
みちのくにの、こくしなり。はゝは、やはきのちやうしやなり。かひ

見そめしはしめより、こゝろのやみにまよひきて、こゝろつくしのは
てしなる、あひそめかわのこひのせに、いかなるちきりを、むすぶら
ん、思ひのところにいりなから、たかねのはなは、よしなくも、たをら
ぬそてに、にほひそめ、くもるの月は、いかなれは、こけのたもとに、
やとるらん。かすならぬ身のほとをばしらねとも、あのやまこへてあ
なたなる、あしひきのつゆふみわくる、さをしかの、つまこひかねた
る、ふせいして、しゆくせむすひの、いつも路の、みちのしるへも、
たよりなき、みやこのくわしやか、こよひこそ「（おとせ）」すひさんなから、御
とのゑに、これまてまいりて候なり。いかにやきみ、とぞ申ける。

ちやうるり、このよしきこしめし、さりなから、ゆめのこゝちして、
うちそばむひたる、ふせひして、ねみたれかみの、たえまより、かれ
うびんなる、こゑをあげ、たそや、このきゝもならはぬ、こゑとして、
みやこのことを給ふは、みやこのならいにて、さふらふかや。ゑな
かは、かゝるふせひも、なきそとよ。そのうへ、御身にまさる、大み
やうかうけのかたよりも、たまつさあまた、かきをくり、あさゆふこ
ゝろをつくせとも、こゝろにしたかふ、ゑをぞかく。はにしたかふな
る、つゆをおく。はなを見てこそ、ゑたはおれ。くもにかけはし、を
よはぬこひをはせぬ物を。

わらはと申は、これ、ちゝは、ふしみのけんちうなごん、かねたかと
て、三かはのくにのこくしなり。はゝは、やはきのちやう「（おとせ）」しやとて、

たう一のゆふくんにて、ふたりのなかより、しやうするそのこにて、ひとしう、をろかのことなき。たとへは、いかなる人なりとも、いかてか御身は、およふへき。ことさら御みは、かねうり吉次かけにんとまき。およはぬこひをする物かな。こひもあまたに、わけられ³¹たり。あひみてのこひ、ま³²つてのこひ、あふこい、まつこひ、しのふこひとて、五つに、わけられたり。をよはぬこひをする物は、それ、てんちくには、むすふのかみ、たうとにては、あひせんわう、わかてうにては、いつもの、さいほう、さいのかみ、ふかく、にくませ給ふ物を、はや³³くかへらせ給へや、とおほせける。

御さうし、きこしめし、いかにやきみ、きこしめせ。およはぬこひもある物を、いかなれは、のりきよは、そのみは、あつまのゑひす³⁴なれとも、十九のとしより、みやすところを、こいたてまつり、たまつきを、参らせたりければ、きなき、

このよしゑいらんあつて、心もことはも、をよはれす。さりなから、なんちにめぐりあはんこと、こんよすきて、そのちのよに、ならんとき、これよりさいほう、あみだのしやうとまてまつへし、とおほせける。

かいたう一のゆふくんなり。あひうちしやうするそのこにて、一しをろかのことなき。たとひ、いかなる人なりと、いかてか御身は、をよふべき。ことさら御身は、かねうりきちしかけにんとまき。およはぬこひをする物かな。こひもあまたにいわれたり。あひみてのこひ、ま³⁵つてのこひ、あふこひ、まつこひ、五つに、わけられたり。およはぬこひをする物をば、それてんちくには、むすふのかみ、たうとにては、もんしゆぼきつ、わかてうにては、いつもの、さいほう、さいのかみ、ふかく、にくませ給ふものを、はや³⁶くかへらせ給へや、とこそおほせけれ。

御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、きこしめせ。およはぬこひもある物を、いかなれは、さとうひやうゑのりきよは、その、あつまのゑひすなれとも、十九のとしより、あはつのきなきを、こいたてまつり、たまつきを、まい³⁷らせければ、きなき、このふみを御らんして、まことやらん、のりきよは、につほん一はんのかじんとまき。さらは、うたのだひをいざさんとて、百しゆのだひをそ、おくられる。のりきよ、これをたまはりて、りうのみづをゑたるがごとし。やかて、つらねてたてまつる。きなき、このよしゑいらんあり。ころことはも、をよはれす。さりなから、なんちにめぐりあはん事は、こんよすぎ、又こんよをも、うちすきての、さきのよにならんとき、これよりさいほう、あみだのちやうとにてまつへし、とこそおほせけれ。

のりきよ、いよ／＼おもひにしづみければ、きさきのみや、此よしきこしめし、いかにのりきよ、うけ給はれ。これ「よりさいほう、みたのしやうと」申は、これより、にしにあたり、あみだあみだたうの事なり。きさき、此ほと百日まうてを、めされけるか、そもこんよとは、ゆふさりすぎ、又こんよとは、あすのよすぎ、その／＼のよに、是よりにしの、あみだたうにて、あはせたまはんと、おほせなり、のりきよ、とそおほせける。のりきよ、此よしうけ給り、なめならず、よろこひて、やかて、しゆくしよに、たちかへり、そのよを、いまや／＼と、まぢるたり。

すて「にそのよになりぬれは、いそぎ、かのみたうに参りつゝ、きさき33のこかうを、いまや／＼と、まつところに、きよふけかたのことなりしかは、たちをまくらにして、うちまどろまんとしければ、きさき、御かうならせ給ひける。このよしを御らんして、たちかへらんと、し給ひけるか、けにや人のおもひをきる物は、しやたうにおつるとおほしめし、まくらもとに、たちよらせ給ひて、一しゆ、うたをぞ、あそはしけり。

十五夜の月のいるき「をまぢかねて」

まどろむけしきつたなかりける

とあそはしければ、のりきよ、うけたまはり、ゆめのうちに申けるは、十五夜の月のいつるをまぢかねて

のりきよ、いよ／＼おもひにしづみければ、むらさきの御つほね、このよしきこしめし、いかになんち、うけたまはり、これよりさいほう、みだのちやうと／＼きふらふは、これより、にしにあたりたる、あみだあみだの御ことなり。きさき、このほと百日まふてを、めされけるか、そのこんよとは、ゆふさり「すぎ、またこんよとは、あすのよもすぎ、その／＼のよ、これよりにしの、あみだあみだたうにて、あはんと、おほせなり、のりきよ、とそおほせける。のりきよ、このよしうけたまはり、なめならず、よろこびて、やかて、しゆくしよに、たちかへり、そのよをいまやと、まぢるたり。

すてにそのよになりぬれは、いそぎ、このあみだあみだたうにまいりつゝ、きさき33の御かけを、いまや／＼と、まつほとに、きよふけかたになりしかは、たちをまくらにして、まどろまんとしければ、きさき、このよしきこしめし、たちかへらんと、したまひけるか、けにや人の思ひをきるものは、じやだうにおつるとおほしめし、まくらもとに、たちよらせ給ひて、一しゆのうたを、あそはしける。

十五夜の月のいつるをまぢかねて」

まどろむけすそつたなかりける

とあそはしければ、のりきよ、うけたまはり、ゆめのうちに、十五夜の月のいつるをまぢかねて

ゆめにや見んとまどろみにけり

申つゝ、つるに、そのこいとけにけり。かきねて、つりきよ御そてに
すかりて、又、いつと申ければ、あこきや、とはかりおほせありて、
かへらせ給ひ、さて、のりきよは、一すんのとうしみ、五すんにき
りて、かきたてゝる、あふらひいまた、きえぬうち³⁴に、百しゆのう
たを、つらぬるほと、か人なれとも、いせのうみ、あこきかうら
にひくあみも、たひかさなれは、あらはれそする、といふうたをしら
すして、十九と申とし、もとゆひきりて、にしへなけ、そのなを、さ
いきやうほうしと、よはれけるも、さなから、をよはぬこひとこそ、
うけたまはれ。

いかなる、かきのもとの、きそうしやうは、御としつもりて、六十八
と申には、そめとのゝきさきのみやを、こひたてまつり、つゝ³⁴ゝに、
そのこひとけすして、せきのしみつに、かけ見れば、そうしやう、あ
をきをにと、けんじつゝ、八まんさいを、へたまひしも、ひとへに、
およはぬこひゆへなり。

それ、てんちくの、しゆつこきやうは、いかなれは、ほしのみやを、
ゆめに見て、それをこいちにめされて、つるに、そのこひとけすして、
こうか川へ、身をなけたまふも、さなから、およはぬこひゆへなり。

ゆめにや見るとまどろみそする

と、つるに、そのこひとけければ、かきねて、のりきよ御たもとにす
かりて、さてまた、いつをと申ければ、あこきやとはかりおほせあり
て、かへらせ給ひけり。さては、のりきよは、一すんのとうしみ、五
ぶんにきりて、かきたてたる、あふらひいまた、きえぬうちに、百し
ゆのうたを、つらぬるほと、かじんなれとも、いせのうみ、あこぎ
がうらにひくあみも、たひかさなれは、あらはれそする、といふこゝ
ろをしらすして、十九といふに、もとゆひきりて、にしへなけ、その
なを「³⁴さいきやうほうしと、よはれけるも、さなから、こひゆへとそ、
うけたまはる。

いかなれは、かきのもとのそうちやうは、御としつもつて、六十八と
申には、そめとのゝきさきのみやを、こひたてまつり、つるに、その
こひとけすして、せきのしみつに、かけ見れば、そうしやう、あをき
おにと、けんじたまふ。そのまうねんのかゝるゆへ、みやすところは、
あかきおにと、けんじつゝ、八まんさいを、へたまひしも、ひとへに、
およはぬこひゆへなり。

それ、てんちくの、しゆつはきやうは、いかなれは、ほしのみやを、
ゆめにみて、それをこいちにめされつゝ、つるに、そのこひとけすし
て、こうがかわに、身をなけ給ふも、さなから、およはぬこひゆへな
り。

およはぬこひとさふらふは、ほんふの身として、神や仏をこい³⁵たてまつりてこそ、けにも、およはぬこひそとは、さふらふへけれ。ほんふか、ほんふをこひたらんは、なにか、くるしう候へき、いかにやきみ、とそおほせける。

八たん

けにや、九ちうのたう、くりん、たかしと申せとも、つはめかとへは、したにありときく。つるぎのやいはの、きるとても、いわのかどをば、けつらぬぞ。そのふのたけは、たかきとて、たうりてんへは、のほらぬ物。三か³⁶わは³⁷かつる八はしの、くもてに物やおもふらん。一しゆのかけ、一かのなかれをくむも、これみな、たしやうのえんそかし。ふゑによる秋のしか、いのちをすつるもこひゆへなり。なつのむしの、ひに入も、たまむしとかやにすかされて、みをいたつらになすとかや。かゝる心のなき物までも、こひのみちに、まよふとかやきく。きみは、るなかの人なれは、くわしやは、みやこの物として、のへのくもるをいて、のえのしほちを、へたてさふらひしかとも、³⁸き³⁹みと、くわしやとのなかわの、あふせを、たかひにまかせてこそ、いままで、ひとりはおはすらん。いかにやきみ、とそおほせける。しやうるり、此よしきこしめし、かへらせ給へや、みやこのとの、あ

およはぬこひとは、ほんふの身として、かみやほとけをこひたてまつりてこそ、けにも、およはぬこひにて、さふらふなり。ほんふをこひたらんには、なにか、くるしかるべき、いかにやきみ、とそおほせける。⁴⁰

八段

けにや、九ちうのたうの、くりん、たかしと申せとも、つばめとべは、したにあり。つるぎのやきばは、はやきとて、いわのかどをば、けつらぬ物ぞ。みねのたけは、たかきとて、とうりてんゑは、とをらぬもの。三か⁴¹はにかくる八はしの、くもてに物や思ふらん。一じゆのかけ、一かのなかれをくむ事も、これみな、たしやうのえんそかし。ふへにあきのしかの、いのちをすつるもこいゆへなり。なつのむしの、ひにいるも、たまむしとかやにすかされて、身をいたつらになすとかや。かゝるころなきものまでも、こひのみちには、まよふときく。きみは、るなかの人なれとも、くわしやは、みやこのものとして、このへのくもるをいて、八へのしほちを、へたてさふらへとも、⁴²き⁴³みと、くわしやとのなかわの、あふせを、まちてこそ、いままで、ひとりはおはすらん。いかにやきみ、とそおほせける。しやうるり、このよしきこしめし、かへらせ給へ、みやこのとの、あ

すになるならば、はくのちやうしやの、みゝに入、かねうりきちしか
けにんこそ、あるかたへ、ちかつきたりとて、ものゝふにもおほせ
つけ、こうちへいたし、あき人にてにわたり、しぎい、るぎいに、お
こなはれんとき、はかなき身つからを「うらみ給ふな。かへらせたま
へや、みやこの殿、とそおほせける。御さうし、きこしめし、あすは、
いかにもならはなれ。たとひ、るさい、しきいに、おこなけるとも、
くわしやかためには、めんほくなり」とかくさまゝの給へは、し
やうるり、此よしきこしめし、此とのは、せうしにさかしき人に、お
はしますぞや。すかしてみん、とおほしめし、つるに、いなとも申さ
はこそ、わらはと申は、こそのはるのころよりも、ちゝにおくれたて
「まつり、そのために、大さんねんのうちに、せんぶの御きやうを、
よみたてまつるみにて、ひるは、一ふの御きやうをよみたてまつる。
よるは、一万へんのねんふつ、おこたらず、あかふしたてまつるなり。
身つからは、なからへつるとおほしめせ。しやうしは、くるまのわ
のことし。なとか、めくりあわさらん。かつうは御身のためなるへ
し。御きやうにおそれをなしたまへや、このとの、とそおほせける。

御さうし、きこしめし「いかにやきみ、きこしめせ。せきとめらせし、
川のみつも、つるにはもれて、なかるゝ物。たけのふしゝ、よをこ
めて、すへまでおもへとさふらふかや。それ、てんちく三きうほつし

すになるならば、はくのちやうしやの、みゝにいり、かねうりきちじ
がけにんこそ、ひめかかたへ、ちかつきたるとて、ものゝふにおほせ
つけ、こうちへひきいたし、あき人にてにわたり、るさひに、おこな
はれんとき、はかなききみを、うらみ給ふな。かへらせたまへ、みや
このとの、とそおほせける。御さうしは、きこしめし、あすは、いか
にもならはなれ、たとひ、るさひに、おこなはれ候とも、くわしやか
ためには、めんほくなり。とかくへんじをのたまへや。ちやうるり、
このよしきこしめし、このとのは、しよじにこざかしき人にて、おほ
しますぞや。すかしてみん、とおほしめし、いかに、いなと申さはこ
そ、わらはと申は、こそのはる「のころよりも、ちゝにおくれたてま
つり、そのために、たひ三ねんに、ならぬうちに、せんぶのきやうを、
よみたてまつりさぶらふ。ひるは、一ぶのきやうをよみ、夜るは、ね
んふつ、けうやう、をこたらず、あかうしたてまつるなり。だひ三ね
んすきてそのゝちは、ともかくも、やはきに、みつからあるならば、
ながくつまとおほしめせ。しやうじは、くるまのわのことし。なとか
は、めくりあはさらん。かつうは御身のためなるへし。御きやうにお
それをなし給へ、みやこのとの。

御さうしは、きこしめし、きみ、よくゝきこしめせ。せきとめられ
し、おかわのみつ、もれて、なかるゝもの。たけのふしゝ、よをこ
めて、すへまで物をおもへとや。三きうほうしは、あしくわうの、

は、いかなれば、あしくわうの、ひめみやに、あひなれそめし、御
こには、しんか大しんを、まうけたまふ。これも、こいちのゆへそか
し。

いかなれば、しかてらの上人は、御とし八十三と申に、きやうこくの
みやすところ、あまりに、そのおもかけの、いふせき³⁸に、御とし十
七と申に、みすのほかまで御いてありて、御てはかりをたてまつる。
上人は、御てはかりをたまはりて、一しゆの哥をぞ、あそはしける。

はつはるのはつねのけふのたまはゞき

てにとるからにゆらくたまのを

とあそはしければ、みやすところは、きこしめし

いさゝらはまことのみちにしるへして

我をいさなへゆらくたまのを

と上人、御てはかりをたまはりて、三とこのむねに「をしあて、つ
るに、こひとけたりしかは、みやすところは、たゝならず、御くわい
にんありて、ほとなく、ゑちせんの、つるかの津と、いつのさかいな
る、あち山にて、御さんのひほを、とき給ふ。かれをとりあけて見
給へは、おもては六、御ては十二あり。もとは、あち山と申せとも、
それよりはしめて、あちの山とそ申ける。かの物、やかて、とそつ
てんに、あかりたまひて、八十おつこうをへて、そのち、ほんてん

ひめみやに、あひなれそめて、御こに、しんかだいじんを、まふけ給
ふ。「これも、こいちのゆへそかし。
³⁹」

いかなれば、しかてらの上人は、御とし八十と申に、きやうこくの
みやすところを、こひたてまつり給ふ。みやすところは、あまりに、そ
のおもかけ、いふせきに、御とし十七と申に、みすのほかまで御いて
あり。御てはかりをたてまつり、上人は、御てはかりをたまはりて、
一しゆのうたをぞ、あそばしける。

はつはるのはつねのけふのたまはゞき

てにとるからにゆらくたまのを

とあそはしける。みやすところは、きこしめし、

いさゝらはまことのみちにしるへして

われをいさなへゆらくたまのを

しやうにんは、御てはかりをたまはりて、さんこのむねにおし「あて
ゝ、つるに、そのこひとけたりしかは、みやすところは、たゝならず
す。御くわいにんとそ、うけたまはり候。くわひにん、つもれば、ほ
ともなく、ゑちせんのくに、つるかのつに、いつのさかへなる、あら
ちやまにて、御さんのひもを、御ときある。かれをとりあけたまへは、
おもてはむつ、御ては十二あり。もとは、あらしやまとそ申ける。か
のもの、とそつてんゑ、あがり給ひて、八十おつこうをへて、そのゝ

よりあまくた⁽³⁹⁾一り給ひて、つるかの津に、けいたいほきつとあらはれて、ほくろく⁽³⁹⁾たうを、しゆこし給ふも、さながら、こひちとうけたまはる。

扱、おのゝこまちは、人のおんねんかゝれる、とかにより、つるに、きやうらんして、のへをすみかと、さため、よもきかもとの、ちりとなり、けんしの、女三のみやは、かしは木のゑもんのかみに、あひなれそめて、かほる大しやうをうみ給ふ。ひかるけんしの大しやう、きこしめし、かくなん⁽³⁹⁾一

たがよにかたかねをまきしと人とはゝ

いかゝいはねのまつはこたへん

とあそはしけるも、ゆらひは、こひのいはれなり。

かやうに申、くわしやも、三さいより、ちゝにをくれたてまつり、万ふの御きやう、おこたらず。ひるは、三ふのらやこたおき御す。よるは、六万へんのねんふつを、さらにおこたる事なし。しやうしのところへ、ふしやうしの、くわしやか、よりあひて、二世の物かたりを申さんは、なにか、くるしかるへきぞ。

しやうるり⁽⁴⁰⁾「此よしきこしめし、わらはと申は、これ、なにとなくいやしき、しはのいほりにてきふらへとも、三世のしよふつは、つねに、やうかうなり給ふ。わらはに、かたそり給ふなよ。ほとけに、おそれ

ち、ぼんでんよりあまくたり、つるがのつに、けいたいほきつとあらわれて、ほくろく⁽⁴⁰⁾たうを、しゆごしたまふも、さながら、こひちとうけたまはり候。

さて又、をのゝこまちは、人のおんねんかかれる、とかにより、つるに、きやうらんして、のべをすみかと、さためつゝ、ゑもきかもとの、ちりとなる。けんじの、によさん⁽⁴⁰⁾のみやは、かしはきのゑもんのかみに、あひなれそめて、かほる大しやうをうみ給ふ。さころもの中せう、きこしめし、

たがよにかたかねをまきしと人とはゝ

いわねのまつはいかゝこたへん

とあそはしけるも、ゆへは、こひちのいはれなり。

かく申、くわしやも、五さいのとしよりも、ちゝにおくれたてまつり、まんぶの御きやう、をこたらず。ひるは、三ぶの御きやうよみ、よるは、六まんへんのねんぶつ、みたきやうをよみ、さらにおこたることもなし。しやうじどころゑ、ふしやうじものか、まいりあひてもあらばこそ、しやうじとしやうじか、まいりあひて、のちのよの物かたりを申さんに、なにか、くるしう候べき。

じやうるり、このよしきこしめし、わらはと申は、これ、なに⁽⁴¹⁾となくいやしき、しつかふせや、しばのいほりにて候へとも、三世のしよぶ⁽⁴¹⁾つ、やうがうならせ給ふ。わらはに、かたそりたまふな。ほとけに、

をなし、御返りあれ、とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、きこしめし、いかにや君、
仏もこひをめさるればこそ、うろちよりむろちにかよふ、しやかたに
も、やしゆ大しんの御むすめ、やしゆたらによに、あ(40ウ)いなれそめて、
御こには、らごらそんしやを、まうけ給ひ候なり。かみたにも、むす
ふの神とて、をはします。百王百たいまで、まもらんとちかひ候、神
たにも、いせのしんめいと、御たちある。そのほか、あつたのみや、
すわのみやうしん、いつ、はこね、みわのみやしろまで、なんたい、
によたたいは、おはします。ましてや、もろくの三ほう、くわこ、
せんせのむかしより、こんにち、こよひにいたるまで、むすひたまへ
るちきり也。(41オ)「なんによに、わかうの、なさけをは、いかて、そむき
給ふへき。ほんなう、すなはち、ほたひなり。しゆしやう、すなはち、
ほとけなり。一ふつかいせんこんしや、とくとときは、たにのくち木
も、ほとけなり。まんほう一如と、とくとときは、みねのあらしも、の
りのこゑ。しよほう、しつさうとくわんすれば、ほとけもしゆしやう
も、ひとつなりと、ふつほう、せせほうになぞらへて、おほくのこと
はを、つくされけり。」(41ウ)

九たん

しやうるり、此よしきこしめし、こはいかに、此とのは、しやうしに

をそれをなし給へ。御かへりあれ、とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、きみ、ほとけも、こひをめさればこそ、こ
しちよりむろじゑかよふ、しやかたにも、やしや大しんの御むすめ、
やしゆたらによに、あひなれそめて、御こに、らごらそんじやを、ま
ふけ給ふ。かみたにも、むすぶのかみとて、おはします。百日百やま
て、まもらんとちかへ給ふ、かみたにも、いせしんめいと、御たちあ
る。なみのたかくら、あつたのみや、すはの上下、いつ、はこね、に
つくわうざんのやしろまで、なんたひ、によたひ、おはします。まし
てや、もろくのしよぶつ三ほう、くわこ、けんせのむかし(45オ)より、
けふ、こよひにいたるまで、むすひ給ひつるちきりなり。なんによ、
くわうこうの、なさけをは、いかてか、そむきたまふべし。ほんなう、
すなはち、しやうじ。しやうじ、すなはち、ねはんなり。一ふつかい
せんこんしやう、ときくときは、たにのくちきも、ほとけとなる。ま
んほう一によと、きくときは、みねのあらしも、のりのこゑ。しよほ
う、じつさうとくわんすれば、しやうもひとつなりと、ぶつほうにな
ぞらへて、おほくのことばを、つくされける。

九段

しやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、このとのは、しよし

さかしき人にて、ましますや。今よりのちは、物をいはしとおほしめし、こわた山にはあらねとも、たゞくちなしにとて、をともせず。

御さうし、きこしめし、やまとことはになぞらへて、おほせけるこそ、おもしろけれ。いかにやきみ、みちのへの、人めしのふにあらねとも、物をいわしときふらふかや。つの国の、なにはいり江にあらねとも、あしともよしとも、いはしとや。我わがこひは、物によく／＼たとふれば、しなのなる、あさまのたけのふせいかな。つゝるのみつにもさもにたり。つるなきゆみにもにたり。つなかねこまにもたとへたり。ねぎゝのうへのあられとかや。したはくきにもたとへたり。ふゑ竹のふせひかや。一むらすゝきのありさまかや。ふたまた川ともいひつへし。きよみつきかともいひつへし。「なちのを山のふせひかや。おきこくふねにもたとへたり。うつせみにもたとへたり。こきくれないのふせひかや。うつみひのありさまかや。のなかのしみつにさもにたり、とおほせければ、

しやうるり、此よしきこしめし、いかにや物をいわしと思ひへとも、人のかたより、うたをかけられて、哥の返事をせぬものは、こたうりんゑのこなたなる、山のしたに、むりやうこかうをへて、したなきしやしんとむまるゝ物。（43）人のかたより文をえて、ふみの返事をせぬものは、まうもくに、むまるゝものなり。かへり事斗はせはや、とおほし

にこさかしき人にて、ましますぞや。いまよりのちは、物をいわしとおほしめし、こわた山にはあらね（44）とも、たゞくちなしにとて、をともせず。

御さうしは、きこしめし、やまとことはになぞらへて、おほせけるこそおもしろけれ。いかにやきみ、みちのくの、人めしのふにあらねとも、物をいわしときふらふかや。つのくに、なにはいりゑにあらねとも、よしともあしとも、いわしとや。わかこひを、物によく／＼たとふれば、しなのなる、あさまのたけのふせいかな。つゝ井のみつにもさもにたり。つるなきゆみにもたとへたり。の中のしみつにたとへたり。つなかねこまにもさもにたり。ねぎゝのうへのあられかや。したふくすにもたとへたり。ふゑたけのふせいかな。一むらすゝきのありさまかや。ほそたにかわのみつなれや。うつすみなわのふせいかな。二またかわのふせいかな。きよみつきかのふせいかな。なち（45）のおやまのふせいかな。おきこくふねにもさもにたり。けちやうのおひのふせいかな。うつみひにもたとへたり、とおほせければ、

しやうるり、このよしきこしめし、いかにものをいわしとおもへとも、人のかたより、うたをかけられて、うたのかへしをせぬものは、これ五たうりんゑのこなたなる、山のしたに、むりやうこかうをへて、したなきじやしんにむまるゝもの。人のかたよりふみをえて、ふみのかへしをせぬものは、まうもくに、むまるゝもの。へんじはかりはせはや、

めし、いかにや、みやこのとの、あさまのたけとのたまふは、もえたつはかりの心かや。のなかのし水とのたまふは、かきわけまいるときふらふかや。つるなきゆみときふらふは、ひくにひかれぬたとへかや。ねさくのうへのあられとは、おちよのはかりのたとへかや。したはくきとのたとへは、たゞ一よこめよとき⁴³「ふらふかや。一むらすくまときふらふは、おちてひとつになれ、との心かや。

うつせみ又はなほのたとへは、たゞひとすちにと、おもひきれときふらふかや。ふたまた川のふせひとは、めぐりあえとの心かや。きよ水さかのふせいとは、人めしけきのたとへかや。おきこくふねときふらふは、こかれて物をおもふとかや。なちのお山のふせひとは、そのこみこかれて、うへにけふりのたゞぬとや。こきくねなひときふらふは、いろに⁴⁴「いつるときふらふかや。

しやうるりこせんは十四なり。御さうしは十五なり。十四十五との事なれば、なれうなれしの、すまふくさ、きやうけん、きよになぞらへて、ことにはなを、さかせける。

御さうし、きこしめし、いかにや君、うつの山への、つたのみち、たえこそなかれ、ほそ みちのくのあさかの、ぬまの花かつみ、かつみ

とおほしめし、いかにや、みやこのとの、あさまのたけときふらふは、もえたつはかりのふせいかや。つゞ井のみつのふせいかや。のなかのしみつときふらふは、かきわけておもふとかや。つなかぬこまときふらふは、ぬしなき物¹⁶「とのおほせかや。つるなきゆみときふらふは、ひくにひかれぬたとへかや。ねさくのうへのあられとは、ひかはおちよとのおほせかや。したふくすのふせいとは、もとはひとつにて、心をくたくとかや。ふただけのふせいとは、ひとよこめよときふらふかや。一むらすくまときふらふは、たゞ一ときになひけとかや。ほそたにかわのふせいとは、一どはおちてひとつになれ、との心かや。

うつすみなわのたとへとは、たゞひとすちと思ひきれとかや。二またかわのふせいとは、めぐりあへとのころかや。きよみつさかのふせいとは、人めしけきのたとへかや。けちやうのおひのふせいとは、むすひてあへとのころかや。おきこくふねときふらふは、こかれて物を思ふとかや。なちのおやまのふせいとは、申はかなへとのふせいかや。「うへにけふりのたゞぬとかや。¹⁷

しやうるりこせんは十四なり。御さうしは十五なり。十四と十五の事なれば、なれうなれしの、すまふくさ、きやうけんきよになぞらへて、ことにはなを、さかせける。

きこしめせ。うつの山への、つたのみち、たへこそなけれとも、みちのくの、あさかのぬまのはなかつみ、見る人にこひまざる。しもつけ

る人にたゞいまさり、しもつけの、むろのやしまに、たつけふりも、
風になひくとまき物を。みつに「もまるゝ河やなきも、またにひかり
をはなさんとて、ほたるに、やとをかす物を。よしやあしとて、きり
すてゝ、けふりもくれなるも、もとはひとよに、とまる物。かせにも
まるゝくさぎだに、つはさにやとを、かすとまき。

しやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、このとは、しよし
にさかしき人にてありけるや、とても、女人にむまれなは、かやうの
人に、あひなれて、くさのまくらのかたゝねと、つゆの「なさけをこ
めはや、なとゝおほしめし、人のおもひをきる物は、しやしんとむま
るゝ物。あけなは、はゝのちやうしやの、みゝにいり、いかなるめい
にも、あはゝあへ、なひかはや、とおもへとも、いくらの大みやうせ
うみやうの、ことはを、つくさせ給ひたる物を、つるにもちるす、返
事せて、かねうりきちし、てうせきしこうの、みやこのくわしや、此
くわしや、こよひしも、なひかん事、とおもへとも、むかし、おにのた
てた「りし、いしのと、なさけにあくと、まき物を、とおほしめし、
よひは、さかもり、よもなかはには、もんたう、ふけかたの事なるに、
たかひのさんけ、めされけり。

十たん

の、むろのやしまに、たつけふりも、かせにはなひくとまきものを。
みつにもまるゝかはやなきも、またにひかりをはなさんとて、ほたる
に、やとをかす物を。よしあしとて、きりすてらるゝ、くれたけも、
もとに一よは、とまる物。かせにもまるゝくさぎだに、つまにはやと
を、かすとまき。

じやうるり、このよしきこしめし、こはいかに、此とは、しよしに
ござかしき人にてありけるそや、とても、によにとむまれなば「
かやうの人に、あひなれて、くさのまくらうたたねも、つゆのなさ
けをこめはやなん、とおほしめし、人のおもひをきるものは、じやし
んとむまるゝものなるを、あけなは、はゝのちやうじやの、みゝにい
り、いかなるめにも、あわはあへ、なひかはや、とおほしめし、さす
か、なひかしものとはおもへとも、むかし、おにのたてたりし、いし
のと、なさけにあへと、まきものを、よひは、さかもり、夜なかは、
もんたう、さ夜ふけかたのことなる、たかひにあひにあひ給ふなり。

(白紙)

「18」

十段

しやうるり御せんは、いわきをむすはぬ御身なれば、はなたのをひの一むすひ、とけぬほとこそ、久しけれ。かしまの三のちかひにて、なひきそめさせ給ひける。みきはこほり、うちとけて、られうのた⁴⁶もと、ひきかさね、かみならば、むすふのかみ、ほとけならば、あひせんわう、きとならば、れんりのえた、とりならば、ひよくのとり、なをもふかくぞ、ちきられける。

御さうしは、ちよを一よにも、もよを一よにもなしたく、よをなかくれ、とおほしける。あまのいわとを、たてこめて、此よはやみにならばなれ、此まゝあれかし、おほしめす。とかくふけぬる、こよひなれば、ほとなく、にはとり、こゑくに、わかれをつくるぞ⁴⁶あはれなる。きをんしやうしやにあらねとも、しよきやうむしやうの、かねのこゑ、ひよきつゝ、今をかきりと身にはしむ。たれともしらぬ人なれと、つゆのまくらになれそめて、今さらわかれのかなしきよ。よろつよを、なれたりとも、いかてかこれに、まさるへき。こかうのてんも、すきゆけは、人もや、ゆめをさますらん。やもめからすも、なきわたる。よは、ほのく⁴⁶とあけにけり。しやうるりは、なこり⁴⁶のそてをしほりつゝ、いとまこいをは、めさるれと、なこりをしうぞ、おほしめす。

しやうるり御せんは、いわきをむすはぬ御身なれば、はたのおひの一むすひ、かしまのかみのしのひにて、なひきそめさせ給ひける。みきはこほり、うちとけて、られうのたもとを、かさねて、かみならば、むすふのかみ、ほとけならば、あひせんわう、きならば、れんりの⁴⁶ゑた、とりならば、ひよくのとりよりも、なをもふかくぞ、ちきらせたまひける。

御さうしは、こよひをは、ちよを一よ、もよを一よ、とたへても、なをななかかれ、とそおほしける。あまのいわとを、たてこめて、この世はやみにもならばなれ、此まゝあれとぞ、おほしめす。とかくふけぬる、こよひなれば、ほとなく、にはとり、こゑくに、わかれをつくるぞ、あはれなる。きをんしやうしやにあらねとも、しよきやうむしやうの、かねのひよき、いまをかきりと身にしむ。たれともしらぬ人なれとも、つゆのまくらになれそめて、いまさらわかれのかなしさは、ちよよろつよを、なれたりとも、いかてかこれには、まさるべき。五かうのてんも、すきゆけは、人もや、ゆめを見さらん。やもめからすも、なきわたり、夜は、ほのく⁴⁶とあけにけり。御さうし、なごりのそてをしほりつゝ、いとま⁴⁶をこうてぞ、御かへりある。しやうるり、このよしきこしめし、それに、とくまりたまひて、やうてうふひて、わらはともにも、ちやうもんさせ、ねうはうたちにも、ひわ、こと、ひかせ、たひの御つれく⁴⁶をも、なくさめ給へ、

御さうし、此よしきこしめし、それかしも、さこそそんし候へとも、
 たのみたる、あき人の、いそきたひたち候へは、さこそ、たつねさふ
 らふらん。つゆのいのち、もしもなからへ候は、うきよは、くるま
 のわのことく、めぐりてきぬる事あらは、よそになしてもとひ給へ、
 とおほせありてそ、なき給ふ。

しやうるりこそんは、御さうしの、たもとを、ひかへつ、ひろ
 んまてそ、いてたまふ。かゝるおもひし、うくひす、かすめるそらの、
 はなそのに、さえつりたれば、御さうし、とりあへすこそ、あそはし
 けれ。

わかれゆくおもひをとふる此やとの

花をおしみてなくかうくひす

しやうるり、このよしきこしめし、

君もゆき花もとまらぬ岩なれば

おしみてなくかうくひすのこゑ

御さうし、きこしめし、かさねて返事に、かくはかり、

いとしく花ちる里は物うきに

なにをなけくそ⁴⁸にはのうくひす

とあそはして、ゆきもやうてそ、たくれける。

はくのちやうしやは、ゆふへ、ひめかもとへ、やさしきふるのねの、

みやこのとの、とそおほせける。

御さうしは、きこしめし、それかしも、さこそはおもひ候へとも、あ
 き人の、いそきたひにて候へは、さこそは、たつね候らん。つゆのい
 のちの、もしもなからへ候は、うきよは、くるまのわのことく、め
 くりてきぬる事あらは、よそになしてもとひ給へ、とおほせありてそ、
 なき給ふ。

しやうるり御せんは、御さうしの、られうのたもとを、ひかへつ、
 ひろんまて、いて給ふ。おりふし、うくひすの、はつにかすめる、
 はなそのに、さえつりければ、御さうし、とりあへすこそ、あそはさ
 れける。

わかれゆくおもひをとふか此やとの⁴⁹

はなをおしみてなくやうくひす

しやうるり、此よしきこしめし、

いとしく花ちるさとの物うきに

よをうくひすのさのみなくらん

とあそはして、ゆきもやうてそ、たくれたる。

ちやうしや御せんは、ゆふへ、ひめかかたに、やさしきふるのねの、

きこえつる。なにとやらん、ゆきて見はや、とおほしめし、十二ひとへを、ひきしやうすいて、ちやうしやのすみかを、たちいて、ひめ君の御かたへそ、いらせ給ひける。いたわしやな、しやうるり御せんは、はくのちやうしやを見たてまつりて、ときならぬ、もみちをちらしつゝ、ちやうたいに、ふかくそ、し^(49オ)のはれける。御さうしは、御らんして、ちやうしや御せんと、わか身のあひたに、山のいんを、むすひてかけ、ゑんよりしもへ、とんとおり、あふきのしやくを、とりなをし、おもひよらすそ、御しうとめに、けんさんしたり、とおほしめし、ついちの、はたいた、とひこえて、みえのほりをも、ゆらりととひこえ、心は、やはきにとまれとも、そのみは、かねうりきちしと、つれたち、あつまのおくへ、御くたりある。

あらいた^(49オ)はしや、御さうしは、よにしたかへるならひとて、きちしかたちをは、みきにもち、けんしちうたいの、こうねんとうの、御はかせをは、ひたりのわきに、しのはせて、いまたならぬ、竹のふちを、ぬきもち給ひつゝ、四十二ひきのさうたに、うちましり給ひて、御くたりあるこそ、あはれなれ。

きこえつる、いつれの人やらん、ゆきて見はや、とおほしめし、十二ひとへを、ひきしやうすいて、ちやうしやのすみかを、うちいて、ひめきみの御かたへそ、いらせたまひける。いたはしや、しやうるり御せんは、はくのちやうしやを見たてまつりて、ときならぬ、かほにもみちをちらしつゝ、ちやうだひふかくぞ^(20オ)しのはれける。御さうしは、御らんして、ちやうしや御せんと、わか身のあひたに、こやまのいんを、むすひてかけ、わかみには、こたかのいんを、むすひかけ、ゑんよりしたに、とんてをり、あふきのしやくを、とりなをし、おもひよらすも、御しうと、げんざん申さん。はついた、とひこえて、三ゑのほりを、ひらりととひこえて、こころは、やはきにとまれとも、その身は、かねうりきちじと、うちつれて、あつまのおくにぞ、御くたりある。

〔白紙〕^(20ウ)

〔白紙〕^(21オ)

〔白紙〕^(21ウ)

〔絵 第一図〕^(下半卷)

あらいたはしや、御さうしは、よにしたかへるならひとて、きちじがたちをば、みきにはき、げんじぢうだひの、こんねんとうの、御はかせをば、ひだりのわきに、しのはせ、いまたならぬ、たけのぶちを、ぬきいれさせ給ひつゝ、四十二ひきの^(22オ)

〔絵 第二図〕^(下半卷)

ざうだに、うちまじはりて、御くたりあるこそ、あはれなれ。

めいしよくは、とれくぞ。うきもつらきも、とうたうみ、はまな
のはしを、ゆくしほに、さくられてのほる、あまを舟(舟)こかれてものや
おもふらん。さても、たひは物うきに、

めいしよくは、とれくぞ。うきもつらきも、とをたうみ、はまな
のはしの、ゆふしほに、さくられてのほる、あまをふね、こがれて物や
思ふらん。さても、たひの物うきに、まつ(ツ)の

〔絵 第三図〕 今半分

こすゑにかよふ、風のかゑ、入江にひくく、なみのおと、心もつくと、
夕まくれ、いけたのしゆくにも、つき給ひ、やとをいてく、又、そこ
ともしらぬ、ゆくすゑを、はるかになかめましませは、とをきすゑの
く、花ともは、のこるゆきかと、

こすへに、かせかよふ、いり江にひくく、なみのをと、こころをつく
す、ゆふまくれ、いけたのしゆくにも、つき給ふ。いけだのやとを、
たちいてく、そこともしらぬ、ゆくすゑを、はるかに、なかめたまへ
は、とをきこすゑを、なかむれは、花をゆきかと(ツ)

〔絵 第四図〕 今半分

うたかはれ、ならはぬこひを、するかなる、うつ50の山への、うつく
る、ゆめにもあふ山とをるにも、またこゆへしと、おもへ50とも、い
のちなりけりと、なかむれは、心ほそさそ、まさりける。日かすつも
れる、ほともなく、なをえて、をとにきこえたる、するかのかんばら、
たこのうら、ふきあけのはまにこそ、御つきある。

うたかはれ、ならはぬこひを、するかなる、うつ50の山の、うつくにも、
ゆめにも人に、あふ事なき、つたのほそみち、わけすきて、さよのな
か山とをるにも、又こゆべきとおもへとも、いのちなりけると、かな
むれは、ほどなく、日かすつもれは、心ほそさそ、まさりける。なを
えて、をとにきこえたる、するかのかんばら、たこのうら、ふきあけ
にこそ、御つきあれ。(ツ)

十一たん

さても、かの御さうしは、ふきあけにつき給ひて、そのうち、一日は

十一段

かくて、御さうしは、ふきあげにつき給ひて、そのうち、一日は、た

たひつかれ、二日は、かみやみ、三日は、きやへいに、うちふしたまひけるか、

いかにやくわしやとの、きこし⁵⁰めせ。御身のきやあいは、たふうきにてさらになし。これは、大しのきひやうなり。うつりて、人のたすかる事かたし。いかにせん、とそかなしみける。

一日二日せしほとに、はや五日にも、なりしかは、きちしは、やとのていしゆを、ちかつけて、いかに、あるしとの、わか身は、たれとおほしめす。わうしうにかくれなき、ひてひらとの、御たいくわん、かねうりきちしのふたかとて、としに一とつ、みねんく、そなへて、みやこ⁵¹へのほるものにて、一でうもとりはし、こめやか、やとにて候。かのこめやより、あつまへくたり候、くわしやを一人、ことつけ候。このほとの、たひのつかれにや、かせのこちしてきふらふ。よはなさけにて候へは、かいひやうしてたひ給へ。よきにいたはりたまふならば、みやうねんのほりには、御おんをほうし候はんとて、つめよきむまに、こかね十りやう、とりそへて、あるしとのにたてまつる。いとま申て、さらはとて、くわ⁵¹しやとのも、きちしも、そてをしほりつ、いたはしや、御さうしを、そこともしらぬ、ふきあけに、たふひとりうちすてたてまつり、あつまをさしてそ、くたりける。

さて、かの御さうしは、ふきあけに、たふひとり、すてられておは

びのつかれ、二日は、かみやみ、三日は、きやへひと、うちふし給ひける。きちじ、此よし見たてままりて、申けるは、いかにくわじやとの、きこしめせ。きやへひは、たふのふうきにては候はず。これは、たいじのがひびやうなり。うつりて、人のたすかる事かたし。いかにせん、とそかなしみける。

一日二日とせしほとに、はや四五日に、なりしかは、きちじとの、やどのていしゆを、ちかつけて、いかに候、あるじとの、われらを、たれとかおほしめす。わうしうにかくれなき、ひてひらとの、御たいくわんに、かねうりきちじのふたかとて、としに一どつ、御ねんぐ、そなへて、みやこへのほるものにて候。一でうもとりはし、こめやか、やとにて候なり。かのこめ²⁴やより、あつまへくたる、くわしやを一人、ことつて候。此ほとの、たひのつかれかや、かせのこちと候。世はなさけにて候へは、かんひやうしてたひ給へ。よきにいたはり給ふならば、みやうねんのくたりには、御をんおほうじ候はんとて、つめよきこまに、こかねを十りやう、とりいたし、あるじのにたてまつる。いとま申て、くわしやとて、きちじも、そてをしほりつ、御さうしを、そこともしらぬ、ふきあげに、たふ一人うちすてたてまつり、あつまをさしてそ、くたりけり。

〔絵 第五図〕

(25オ)

(24ウ)

します。そのち、此ところのくせとして、しやけんかきりもなかりける。かゝるきひやうをやむ人を、一よも、いゑにはかなふましとて、なきけなくも、十りやうのかねに、こまをば「うけとり、はるかかうしろのはまに、たかまつ、六ほんあるなかに、ほそき竹を、はしらとして、まつのは、とりおほひ、いつくに雨風、たまるへきとも、おほえず、ぬまのまこも、ひきはへて、おけと、ひしやくを、とりそへて、御さうしを、いたしたてまつるぞ、あはれなる。

さるほとに、ふきあけのうら人も、みやこより、あつまへくたるくわしやか、きひやうをいたはり、うしろのはまに、いたされて候か「しやうのこまふえ、ちりき、やうてう、四くわんの、ふき物、こかねつくりのたちと、かたなとを、もちたるか、あの、こくわしやかふんにして、身のまはりに、六万貫か物を、もちたるらん。のちは何ともあらはあれ。いさ、ゆきて、かのたちをとり、しはしも、たのしまん、とおもへは、甘いもの、大しやとけんし、かたなは、しようしやとけんし、ちかつく物を、のまんとおつかくる。これをみる物、きもをけし、おめきさげんで、にけれは「^{53せ}そのち、事とふ人もなし。たま〜こととふ物とては、なきさのちとり、おきのかもめ、ふきあけのまさこ、をとつれわたる、かせよりほかに、をとませす。

そのち、此ところのくせとして、じやけんかきりもなかりけり。かゝるきひやうをやむ人を、一ツいゑにはかなふましとて、なきけなくも、十りやうのかねに、むまをはうけとり、はるかかうしろのはまに、たかまつ、六ほんあるなかに、ほそきたけを、はしらとして、まつのはを、とりおほひ、いつくに雨風、とまるへしとも、おほえねとも、ぬまのまこもを、ひきはへて、おけに、ひしやくを、そへて、御さうしを、いたしたてまつるぞ、あわれなる。

さるほとに、ふきあけのうら人も、みやこより、あつまへくたる、くわしや、きひやうをいたはり、うしろのはまに、いたされてあるか、しやうと、こまふえと、ひちりき、やうてう、四くわんの、ふき物、こかねつくりのたちと、かたなを、もちたるか、あの、くわしやか、身に、六まんくわん、まひたるらん。^{25せ}

〔絵 第六図〕 下半分

のちになにともあらはあれ。いさ〜、かのたちをとりて、しはし、たのしまんとて、うしろのはまへ、ゆきてみれば、たちは、はたいろの、大じやとけんじ、かたなは、小じやとへんじ、つるつくものを、のまんとおつかくる。あれを見るもの、きもをけし、おめきさげんでにけれは、そのち、事とふ人もなかりけり。たま〜こととふものとは、なきさの「^{26せ}

〔絵 第七図〕 下半分

いたはしや、御さうし、いまをかきりと、みえしかは、かたしけなくも、正八まんは、よにもあわれと、おほしめし、こきすみそめの、御ころをもめし、らうそくと、けんしたまひて、いかにや、くわしやとの、なにを、いたはりたまふそや。いつくよりいつくを、とをらせ給ふ」⁽⁵³⁾たひ人そ。かやうに申は、あつまより、みやこへのほる、きやくそうなり。もし、みやこに、しる人ましまさは、ことつてしたまへ。

ねんころに、とくけまいらせん、とそおほせける。いたはしや、御さうし、きもかすかなる、いきの下より、これは、みやこより、あつまへくたる、くわしやか、きひやうを、いたはり、するかのかんはら、たこのうら、ふきあけといふところにて、あらぬにて候か、いまをかきりと見えたりと、三かわのくに、やはき」⁽⁵⁴⁾のしゆく、しやうるり御せんのかたへ、くわしくとくけて、たひ給へ、とそおほせける。

けんしのうちかみ、正八まんは、此よしきこしめし給ひて、いとま申て、さらはとて、すみそめを、しほりつゝ、ふきあけを、たちいでさせたまひて、へんしの間に、三川のくに、やはきのしゆく、つき給ふ。

ちやうしやのかたに、たちより、ひろゑんに、こしをかけ、これは、

ちとり、おきのかもめ、ふきあけのはまのまさこ、をとつれたり。かせよりほかは、おともせず。

いたはしや、御さうしのまくらかみに、たちよらせ給ひ、きもかうしやうに、おほせける。いかにやくわしやとの、なにを、いたはり給ふそや。いつくよりいつくを、とをらせ給ふ、たひ人そ、かやうに申すは、あつまより、みやこ一けん、まかりのほる、きやくそうなり。もしも、みやこに、しる」⁽⁵⁶⁾

〔絵 第八回〕^(全半分)

人ましまさは、事つてし給へ。ねんころに、とくけてまいらせん、とそおほせける。いたはしや、御さうし、きもかすかなる、いきのしたより、これは、みやこより、あつまへくたる、せうくわんか、けひやうを、いたはり候。するかのかんはら、たこのうら、ふきあけに、あらぬさまにてあるか、いまをかきりと見えたりと、三かはのくに、やはきのしゆく、しやうるりのかたへ、とくけてたべ、とそ申ける。

けんしのうちかみ、しやう八まんは、此よしきこしめし、たしかに、とくけ候はん。よきにや」⁽⁵⁷⁾やうしやうし給へ。いとま申て、さらはとて、すみそめの、御そてをしほりつゝ、ふきあけを、たちいで給ひ、へんしのあひたに、三かはのくに、やはきのしゆく、つき給ふ。

ちやうしやの屋かたに、たちよいたまひて、ひろゑんに、こし^をか

あつまのかたより、みやこ一けんに、まかりのほるそうに、御ちやし
 よまう、とおほせ（おほせ）ありて、かへにむかひて、ひとりことをぞ、おほ
 せける。あちきなしとよ、なむさんほう、むかしか今にいたるまで、
 こひ程つらき物はなし。ゆへをいかにと、たつぬるに、あふてわかれ
 の、こひやらん、あはてうらむる、こひやらん。みやこより、あつま
 へくたる、くわしやにてありけるか、いかなる人を、みそめてか、こ
 ひのやまふにふししつみつるか、かんはら、たこのうら、ふきあげと
 いふところに、まつのかかけをかこい（おほせ）つ、一日二日とせしほとに
 けふ三七日に成と、おほゆると、いきのしたより申せしか、はや、む
 なしくそなりつらん。なむ三ほう、とぞおほせける。れいせん、この
 よしうちきいて、いかに御さう、きこしめせ。そのとの、としはい
 くつはかりの、ふせいにて候やらん。御さう、きこしめし、ちいさく、
 ひんのかみ、すこしちゝみて、あくまで、色しろくさうらいつる。い
 しやうは、いかに候ひしそ、こかねつくりのたち、かたな、もたせ（おほせ）
 たまひて候かと、とひ給へは、御さう、おほせには、されは、大かた、
 百まんきの大しやうといふとも、見くるしからし、といひもあへす、
 かきけすやうにぞ、うせ給ふ。

れいせん、此よしうけたまはり、いそぎ、しやうるりこそんの、すみ
 かに入、此よし、かく申せは、しやうるりこそんは、むねうちさ（おほせ）
 き、いつそや、きちしか下人と、あひなれしとて、はゝのふけうをか

け たれば、あつまのをくよりも、みやこ一けんに、のぼるそうにて
 候。御ちやのしよまふ、とあり、かべにむかひて、ひとりことをぞ、
 おほせけり。あちきなしとよ、なむさんほう、むかしか今にいたる
 まで、こひほとつらきものはなし。ゆへをいかにと、たつぬるに、あ
 ふてわかれの、こひやらん。あわせうらむる、こひやらむ。みやこよ
 り、あつまへくたる、くわしやなるか、いかなる人を、みそめてか、
 こひのやまふとふししつみ、する（おほせ）かのかんはら、たこのうらに、る
 つ、一日二日とせしほとに、けふ三七日になると、おほゆると、い
 きのしたより申せしか、はや、むなしくやなりつらん。なむ三ほう、
 とぞおほせける。れんせいとのゝ、いてたまひ、としは、いくつはか
 りの人、ふせいは、なにと見えて候やらん。ふせいちいさく、びんの
 かみ、すこしちゝみて、あしまて、いろしろく候か。いしやうは、な
 にと候そ、こかねつくりのたちに、かたなを、もたせ給ひて候かと、
 とひ給へは、おほかた、たつね給ふありさま、すこしもたかはず。百
 まんきの大しやうといふとも、くらからじ、といふもあへす、かきけ
 すやうに、うせ給ふ。

れんせい、このよし見たてまつり、いそぎ、しやうるりの、すみかに
 かへり、かくと申せは、むねうちさ（おほせ）はき、いつそや、きちじかけにん
 と、あひなれしとて、はゝのふけうをかうふりて、二百四十人のねう

ふむりて、二百四十人の女はうたちをもそゑす、めのと一人そへて、
ちやうしやのすみか56オより、はるかのをくに、あらぬさまにて、をし
こめられしも、かのおきな56オなき人の、ゆへなるに、うきよのならひ、う
らめしやと、なみたをなかし、なげかせ給ふ。

れいせん、このよし見たてまつり、ともに、なみたをなかし、申ける
は、いかにやきみ、きこしめせ。こゝにて、なげかせ給はんより、か
の、すかたをはかり也とも、御らんせは、おとにきこえし、するかの
くに、かんばら、たこのうらとかやに、たつねてくたらせ給ふへし。

もたへさせ給ふを、見た56ウてまつるさへ、かなしく候。御くたり候は
ゝ、いつくまでも、わらはも御とも、と申せは、しやうるり、なのめ
ならず、よろこひ給ひて、さらは、思ひたゝんとて、いまたならばせ
たまはぬ、たひのそらに御すかたをやつして、くたりたまふ。

今、はしめの、たひなれは、御あしより、いつるちに、みちのくきは
も、ちしほにそみ、なみたを、みちのしるへにて、たとらせ給ひける
ほとに、月日にせきもりあらされは、やはきのしゆくくと、ふきあけと
の57オ「そのみち、なんしのためには、五日ちと申を、九日にこそ、つき
給ひける。

さるほとに、しやうるりこそんは、たこのうらに御つきありて、うら
ものをちかつけて、いかに申さん、うらのとの、みやこより、あつま
へくたる、くわしやか、やまふにふしいたる、しろしめされて候か。

はうたちをも、そへられず、ちやう28オ「しやのすみかより、はるかの
くを、しばのいほりをむすひつゝ、あらぬさまにて、おはしますか、
此よしを、きこしめして、いとゝおもひぞ、まさりける。

れんせい、此よしみたてまつりて、申ける。をとにきこへたる、する
かのくに、かんばら、たこのうらとかやに、たつねてくたらせ給へ、
と申ければ、

しやうるり御せんも、くたらせ給へ、と申ければ、

しやうるり御せんも、なのめならず、よろこひたまひて、いまたな
らはぬ、たひのすかたに御身をやつし、くだりけるぞ、あはれなる。

いまをはしめの、たひなれは、御あしよりも、あゆるちに、みちのく
きはも、ちしほにそみ、なみたを、みちのしるべにて、たとらせ給ひ
けるほとに、月日にせきもりすへされば、やはきのしゆくくと、ふきあ
けの、そのあひた、おとこのためには、五日と申、そのみちを、九日
にこそ、つき給ひけれ。

さるほとに、しやうるり御せんは、たこのうらに御つき28ウありて、う
らのものをちかつけて、おほせけるは、いかに、うらのとの、みやこ
より、あつまへくたる、しやうくわんか、やまふを、わつらいてある

いつくのうらにて候ぞ。をしへてたへ、ととひ給ふ。こたへていわく、
いさゝかしらぬ、申ける。

そののち、しやうるりこせんは、十二ひとへ、めしたる、御こそて」
を、一かさね、みちゆき人に、とらせ給ひて、かのゆくゑ、とひ給へ
は、ひめきみの御すかたを、つく／＼と見たてまつりて、あらおそろ
しや。此うらへは、けしやうのものゝ、きたれるそとて、あしをはや
めて、ゆきければ、うら人申けるは、このさとのならひにて、ふじの
だけより、としにひと、人をとるか、おとこか、女をとらんとては、
みめよきおとこかくたり、女人か、おとこをとらんとては、みめよき
女人か、くたりけるか、ことしは、なんし」をとらんとて、たゞい
ま、女か、くたりたるそとて、うらのものとも、こと／＼、とうさい
へ、にげかくれて、ひと一人もなかりけり。あさましやとも中／＼に、
いふへきやうもなし。さてもあるへき事ならねは、たかきみね、ふか
またに、うしろのはまに、くたりありければ、その日もほとなく、く
れにけり。

こゝやかしこに、たちより給へとも、御やと参らせする人もなし。そ
のよ、うしろのはまに、きよきまさをかたし」きて、ちとり、かも
めともろともに、ねをのみあらそひ給ひける。このうらのならひにて
ふきくるあらし、はけしくて、なみと、まさこをふきたてゝ、たかき
ところは、ひきくなり、ひきゝところは、たかく成、さてこそ、ふき

よし申は、いつくかやどにて候ぞ。それ、をしゑてたべ、とそおほせ
ける。いさしらす、と申。

そののち、しやうるり御せんは、十二一重を、めされたる、御こそて
を、かさねて、みちゆき人に、とらせたまひて、かのゆくゑを、とひ
給へは、ひめきみの御すかたを、つく／＼と見たてまつりて、あらお
そろしや、此はまへ、けしやうのものか、きたれるそと、あしをはや
めて、ゆきければ、ふきあけのうら人申けるは、此さとのならひにて、
ふしのたけ、としにひと、人をとるか、おとこか、おんなをとらんと
ては、みめよきおとこかくたり、おんなか、おとこをとらんとては、
みめよきおんなか、くたりけるが、こと／＼に、なんしをとらんとて、
たゞいま、おんなか、きたれるそとて、うらのものども、こと／＼、
とうさいに、にげかくれ、人一人」にんもなかりけり。あさましやとも
なか／＼に、いふへきやうも、なかりけり。さてもあらぬ事なれば、
たかきみね、ふかまたに、のこるところもなかりけり。うしろのはま
に、おさがりあれば、その日もほとなく、くれにけり。

こゝやかしこに、たとり給へと、御やどまいらせける人もなし。その
夜は、うしろのはまへに、きよきまさをかたしきて、ちとり、かも
めともろともに、ねをのみあらそひ給ひけり。此うらのならひにて、
ふきくるあらし、はけしくて、なみに、まさこをふきたてゝ、たかき
ところは、たかくなる。さてこそ、ふきあけのうらとは申けれ。いた

あけとは申けれ。いたはしや、ひめきみ、れいせんとのと、たゞ二人、十二ひとへの、御つまを、よせくるなみに、ぬらしつゝ、なみたとももに、なきあかさ、あかさせ給ふぞ、あはれなる。」59オ

十二たん

よもしんかうに、なりぬれは、けんしのうちかみ、正八まんは、よにもあはれと、おほしめし、十四五はかりの、とうじとけんし給ひつゝ、うしろのはまに、御いて有。しやうりこせんの御ありさまを、御らんして、なみたをおさへて、のたまひけるは、いかにや、なんちかたつぬる、くわしやは、このはまのうしろなる、六ほんまつのもとにいたされてゐたりしか、はや、むなしくや成58ウ「つらん。むらからすきわきしか、きのふけふとは、いきしらすとて、ひめきみの、たもとをひかへて、をしへ給ひしか、かきけすやうに、うせ給ふ。

しやうりこせんは、ゆめのこゝちして、うれしき、かきりもまします。ふたりの人は、うしろのはまの、まつはらを、こゝやかしこと、たつね給へは、いたはしや、御さうし、あらきはまへの、しほかせに、つかのことくに、ふきあけたる、まさこのしたに、うつもれ給ふ。す

はしや、ひめきみは、れんせいとのと、たゞ二人、十二ひととの、御つまを、よせくるなみに、ぬらしつゝ、なみたとももに、なきあかさせたまひけり。

十二段

夜もしんかうに、ふけゆけは、けんじのうちかみ、しやう八まんは、よにもあわれと、おほしめし、十四五はかりの、どうじとけんし給ひつゝ、うしろのはまに、御いてあり。しやうりこせんの御ありさまを、御らんして、なみたをおさへて、のたまひけるは、いかに、なんぢがたつぬる、くわしやは、此はまへのうしろ、六ほんおひたる、まつのもとに、いたされていたりしが、はや、むなしくやなりつらん。むらからすの、さわきしが、きのふけふは、いきしらす。いきせ給へ、ひめきみとて、しやうり御せんの、御たもとをひかへて、をしへ給ひしか、かきけすやうにうせ給ふ。」30オ

〔絵 第九図〕 今半分

しやうり御せんは、ゆめさめて、いかなるかみの御つけぞと、うれしき、かきりまします。夜もほのくと、あけぬれは、二人たちいて、うしろのはまの、まはりを、こゝやかし」30ウ

〔絵 第十図〕 今半分

かたも、見え^(60オ)たまはず。

こゝに、まさこの中よりも、こかねつくりの御はかせの、いしづき、すこし見えたりける。しやうるりこそんは、これをたのみに、おほしめし、れんせいとのと、たゞふたり、かいてのやうなる御にて、なぐくまさごを、ほり給ふ。まさこのなかよりも、をけと、ひしやくを、ほりいたす。

いよく、これにちからをえて、なをくほりて、み給へは、さもあさましき、すかたなる、御さうしを、ひきいたし給ひける。^{60ウ}うつくしかりける御すかた、しほめる花の、ことくにて、見るに、なみたも、とくまらず。うつもれたるまさごを、きぬのつまにて、うちはらひ、ひさに、かきのせたてまつり、てんにあふき、ちにふして、かなしみ給ふ御ありさま、あはれといふも、をろかなり。

いかにさふらふ、みやこのとの、ふえただけにはあらねとも、一よのちきりに、なれそめし、しやうるり、これまで参りたり。心さしを、うけたま候は、今一と、よみかへらせ給へ^{61オ}とて、むねにあて、りうていこかれ給ひとも、そのかい、さらになかりけり。

こと、たつねたまへは、いたはしや、御さうし、あらきはまべの、しほ風、つかのことくに、ふきあげたる、まさこのしたにぞ、うつもれ給ふ。すかたかたち、見えたまはず。

こゝに、まさこのなかよりも、こかねつくりの御はかせの、いしづき、すこし見えたり。しやうるり、此よしなために、おほしめし、れんせい

い^{31オ}

〔絵 第十一図〕〔上巻本文〕

とのと、たゞ二人、かやてのやうなる御にて、なぐくまさごを、ほり給へは、いたはしや、まさこの中より、おけと、ひしやくを、ほりいたす。

いよくこれにちからをへて、なをくほりて、見給へは^{31ウ}「あさましき、すかたなり。御さうしを、とりいたし給ひける。いつくしかりける御すかた、しほめる花の、ことくにて、見るに、なみたも、とくまらず。うつもれたるまさごを、きぬのつまにて、うちはらひ、御ひざに、かきのせたてまつり、てんにあをき、ちにふし、かなしみたまふ御ありさま、あわれといふも、おろかなり。

いかにや、みやこのとの、一夜のちきりに、なれそめて、しやうるり、これまでまいりたり。こゝろさしを、うけ給ひ候は、いま一たび、よみかへられ給へとて、むねにあて、かほにあて、りうていこかれ給へとも、そのかい、さらになかりけり。

ひめきみは、あまりのこのかなしきに、しほみつにて、てうつ、う
かいして、天にあふき、ねかはくは、にほんこく、六十六かこく、大
小の御かみ、そのほかのしよしん、しよぶつ、あひみんなうしう、た
れ給ひて、たとひ、くわしや、ちやうごうなりとも、いま一たひ、へ
んしの間、このよへ、かへし給へと、かんとんをくたき、いのり給へ
は、まことに、しよしん、しよ⁶¹ぶつの御はからひにや、しやうるり
こせん、なみた、御さうしの、くちのうちへなかれ入、ふらうふし
の、くすりとなり、すこし、いきいてたまひけり。

しやうるりこせん、是にちからをえ、ところくへ、しゆくくはん申
されける。まつ、いつのくに、そうたんけん、みしまの、さんたう大
みやうしん、御あはれみをたれ給ふならば、やはきのちやうしや、わ
らはなり。しつちまんほう、あまたかすをつくして参らせ、まつ一は
ん、こん⁶²しのにしきの、御とちやう、六十六おらせ、八しやのかけ
おひ三百三十三すち、五しやくのかつら三百三十三、八つはなかたの、
からのかくみ三百三十おもて、十二のはこにそへて、参らすへし。
まはきのそや百や、そろへて、いかきいわせて参らすへし。うのはな
おとしのよろい三十三りやう、四はうしろのかふと卅三、あけのいと
にて、かみまきたて、むまのけそろへて卅三ひき、ひかせて参らす
へしと、ふかく⁶²きせいを申されければ、しよしんもあはれとおほし
めし、いつくよりもしらす、十六人の山ふし、とをりあはれ給ひて、

ひめきみは、あまりのかなしきに、うしほにて、てうつをつかい、あ
をき、ねかはくは、につぼんこく、六十六かこくの、大小の御かみ、
そのほかしよちん、しよぶつ、あひみんなふでう、たれ⁶²給ひ、たと
ひ、このくわしや、ちやうごうなりとも、いま一ど、へんしのあひた
なりとも、この世に、かへし給へと、かんとんをくたき、いのり給へ
は、まことに、しよしん、しよぶつの御はからひにや、じやうるり御
ぜん、なかせさせ給ふなみた、御さうしの、くちのうちへなかれい
り、ふらうふしの、くすりとなり、すこし、いきいてたまひけり。

しやうるり御せんは、これにたのみをかけ給ひて、ところくへ、し
ゆくくわん申されけり。いつのくに、は、そうさんごんげん、三しま
は、さんとう大みやうじん、御あわれみをたれたまへ。このとのを、
いま一ど、よみかへらせ給ふものならば、やはきにもちたる、七つの
たからを、一つ、しだい³²に、まいらすべし。さてまた、こんぢ
のにしきの、御とちやう六十六おらせ³²八しやくのかけおひ三びやく
三十三をりて、十二のてばこそへて、まいらすべし。いかきを、まば
のそやももや、そろへて、るかきをいわせてまいらすべし。しろかね
つくりのたち百ふり、そろえて、とりいをたててまいらすべし。うの
花おとしのよろい三びやく三十三りやう、しほうしろのかぶと三十三
はね、あけのいとにて、かみまきて候、むまのけそろへ三十三ひき、
ひかせまいらすへしと、ふかくきせいを申されければ、しよしんもあ

いささらは、われ／＼か、きやうりきのとく、あらはさんとて、まま／＼にかちしたまひ、かきけすやうにうせ給ふ。

そのうち、御さうしは、ほとなく、いきいてたまひけり。

しやうりせんは、なのめに、よろこひて、れいせんとのと、二人かなかに、をきたてまつり、ないつ、わらふつ、このほと、心つくし^{63オ}のありさまを、かたり給へは、御さうしは、ゆめのさめたることちして、さもやつれたる御そてを、しほらせ給ふこそ、あはれなる。

さるほとに、御さうしをひきくして、はるかのおくに、しほのいほりの、それとなくけふりのたつを、しるへにて、たちよらせ給ひて、一のやとをそかり給ふ。うちより、八十はかりの女はう、一人たちいて、こはいかに、ひめこせん、いつくよりいつくへ、とをらせたまふそよ。かく申身つからも、はたちに^{63ウ}「たらぬ、こを一人もちて候か、このほと、せけんにはやり候かせにさそはれて、けふ七日になりさふらふ。たひは、なにかくるしかるへき。いやしきしつかふせやにて候へとも、こなたへ入せ給へとて、一のやとをたてまつる。しやうり御せんは、てをあはせ、ありかたのことや、是はまさしくは／＼せんの、身つからを申させ給ひたる、やくしによらいのけしんかと、い

われとおほしめし、いつくともしらぬ、十六人のやまぶし、とをりあわせ給ひて、いさ／＼われらが、きやうりきのみどく、あらはさんと、さま／＼にかちして、かきけすやうにうせにけり。」^{33オ}

〔絵 第十二回〕^{33ウ}

〔絵 第十三回〕^{34オ}

そのうち、御さうしは、ほとなく、いきいたし給ひけり。

しやうり御せんは、なのめならず、よろこひて、れんせひとのと、ふたりの中に、とりこめて、なひつ、わらふつ、此ほと、こ／＼つくしのありさまを、かたり給へは、御さうしは、ゆめのさめたることちして、さもやつれたる御そてを、しほらせ給ふそ、あはれなる。

さるほとに、ひめきみは、御さうしをひきくして、はるかのおくに、しばのいほりを、それとなくけふりたつたを、しるべにて、たちよらせ給ひ、一夜のやとをそかりたまふ。うちより、八しゆんはかりのこ、一人たちいて、こはいかなるひめきみ、いつくよりいつくへ、とをらせ給ふそよ。かく申身つからも、はたちにあまる、こを一人、此ほとせけんにはやる、やまうを、わつらい、むじやうのかせに^{34ウ}

よくうれしくおもはれけり。ひめきみ、あまりのうれしさに、はた
の「まほりより、こかね十りやう、とりいたし、やとの女はうにぞ、
たひにける。⁽⁶⁴⁾女はう、なのめに、よろこひて、いよくかしつき申け
る。

御さうしを、此やとにて、廿日はかりかんひやうし、よきにいたはり
給ひける。ほとなく、もとの御さうかうに、ならせ給ひけるぞ、うれ
しける。

さる程に、御さうしおほせけるやうは、さても、此度の御なさけ、た
とへんかたも、さらになし。山ならば、しゆせんのいたゞきも、なを
ひきし、うみならば、さうかいも「⁽⁶⁴⁾なをあきし。きみにはなれ参らせ、
へんしの間も、なからへしとは、おもはねとも、かくてもさらに、
かなふまし。きみ、是よりやはきへ御かへり候へ。くわしやは、これ
より、あつまのをくへ、くたりぬへし。

さる程に、御さうしは、しやうるりこせんの御心さし、あまりに、せ
つなうおほしめし、こゝにて、なのはやとは、おもへとも、とやあ
らん、かくやあらんと、ちたひもゝたひ心に心を、うかゝい給ふ。ち
うに心をひきかへて、是「⁽⁶⁵⁾ひとへに、みれんしこくのわか身かな、も
しよにもれきこえ、あすはなにもならば、なのはやとおほしめし、
さてもくゞきみ、きこしめせ、われをは、たれとおほしめす。御心さ
しの、ありかたさに、たゞ今なのり申なり。よしともに八人めなり。

さるほどに、御さうしおほせけるは、さても、此たひの御なさけ、た
とえんかたも、さらになし。山ならば、しゆみせんのいたゞきも、な
をひきく、うみならば、さうかいも、なをあきし。きみにはなれまい
らせて、へんしのあひたも、なからうへしとは、おもはねと、かくて
もさらに、かなふまし。きみは、これよりやはきへ御かへりあれ。く
わしやは、これより、あつまのおくゑたるべし。

さるほどに、御さうしは、しやうるり御せんの心さし、あまりに、た
ひせつにおほしめし、こゝにて、なのはやと、おもへとも、とやあ
らん、かくやあらんと、ちたひもゝたひ、こゝろをうかかひたまふか、
ちうにこゝろをひきかへて、これは、ひとへに、みれんしこくのわか
身かなと、もしよにもれきこへ、あすはなにも、ならばなれ。なの
らはやとおほしめし、さてもきみ、をは、いかなるものとか、おほし
めす。御こゝろ「⁽⁶⁵⁾さしの、ありかたさに、たゞいまなのり申なり。よ

ときははらには三なん、うしわかまると申なり。しかるところに、七さいのときより、くらまのてらにのほり、とうくわうはうにて、かくもんしか、此ほと、けんふく⁽⁶⁵⁾つかまつり、けみやうをは、みなもとのけん九郎、しちみやうをは、よしつねとて、しやうねん十五にまかりなる。かねうりきちしをたのみ、おくへくたり候なり。

もしもなからへてさふらは、みやうねんの、今のころ、かならすまかりのほり、御めにかゝり申へしとて、御なみた、せきあへさせたまはず、せめては、かたみに御らんし候へとて、こんでいの、くわんをんきやうに、一しゆのうたをそあそはしそへて、たてま⁽⁶⁶⁾つる。

うつりかをめぐりあふせのかたみには

君わするなわれもわすれし

しやうるり、此よしきこしめし、御なみたのひまより、かくはかり、

あふ事もわかるゝ事もゆめのよに

かさねてつらきそてのうつりか

かやうにあそはして、こかねのかうかい、とりいたし、御さうしにたてまつる。しやうるりこそんは、是よりあとへのみちも、さらにおほえす、いかなるのゝすゑ、山のおくま⁽⁶⁶⁾ても、御ともとこそ、したはれける。

御さうし、きこしめし、それかしも、こそ、そんし候へ共、それ、にほんは六十六かこくにて候。是みな、へいけのよにて候。せめては、

しともには八なん、ときははらには三なん、うしわかと申ものにて候。七さいのとしよりも、くらまのてらにのほり、とうくわうはうにて、かくもんし、此ほと、げんぶくつかまつり、けみやうは、みなもとのげん九ら、じつみやうは、よしつねとて、しやうねん十五にまかりなるが、かねうりきちしをたのみて、おくゑくたり参る。

もしもなからへて候は、みやうねんの、けふ此ころ、かならすまかりのほり、御めにかゝり候べしとて、御なみた、せきあへす、せめてのかたみに、これを御らんし候へよとて、こんでいの、くわんきやうに、一しゆのうたをそあそはしそへて、しやうるり御せん⁽⁶⁶⁾にたてまつる。

うつりかをめぐりあふせのかたみにて

きみもわするなわれもわすれし⁽⁶⁶⁾

しやうるり、此よしきこしめし、

あふ事もわかるゝこともゆめのよに

かさねてつらきそてのうつりか

かやうにあそはして、こかねのかうがひを、とりいたし、御さうしにかすゝたてまつる。身つからも、いかなるのゝすゑ、山のおくなりとも、御ともとこそ、したわれけれ。

御さうしは、きこしめし、なにかしも、さこそは、そんし候へとも

六かこくか、けんしのよにてもあらはこそ、ろく十六かこくの、さうもくまでも、へいけにこそなひき候へ。われらかすみかは、ふかきみや、いはのほらにて候へとよ。

しやうるり、此よしきこしめし、きみのすみかてましまさは、れう、たつ、さう、とらふす、のへなり（67オ）とも、花のみやこには、まざるへし。あくかれ給ふぞ、あはれなる。

御さうし、きこしめし、われはこれより、おにくたり、よしつねか、せんそのらうとう、ひてひらをたのみ、八十万きの、そのせいを、たなひき、みやこへしやうらくつかまつり、おこるへいけを、ついたうし、にほんを、わかまゝとして、やはきのしゆく、六万貫のところを、きみに参らすへし。

御なこりは、たれもおなし事なれとも、あたこ、ひらのゝ、大てんく（67シ）小てんくを、ちかつけて、おほせければ、

大てんく、うけたまはり、やすきほどの事と、いひもあへす、むちを
一うつとおもへば、九日にくたるみちを、へんしか程にぞ、やはきの
しゆくにぞ、つき給ふ。

かくて御さうしは、ふきあげを御たちありて、あし

↓まんぎの、そのせひを、たなびきて、みやこへしやうらくつかまつり、おこるへいけを、ついたうして、にほんを、わかまゝにして、やはきのしゆく、六まんくわんのところを、きみにまいらすべし。

御なこりは、おなし事なれともとて、あたこ、ひらのゝ、大てんぐに
小てんぐを、ちかつけて、おほせけるは、いかにめんく、きく給へ。
此ふたりの人を、やはぎがしゆく（36オ）と、おくりとつけてたひ給へ、と
おほせければ、大てんぐ、やすきあひたの御事と、いひもはず、む
ちをひとつ、うつとおもへば、九日にくたりつるみちを、やはぎのし
ゆくゑ、へんしのうちにぞ、つきたまふ。

かくて御さうし、ふきあげを御たちあつて、あし*

↙それ、にほん六十六かこくにて候か、六十くにか、へひけの世にて、
せめて、六くにか、げんじの世にてもあらばこそ、六十六かこくは、

さうもくまで、へひけの世にこそ、なびき候へ。われらがすみかは、ふかきたに、みや、いはのほら、人かけとをき、もりのしたこそ、つゆのやとりにて候へ。

しやうるり、此よしきこしめし、きみのすみかてましまさば、りう、たつ、さる、とらふすのべ、くしらのよりくる、しまなりとも、花のみやこにまさるべく候、とあくかれ給ふそ、あはれなる。

御さうしは、きこしめし、かくてはかなふ^(36ウ)まし。いさめはや、とおほしめし、われは、これより、おくに、よしつねかせんそのらうとう、ひでひらをたのみ、八十↓

から山にさしかり、いつは、そうたうこんけん、みしまは、さんたう大明神、心しつかに、ふしおかみ、おひそ、こい、まりこ川、にけまつ、おひまつ、さかりまつ、かたをかい、うちわ^(68オ)たり、すみた川を、ゑんしよとて、あをきのまつはらにかり、はなはさかねと、さくら川、身にはきねとも、ころも川、おほくのめいしよを、うちすきて、わうしうにきこえたる、いはひのこほり、ひらいつみ、ひてひらかたちこそ、つき給ふ。^(68ウ)

*から山にさしかり、いつは、そうさうこんけん、みしまは、さんとう大みやうしん、ころろしつかに、ふしおかみ、おひそ、こひそ、まさりかわ、にけ松、おひまつ、さかり松、かたせかわをうちわたり、すみたかはをば、ゑんしよとて、あをきの松はらに、さしかり、花はさかねと、さくらがわ、身にはきねとも、ころもかわ、おほくのめいしよを、うちすきて、わうしやうにきこえたる、いわひのこほり、ひらいつみ、ひでひらかたちこそ、つきたまふ。^(37セ)

(白紙)^(37ウ)

古活字版系写本「浄瑠璃」二種について

はじめに

一 二写本の書誌

ここに影印で複製紹介する奈良絵本「浄瑠璃」(仮題)は、関川亨氏所蔵本であり、今回初めてその全容を紹介するものである。残念なことに、本書は零本であってその上巻に当る部分を欠く。しかしながら後に説くごとく、この書の価値はすこぶる高いものがあり、是非これを江湖に広く紹介したくお願いしたところ、幸いに関川氏の御快諾を得、その翻刻をも加え、ここに収載することになった。

なお、翻刻部に本書と同系の、より近接した本文を有する北海道大学附属図書館所蔵「ちやうるり」をも併せて掲出した。昭和五十二年収載許可を申請し、九月二十一日付で許可を頂いた時点ではこの書もまた未翻刻の書であったが、『室町時代物語大成』第七に昭和五十四年二月に紹介され、周知の書となった。この種の本文の上巻分内容を知る上でも、また本文対照の意味からも必要と考え、敢えて両書を掲出させていただく。各御所蔵者の御許可を頂きながら荏苒今日まで遅延したことを、深くお詫びをする次第である。

両書の書誌はつきのごとくである。

〔浄瑠璃〕 関川亨氏蔵奈良絵本

写本、大形本一冊。(零本、上巻欠)。 縦三二糎、横二三・七糎。
表紙、原装カ、薄茶色、上下に約二糎巾の水色の帯がある。
見返、白色。

題簽、なし。

紙質、鳥の子紙(表紙も共紙)。

本文、十二行。 縦二五・七糎、横一九・二糎、一・五糎巾十二行の
罫を骨筆で引く。

丁数、三十七丁半(但し、本書は袋綴であるが、中に絵の部分
を半丁分切り取った箇所が数ヶ所あり、その箇所をも一丁として数
えている。切り取り部については、後に詳述する)。

画図、二十二オ・二十二ウ・二十三オ・二十三ウ(四図連続)。二
十五オ。二十六オ・二十六ウ・二十七オ(連続図)。三十ウ・三
十一オ・三十一ウ(連続図)。三十三ウ・三十四オ。計十三図。

段数、六段……十二段。六段分。(本文中に各段の段数は記されて
いるが、八段のみ上方に記す。記し忘れての所為であろう)。

印記、表紙右下に「野島／蔵書」の方形朱印がある。

備考、表紙の上下の水色帯と同じものが、二丁ウの本文上下、二十
二丁オ・二十三丁ウの画面の上下などにもある。なお、これと同
様の用紙を、ニューヨーク公立図書館スペンサーコレクション

『いわやの草紙』二冊本の上巻初丁に見た。因みにその書にも、

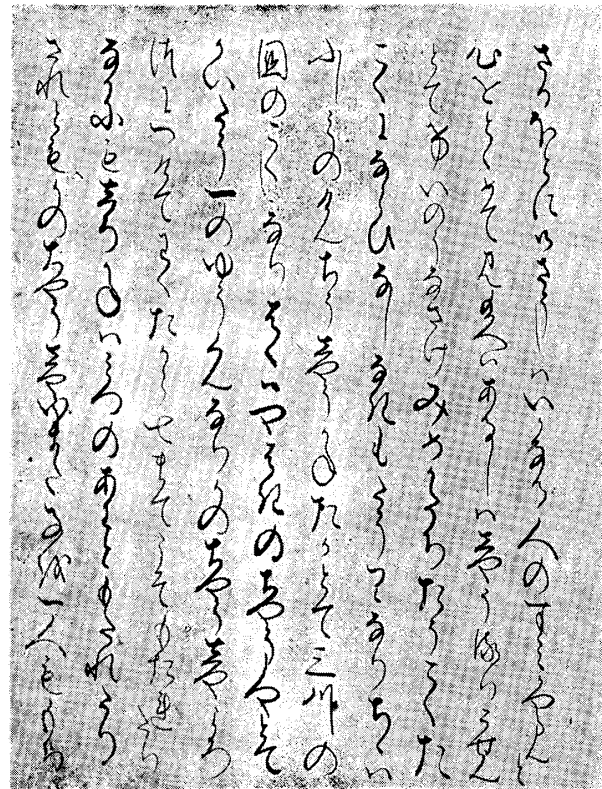
「野島／蔵書」の印記を見る。なお、天理図書館蔵奈良絵本『し
やうるり御前物語』の表紙にも同印記がある。

本書の筆写年代は、桃山期から江戸ごく初期にかけての筆写と
考えられ、寛永期を下ることはあるまい。七段冒頭の一丁半の手
が一見異なって見えるが、筆癖は同一人物と思われる。十九丁ウ
から二十丁オ・二十丁ウを見れば、時間的間隔をおいて書いた結
果と知り得るであろう。

本書には乱丁、落丁があるが、写真複製では乱丁部を正し、途
中の落丁部には白紙を二丁分添えて原形に近い形になるよう留意
した。したがって、複製の丁付は、その乱丁を正した後の私に付
した丁付である。

ちやうるり

北海道大学附属図書館蔵



北大本初丁

写本、大形本一冊。縦二七・三厘、横二〇・一厘。

表紙、茶色地、雷紋つなぎに牡丹模様空押し(裏表紙は別の白紙)。
見返、白色。

題簽、中央に、朱色無地の紙に「ちやうるり」と記す。

紙質、やや厚手の楮紙(末部に一部裏打がなされている)。

本文、十行。

丁数、六十八丁。

画面、なし。

段数、二たん……十二たん。初段は、内題「ちやうるり」とあるだ

けで記されていない。

備考、巻末に「小野氏通女筆 さるほとに 罫」と短冊形の極め札を貼る。本書の筆写年代については、近世初期とするほか目下のところ決め手をもたない。

二 関川本の画図をめぐる

本書は六段以降の、下巻分に相当する零本であるが、この書の前半部九段までには画図はなく、十段目より現われてくる。しかし、これは本来各段に挿まれていた画図を、本書の場合前半部のみ切り取った所為であって、そのことは袋綴の半葉部を随所に残し、その箇所が決して絵の存した箇所と推定されることから推察される。それら切り取り箇所をも含めて考察するならば、本書の絵の配置は以下のとおりである。

一 才白紙の位置、半丁切り取り。ここに本来絵があったか。ただし、不審な点はその裏の九行分の空白であって、初め書き損じの用紙を表紙の中芯にでも使ったものかと考えたが、後の箇所（五ウ、二十七ウ）などでも同様の現象が見られ、かつまた、文章が数行分の脱落を経て、次につながっており、中芯などではないと思われる。そこで、そこに絵があったのを半丁切り取ったものか、或いは絵を後で入れよ

うとして半丁分と次の一ウの九行分の空白をとっておいたものか、のいずれかと考えられる。後者の考え方の場合、その白紙部を何らかの理由で切り取ったということになる。

二 才白紙の位置、半丁切り取り。このところに一図があったことはまず確実といえる。そこには本文数行があった。それが欠けているからである。さらに言えば、その絵には二十二才からの連続図と同様、すやり霞同様の効果を狙ったものであるが上下に水色の帯があった筈である。その装飾性がその裏の本文にまで及んだものと思われる。

五才白紙の位置、半丁切り取り。これも二才の箇所と同様、絵か白紙があった筈で、この場合もし後者だとすると絵に半丁と六行分の空白を見込んでいたようである。そうして、ここでは水色帯を上部だけにほどこそうとしていたことが、五ウの境界線（細い境界線だけが上にある）により推察される。一才の場合も、またこの場合でも言えることであるが、初め絵を表と裏の数行分に及ぼそうとし、結局表だけに描き、裏が空白のままになったということも考えられる。それは二十七ウのごとき例もあるからである。こうした奇妙な空間の取り方がなされた理由は、この種初期奈良絵本にみられる、絵巻の絵を草子にかなり忠実にうつそうとする意識のあらわれであろう。本書にみられる行列図の連続図、二十六才・二十六ウ図の、表裏になっても連続図を描こうとする姿勢などにも、そのことが十分うかがえよう。

十八才白紙の位置、半丁切り取り。原本乱丁があるが、正した上でみると、ここに絵が半丁分あり、それを切り取ったもので、本文はつながっているだけに、絵だけのものではなかったことを知る。

二十一才白紙の位置と二十一才白紙の位置、半丁切り取りが共にあったと思われる。袋綴一丁の紙の折れ目が切れたとも考えられないことはないが、虫損部の様子などから切り取りと推定される。しかし、その間に一丁の絵があったとすると、その前後（オ・ウ）が白紙だったということになり面妖である。

二十二才〜二十三才、二丁分連続の行列図。ここから絵が残っている。原図を描いた後、その上の空白部に本文を書いている。上下に水色の帯をすやり霞的に用いていることは前述した。絵巻系画面でも、吉次・吉内・吉六三人の馬上姿と多くの荷駄人足の図を描き、大凡同趣の図柄である。

二十五才、片面図。吉次が黄金十両を宿の亭主（左方）に渡し、介抱を頼む図。近世的風俗に全てが描かれている。

二十六才・二十六才ウ、下半分画面図。太刀・刀が大蛇・小蛇と化して盗人を追い払う連続図であるが、表裏に分れて見開き図を形成しない。絵は単純であるがきわめて雅趣がある。

二十七才、片面図。右の二十六才ウ図と見開きの連続図となっているが、異場面。時間的経過があり、源氏神正八幡が客僧と現じ、御曹

司の枕もとに立ち、伝言を聞く場面。二十七才ウの初め五行分は、二十七才のごとく上半分に書し、六行目から普通に上下使って記しており、少しく空白部がある。ここに表からの連続図を描こうとしていたのかどうか、その意図は明らかではない。三十才ウからの図の展開のように、異場面をも含みながら、図を連続させようとする意識がみてとれ、絵巻的効果をも冊子形の中で表わそうと努めているものごとくである。

三十才。三十一才・三十一才ウと共に三異場面の連続図を形成する。

この図は絵巻系諸本と古活字版系の諸本の本文通り、正八幡が十四五の童子と現じて浄瑠璃御前に御曹司のありかを示す場面。この図で注目すべきは、前にも触れておいた空白部の意味について、示唆されるところがあることである。すなわち、三十才で神が示現し、かき消すように失せたと文章が終り、その情景を示すこの図が描かれる。空間からいえば、最初の行から本文書写は可能である筈であるが、六行分の空白をおいてそのあと、浄瑠璃御前の夢醒めた話を書き始めている。つまり、この本文の書写者は、空白部に時間的経過などの気を感じせしめようとする配慮を行っているものと考えられ、余韻余情を絵と書の間で形象しようとする意図のあったことが推察される。本文書写者が絵の入るところを予想して空けておいたか、絵の描かれた後に書いたかという問題があるが、この例や三十一才ウ図の松林の間の散らし

書きの例などからすれば前の場合は考えにくいように思われる。これより前の空白部の意味も、全てがそうとは言えないであろうが、その視点からも見るべきものがあるかも知れない。

三十一オ。三十ウ図と見開き図をなすが、異場面である。しかし、右図に時間的に連続し、その童子の教えで砂を掘り、太刀を見出し共によるこぶ場面。

三十一ウ。右図と同様、異場面ではあるが、右の経過と直ちに連続し、さらに掘り進んで桶と柄杓を見つけ、いよいよ力を得てなお掘りに掘る二人の動作が、背景の松林に映えて美しく描かれる。このようにこの本の作り手は、冊子形態の中でこれまた懸命に絵巻的効果を發揮すべく、工夫と努力を重ねていることを知り、まことに興味深いものがある。この展開の密度は本書独特のもので、絵巻系諸本や画図のある他本にも見ることの出来ない傾向である。

三十三ウ・三十四オ見開図。十六人の山伏による祈禱のところ。彼等神変の人達が、三人に比しとりわけ大きく描かれている点おもしろい。

三十四ウの次、一丁分落丁がある模様（補足白紙部）。このところ見開き図があったと思われる。その形は、上段に本文が、下段に絵のある形態であった筈である。二百数十字分の本文の脱落がみえ、前のこの形態の箇所例からみて、左右の頁にまたがって上部に本文のあ

ったことを推量させる。この箇所は、他本や古活字版系にもある近くの尼公の庵室で御曹司を介抱する図柄の絵であったと思われるが、この部分の二葉が切り取られたものであろう。

三十七ウ白紙の位置、半丁切り取りがあるが絵の有無は不明。

関川本の画図は、同じ部分を他本（絵巻系・斑山文庫旧蔵本・古活字版）などと比較した場合、一番に図の数が多く、場面に即した細かい描写がなされている点に特色がある。各本それぞれに画図に入り組みがあり、各本間の直接関係をみるのは目下のところ困難である。絵巻系に拠ったとも簡単には言えない。

なお、関川本の三十ウ〜三十一ウあたりの、繊細華麗の専門画家によることが明白な画風のもと、二十一ウ〜二十三ウの粗雑な描線との間には隔たりが感じられる。樹木の緑青のあたりにも、後人の加筆の跡がうかがえ、他筆の混在または後人の改変等の可能性のあることを付記しておく。

三 古活字版系諸本の本文関係について

ここに掲げた二写本は、斑山文庫旧蔵絵巻ともども古活字版系に属する本文系統の書である。すなわち、従来より知られている古活字版

十行本三種と本文の系統は同じで、その古活字版より直接間接に転写されていった多くの写本を含めて、古活字版系本文を形成している。

この系統内における、これら諸本の関係についてみてみよう。その前に斑山文庫旧蔵絵巻についてふれておきたい。この書も従来知られていない一本であるからである。古活字版の本文でいえば、十段目途中、「こかうのてんもすきゆけは：」からはじまり、巻末も数行分を欠く零本で、画図を七図残す一巻の絵巻である。旧蔵者高野辰之氏はその識語で、「文ハ流布本ト大差ナキモノ、如クナレド此ノ方古体ヲ存セリ：」と記されている。この書を初め見た時、僅かの本文であったため古活字版（高野氏の言う流布本）との関係を押さえ得なかつたが、今日現在関川本・北大本とこの書と同種の古写本を知るに及んで、これら三種が古活字版系諸本のうち一連の古形を残す書であることが判明してきた。よって、この書も交え、関川本・北大本・斑山本・古活字版の四者の関係を扱ってみたい。古活字版に三種、その後のその本文を襲った多くの諸本があるが、これらの間では、本文異同はきわめて少く、古活字版と同種とみなしてよいからである。

この系四種の関係を結論づけるならば、それぞれが異種で、祖本より別に分岐したものと言わざるを得ない。四者それぞれが本文に入り組みをみせているからである。しかし、その間でもより近い本文を持つものがあり、大きくみて次の二つの組み合わせに分けられる。北大本

と斑山本、関川本と古活字版がそれである。その校異表を掲げてみてみよう。

北	ゆめのこゝちして、	ナ	シ	うれしきかきり
斑	ゆめの心ちして、	ナ	シ	うれしきかきり
関	ゆめ	さめて、	いかなるかみの御つけぞと、	うれしきかきり
古	ゆめ	させて、	いかなる神の御つけぞと、	うれしきかきり
北	もまします、	ナ	シ	ふたりの人は・
斑	もまします、	ナ	シ	ふたりの人は・
関	・まします、	夜もほのくくとあけぬれば、	二人・	・たち
古	もまします、	夜もほのくくとあけければ、	二人の人は	たち
北	・	・	・	うしろ
斑	・	・	・	うしろ
関	いてゝ、	うしろ		
古	いてゝ、	うしろ		

このように、二本ずつの組み合わせで、互に対応している例が多い。したがって強いて分ければ、四者は二組の親縁関係の書として分けられるのであるが、しかし単純にはそうとばかり言えない面がある。次の例のように、北大本と関川本、斑山本と古活字版の類似した関係をも

見出すことが出来るからである。

北 参 りたり、 ナ シ

斑 まいりたり、いかなるちやうくうにて、ましますとも、みつから

関 まいりたり、 ナ シ

古 参 りたり、いかなるしやうこうにて、ましますとも、身つから

北 ナ シ 心さし を、うけたま候は、

斑 これまでまいりたる、ころろさし を、うけ給り候いて

関 ナ シ ころろさし を、うけ給ひ候は、

古 是 までまいりたる、心さし のほとを、うけ給 ひて

そうしてこれらの関係がからみ合つて出る箇所を示せば次のとおりである。

北 御さうしに、…… たてまつる、しやうるりこせんは、

斑 御さうしに、……これをたてまつりて

関 御さうしに、かすく たてまつる、

古 御さうしに、数くこれをたてまつる、

北 是よりあとへのみちもさらにおほえす、

斑 あまりのかなしさに、 あとへのみちもさらにおほえす、

関 ナ シ 身

古 あまりのかなしさに、 あとへのみちもさらにおほえす、み

北 …… いかなる

斑 …… いかなる

関 つからも、いかなる

古 つからも、いかなる

「かすく」や「身つからも」といったあたりの有無に、最初の北大本と斑山本、関川本と古活字版の相互親縁関係がたどれるが、「あまりのかなしさに」の有無から、北大本と関川本、斑山本と古活字版の親縁関係も同様たどることが出来る。この箇所で、北大本にのみ見られる表現(圈点の箇所)二箇所や、関川本にのみ欠けている箇所なども見てとれよう。すなわち、各本にそれぞれ独自の表現を具有するものがあり、またその本のみ脱文の箇所も少なからずある。後の場合は誤写や意識的省略、依拠本の欠落といった種々の理由によるものである。

このうち独自の行文をもっとも多く持つ本文は、北大本である。この書はまた脱文誤写もすくなくならずあるが、非常に重要な本文を、現存『浄瑠璃』中この本のみ有していて注目される。

浄瑠璃姫と御曹司が遂に結ばれ、後朝の別れの刻が来る。折柄鳴く鶯を見て別れの歌を互いに唱和する場面がある。それが諸本すこぶる

異同が多い。

山崎美成旧蔵写本と奈良絵本の場合、

(浄瑠璃) あすまでといふにとまらぬ花なればのひと

をしまかへてそなくはうくひす
おしみてそなくうくひすのこゑ

(御曹司) いとしくはなちるさとのものはまひしきにうきに

なになくらん はる
おしみてなくかけきのうくひす へ 奈良絵本

とある、その唱和が、赤木甲絵巻と熱海本の場合、

(御曹司) いとしくはなちるさとのものまひしきにうきに

なになくらん はる
おしみてなくかけきのうくひす

(浄瑠璃) あすまでといふにとまらぬはななればは

をしまかへてそなくはうくひす
おしみてそなくうくひす へ 熱海本

というように詠者の順序が変わっているが、これではただ前後しただけ
といえよう。ところが古活字版や前島本古活字版(関川本も)では、御
曹司が別の歌を詠じ、右の諸本では御曹司の歌であるものが、浄瑠璃
の返歌に転じてしまっている。

(御曹司) わかれゆくおもひをとふか此やとの

は
花をおしみてなくかうくひす

(浄瑠璃) いとしくはなちるさとの物うきにうきに

よをうくひすのさのみなくらん へ 前島本

こうした異同の生じた原因は、北大本をみるとその理由が判る。

(御曹司) わかれゆくおもひをとふる此やとの

花をおしみてなくかうくひす

(浄瑠璃) 君もゆき花もとまらぬ岩なれば

おしみてなくかうくひすのこゑ

(御曹司) いとしく花ちる里は物うきに

なになくそにはのうくひす

このように本来御曹司の歌から始まる三首型のものが、山崎本や奈良絵本のように最初の「わかれゆく」の歌を省いたり、関川本や古活字版、前島本のように真中の浄瑠璃の「君もゆき」の歌を省いたりした結果生じた異同であることが判る。後者の場合「いとしく」の歌を二人の唱和にするためには浄瑠璃の詠にせざるを得なかったものであろう。前者の場合浄瑠璃が先に詠じる形となり、それを御曹司先行型に変える本(赤木絵巻・熱海本)も生じた。「君もゆき花もとまらぬ岩なれば」という上句が「あすまでといふにとまらぬ花なれば」といった形に変じたものか、北大本も異同を生じているのか、その原形は明らかでないが、共に同根であることは下句に歴然とあらわれている。このごとく古活字版系の一本に『浄瑠璃』の原形をとどめている箇所もあるのである。

古活字版の本文の不備も、これら新出の三種の写本で補うことができる。例えば吹上の段で瀕死の御曹司を砂の中から掘り出した浄瑠璃

が祈誓をかけると十六人の山伏が出現する。そのところの本文が、

いさ／＼われらか、きやうりきのきとく、あらはさんとて、さま

／＼のかちし給へはハ　　＼しやうり御せん、なのめなら

すに、よろこひ給ひて、れんせい殿、ふたりの中にとりこめて、

ないつ、わらひつ、此ほと心つくしのありさまを、かたりたま

へは、……

とある。ハ　＼箇所の文章の続きが不自然であるが、三古写本では、

ハ　＼部に当るところに、かくのごとき文辞がある。

かちしたまひ、かきけすやうにうせ給ふ。そのうち、御さうしは、

ほとなく、いきいてたまひけり。(北大本)

これにて古活字版に脱文のあることが知られよう。こうした本文関係からも三写本の本文の古形が考えられるのであるが、関川本の書物としての古形を保つ点からも、古活字版系本文の原姿に近いものをこれら三写本に求めることができる。関川本は奈良絵本としての古風のもので、桃山期より江戸期の交のものと考えられ、寛永六年刊の嵯峨本伊勢物語図を襲用している古活字版と同期かそれ以前と目されるだけに、これらの祖本はさらに遡り、古活字版はその系統の一本を活字化したものと考えられる。近時の三写本の出現は古活字版の成立事情に大きい示唆を投げかけるものといえよう。

四 古活字版系本文の位置

現存の『浄瑠璃』諸本のそれぞれの関係については、『じやうりり十六段本』(大学堂刊)において詳述した。結局残存する多くの諸本全てが同根であり、各本それぞれが原本の前部または後部、或いは中間の章段等の一部或いは全部省略したり、文章を間引いていたり、もしくは錯簡のある本をそのまま転写したり、誤写したりする間に、多くの異同が生じたこと等々により、複雑多岐に分れていったものであることを述べた。このように、全て同根の書ではあるが、それでも系統づけや、それぞれの系の特色をたどり得る。

古活字版系の本文は、それら諸本間にあつて如何なる特徴をもつものであろう。本系の書は、比較的古格を多く残すといった善い面と、他系以上に文章の混乱部を多く持つという悪い面と、二面を併せ持つ点に特色がある。

古格や善い本文を持つ点について先ずふれてみよう。

初段、浄瑠璃の申し子の条で、各本の校異を取ると、古活字版は山崎美成旧蔵写本ときわめて類似した文辞を持つことを知る。山崎写本は現存本中一番文章面では瘦せているが、もっとも原姿に近い骨格を有する善本であり、古形を一番に残している。その書と一致点の多い

ところに、古活字本文の古格の残されている跡を知る。その一例をあげれば、初段(古活字版の段数で以下示す) 峯の葉師へ捧げ物を約束する条り、こかねの御たうを、七けん四めむにたてさせ、こうのしもふり、つるのもしろ、からすのぬれいろ、わしのはたうのこかれは、おしのおもひはをもつて、ふかせて、まいらすへし、(山崎本)

とある文辞は、古活字版系にのみ見える。ただし、奈良絵本系に、「しろかねのみたう、七たうたて」とやや近似した文章があるが、大分に違いがある。古活字版系の中でも北大本がこれに一番近い。

すゝめのせうてう、かものまかりば、つるのもしろ、こうのしもふりをもつて、七けん四めんのたうを、ふきたてゝ参らすへしとあって、両者の深いつながりを見ることが出来る。この他、葉師仏の化現のさまやその持物、金の杖、金の足駄がすりへるまで子種を探す条などにも、両者の類似点を多くみる。

二段、姫の門外に立つ御曹司の描写で、他本が古詩古歌を詠して立つと述べられている箇所、山崎写本が古歌の部分で地の文のように変化させてとどめる他は、その詞句はとどめていない。これに対し、古活字版系は古詩(白楽天と劉禹錫の詩句)も、古歌も文中に示している。

二段目、四季の泉水の、南の情景描写に、他本にない独自の本文をこの系は持つ。「みなみのおもての、花そのに、まかき、すいかき、

まはらにて、月見んための、いたひさし、花みんとての、やへひかき、すはまに、いけをほらせて(つづ)とある。この文辞は他系にないが、赤木甲乙絵巻・大鳥絵巻等の画面の中に、忠実に示されており、かつ絵巻系に「すはまに池をほらせつゝ」の僅かの文辞だけが残り、この文章が本来備わっていたものであることを如実に示す。

八段目、精進問答で次のごとき記述がある。

(イ)……しやうしのところへ、ふしやうしのくわしやか、よりあひて、二世の物かたりを申さんは、なにかくるしかるへきぞ。

(ロ)「しやうるり、此よしきこしめし、わらはと申は、これ、なにとなく、いやしき、しほのいほりにてさふらへとも、三世のしよふつは、つねに、やうかうなり給ふ。わらはに、かたそり給ふなよ。ほとけに、おそれをなし、御返りあれ、とそおほせける」

(ハ)御さうしは、きこしめし、いかにやきみ、仏もこひをめさるれはこそ、うろちよりむろちにかよふ…… (北大本)

この(ロ)の「」部は、古活字版系にのみ残り他系は欠ける。淨瑠璃が、我家に三世の諸仏の影向がある。仏を怖れて帰れというこの言葉があつて初めて、(ハ)の御曹司の言葉が生きてくる。山崎写本は(イ)の条(同文ではないが同趣の文)から(ロ)を経ずに御曹司の言葉として、いきなり「むろちより、うろちにかよふ……」とつながる。熱海本は、中間的なつなぎの文辞を少し残しながら、これまた御曹司の言葉とし

て次のような表現を残す。

写

古 いかにも君、 ほとけもこひを、めさるればこそ、

熱 むかしより、かみや仏にもこひちといふしはあるそかし、それ天

写 むろちより

古 うろちより

熱 ちくの、むろちより

この(四)の箇所などは、古活字版系のみに残る古格の部分なのである。そうして、十段目後朝の別れの歌の唱和の条り、三首型が北大本にのみ見られることも前述した。以上が、この系の本文のすぐれている点である。

しかしながら、この系の本文に大きい不備のあることも、見のがすことの出来ない特色である。二段目、四季の泉水揃えの条に、後段に本来位置すべき四季の障子が竄入している。本来西面の泉水描写の中に、「すみやくおきなか、としをへて……四せつの四季をぞ、まねはれたる」と、四季の障子の冬の景が混入している。また、他本では泉水揃えに引き続いてある草子づくしが、古活字版系では七段目御曹司が忍び入って浄瑠璃の部屋にそれを見る形になっているが、これまた位置の混乱によるものである。御曹司が姫の寝所に辿りつき、靡くも

のの例えを引いて、重ねて懸想詞をかける箇所、他本をもとに復原してゆくと、古活字版系の場合大きくこの部分が二つに分れ、一つは八段目冒頭に、一つは九段目末に、さらに九段目最終部の姫の心情表現の中に竄入している。「おにのたてたりしいしのもと、なさけにあくと、きく物を」がそれである。このほか、七段目及ばぬ恋をした例を御曹司が挙げる箇所、西行の引事の前半が脱けており、さらにそれに続く多くの引事の部分(女三の宮・小野小町など)が、八段目志賀寺の上人の引事の後に竄入している。他にも、御ざうつりの箇所の省略がなはだしく、十段目二人の別れの所で逢瀬の短かきを歎く文辞が九段目大和詞の直後にその一部(「しやうり御せんは十四なり……ことはにはなをさかせける」)が、九段目末尾にまた一部(「よひはさかもり……たかひのさんけ、めされけり」)が混入するなど、他本に比しこうした現象が極端に多く、無残に寸断されて散在しているのは不可思議である。

以上見た如く、古活字版系四種の本文問題にふれた。北大本にやや優位な部分の多いことをみた。関川本は先に述べたごとく乱丁・落丁があり、また十二段末本文にかなりの錯綜がみられる。十二段目のそれは丁の途中の乱れであるだけにこの書の依拠本との関係によって生じたものであろう。しかし、全般的には各本それほどの異同はない。

これらを併せ見ること、この系の祖型を望見することができよう。かく三種の写本は、古活字版の本文の成立事情を示してくれるそれぞれ意義のある貴重の書である。古活字版系の書も実は『浄瑠璃』諸本の普通の一系であり、関川本や斑山本で判るようにこれも奈良絵本や絵巻形態をもって伝播されてきた系統の書であった。さすれば、従来のこの系統をもって操浄瑠璃の正本としての性格を強く見ようとする見方は改められねばならない。

それにしても『浄瑠璃』の流れは多岐多様であることを、あらためて再認識させられる。この一系の追及だけでも、直接の継承関係を見ることはできず、多くの転写本の存在の可能性を知るのである。それはとりも直さず、『浄瑠璃』の人気のほどと、その勢力の大いさ拡がりの広汎であることを端的に示すものである。

終りに、貴重の書の紹介を許された関川亨氏、北海道大学図書館、ならびに関川氏本閲覧に際して格別の御世話を頂いた西宮市立大谷美術館三浦照子氏の各位に深甚の謝意を申し上げる。旧斑山本はチャールズ・ダン氏の御配慮によって閲覧出来た。また、撮影には本学文学部技官大橋哲郎氏の、翻刻には新真理子氏の御協力を得た。以上の方々に厚く御礼申し上げる。なお、本稿は『熱海本 上瑠璃』（京都書院刊）の拙稿解説、及び近く刊行予定の『じゃうりり十六段本』（大学堂刊）解説と三部作をなすものであり、互いに支えあうところがある。